



Title	ゴルギアス『ヘレネ賛』に関する文献学的研究：序文、校訂本文及び注釈
Author(s)	大中, 幸乃
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11150号
Issue Date	2013-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k11150
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54666
Type	doctoral thesis
File Information	Yukino_Ohnaka.pdf



博士論文

ゴルギアス『ヘレネ賛』に関する文献学的研究：

序文、校訂本文及び注釈

北海道大学大学院文学研究科

大中 幸乃

目次

記載等に関する注意	p. 2
はじめに	pp. 3-4
第1章 校訂序論	pp. 5-19
第2章 ギリシア語本文及び日本語訳	pp. 21-43
第3章 ゴルギアス『ヘレネ賛』注釈	pp. 44-99
おわりに	p. 100
参考文献一覧	pp. 101-104

記載等に関する注意

1. ギリシア語のカタカナ表記に関して、 ω や η のごとき長音は、「オー」「エー」のように表記する方が元々の音に忠実ではあるが、本論文では読みやすさを重視するため一部を除いて長短を区別せず「オ」「エ」のように表記する方法をとる（例：Ἑλένηは「ヘレネー」でなく「ヘレネ」と記載）。
2. 帯気音 χ , ϕ の表記に関しては、「カ行」「ファ行」の音で記載する。
3. 本論文の執筆に際し参照した参考文献に関しては、書誌情報を参考文献一覧の形で巻末に付している。原則筆者が直接入手したものに限っているが、校訂本など一部例外がある。
4. 参考文献からの引用を行う際は、当該文章をそのままの形で掲載することになるので、文章内で表記の揺れが生じたり、ここで示している方法と異なった表記法を採用する場合がある。
5. 本論文ではギリシア語文を引用する際、極力日本語訳を付す方針をとっているが、翻訳は本論文筆者自身によるものだけではなく、巻末の参考文献一覧にある各種文献から引用している場合が多々ある。

はじめに

本論文は、プラトンの対話篇にその名を残していることで有名な人物でもある、ソフィストのひとりゴルギアスによる演説弁論『ヘレネ賛』を対象に、ギリシア語本文及び日本語訳、注釈に加え、ゴルギアスという人物についての概説を付したものである。

この弁論の主角と言える女性ヘレネに関しては、多くの説明を必要とはしないだろう。彼女はゼウスとレダの娘であり、その美貌は大変なもので、ギリシア中の英雄たちが彼女との結婚を望んだが、最終的にスパルタ王メネラオスに嫁いだ。その後彼女が夫を捨ててトロイア王子パリスと共にトロイアへ行ったことによって、かのトロイア戦争が勃発したのである。そこでは多くの英雄物語が生まれ、現代に至るまで文学作品や映画等のモチーフとして好まれているが、戦争の原因となったヘレネには悪女という認識がついて回るようになっている。

『ヘレネ賛』は、ヘレネに対するゴルギアスの弁護ともいえる弁論である。ゴルギアスは、ヘレネがトロイアへ行った理由として「神」「パリスによる暴力」「言論（ロゴス）」「愛（視覚）」の4点をあげ、そのいずれが原因であるとしてもヘレネは責められるべきではないという論を展開する。ヘレネのトロイア行を事実として認めた上で、彼女を弁護しようという試みは、読者たちにとって非常に興味深いものであつただろう。

言論のみに頼ってあちこちを遍歴するなどして人々に教えを説いたソフィストの伝統は、古代ギリシアにおける民主制の発達とももちろん無縁ではなく、むしろ、議論と説得を旨とするそのような言論環境こそが、民主制の基礎的条件を形作つたとすら言えるかもしれない。そしてこの伝統は、ギリシア文化を熱烈に愛好したキケロなどラテン文人によってラテン語にも受け継がれ、かくて西洋の文化の不可欠な一要素となり今日に至っている。そして、民主主義の根幹を成す議会制は、この言論環境の基礎の上に成立していると言っても過言でない。

これに対して東洋（特に東アジア）においては、例えば20世紀初頭に活動した社会学者M・ヴェーバーによれば、対話的言論よりも文字に依拠した言論のほうが（漢字の文化的重要性のゆえに）優位

を占めたとされ、ソフィスト的伝統は発達を見なかった。このように考えれば、ソフィスト的伝統の有無は、洋の東西の文明を隔てるメルクマールであるとすら言えるかもしれない。

議論と説得という、民主制の基礎的条件が根付いているとは未だ言いがたい我が国において、ソフィストについて学ぶことは決して無意味ではなく、そのソフィストの中でも代表的な存在のひとりであると言えるゴルギアスの弁論技術及びその説得術を研究することには大いに意義があると言える。

第1章 校訂序論

1. ゴルギアスについて¹

ゴルギアスは、シケリア（シチリア）島東岸に位置するレオンティノイというポリスに生まれた。ゴルギアスの生没年について、はっきりしたことはわかっていないが、様々な伝承から推定するに、前485年頃から前380年頃まで生きたと考えられている。

彼の生年に関して、擬プルタルコス（DK82A. 6）はラムヌウスのアンティフォンとほぼ同時代人（アンティフォンの方が少々若い）であるとして、ペルシア戦役のさなか（前480年頃）に生まれたと書いている。また、オリュンピオドロス（DK82A. 10）は、ソクラテスが第77オリュンピア祭期の3年目（前470-69年）の人であることや、ゴルギアスの主要な著作のひとつである『ないについて』²が第84オリュンピア祭期（前444-441年）に著されたことから、ゴルギアスはソクラテスよりも28歳程度年上だとしている。けれどもオリュンピオドロスの記述に関しては、ソクラテスの生年を盛年（アクメー、40歳頃にあたる）と取り違え、様々な師弟関係を同時代のものとしたでたらめな解釈が元になっており、『ないについて』の年代についても、トゥリオイ市建設³が前444年だったことを引きあいに出しただけであるとDielsは注を付している。

『スーダ』（DK82A. 2）では、ゴルギアスの壮年を第80オリュンピア祭期（前460-457年）とするポルピュリオスの考えに対して、もう少し古い人であると考えべきだとしている。一方Wilamowitzはポルピュリオスの「第80（オリュンピア祭期）」に従って、ゴルギアスの生没年を前500/497-391/388年くらいに設定した。彼の推定は他の資料ともほぼ合致するということもあり、

¹ ここでは、Diels-Kranz (DK) の日本語訳版にあたる『ソクラテス以前哲学者断片集』第V分冊から、「第82章 ゴルギアス」の項を中心に情報をまとめている。また、本節および第3章注釈内におけるゴルギアスやその他ソフィストに関するテキストの日本語訳は多く同書によっている。そのほか、納富 2006, pp. 121-174においても、彼の一生やゆかりの深い著名人について触れられているので、ぜひ参照されたい。

² この著作に関しては『自然について』という別題もあるが、本論文では『ないについて』と記載する。

³ このトゥリオイ市は、ディオゲネス・ラエルティオス（DK80A. 1）によれば、ゴルギアスとほぼ同時期に活動した大ソフィストであるアブデラのプロタゴラスが法律を起草したと伝えられているポリスである。ただし、このポリスの建設年に関しては、年代記作者たちが何かと引きあいに出す記念碑的な年号であり、歴史家たちはこの日付を眉唾物としてみていることが指摘されている（DK82A. 10. 原注1の訳者付記を参照）。

『スーダ』の記述はゴルギアスの生年と盛年を取り違えているのではないかという指摘がある。他方、Gerckeは「第80期」ではなく「第88期（前428-425年）」をとっているが、これは『スーダ』の「（ポルピュリオスの想定よりも）もう少し古い人と考えねばならない」という記載には該当する⁴。

そのほか、パウサニアス（DK82A. 7）において、ゴルギアスがテッタリアの僭主イアソンによって厚遇されたという記述がある。その僭主イアソンは前380-370年頃に支配の座にあったとされるが、そのことから、ゴルギアスはこの時代にまだ存命であったことを示すことができる。さらに、アテナイでソクラテスが刑死した前399年において、ゴルギアスは健在であった。このことはプラトン『ソクラテスの弁明』19E（DK82A. 8a）において、ソクラテスがケオス島のプロディコスやエリスのヒッピアスとともに、ゴルギアスの名を口にしていることから裏付けられる。

ゴルギアスは大変な長寿で、フィロストラトスによれば、108歳になっても健康を保っていたという（DK82A. 1）。それ以外にも、アポドロス（DK82A. 10）は109歳、キケロは107歳（DK82A. 12）といった年齢を提示している。しかし、アテナイオス（DK82A. 11）は、クレアルコス『評伝』第8巻なる書物に、ゴルギアスは80歳まで生きたという伝承があることを記している。仮にそれを受け入れるならば、他の証言に比べてゴルギアスの人生はかなり短くなる。けれども、この80という数字について、Dielsは「110」の、Wilamowitzは「100」の誤記とみなしているように、異論が存在することは留意すべきであろう⁵。

ゴルギアスの兄弟として、ヘロディコス（プラトンの対話篇『プロタゴラス』316Dや『国家』406Aのほか、『パイドロス』227Dに登場するセリュンブリアのヘロディコス⁶とは別人である）という人物がいる（DK82A. 2ほか）。彼は医者であった。そのことを実証してくれるのはプラトンの対話篇『ゴルギアス』448Bにおけるやり取りである（DK82A. 2a）。また、同書456Bにおいては、ゴルギアス自身もこのヘロディコスやその他の医者につき従って患者を訪ねたことがあり、医者たちのいうことを聞かない患者を説得したのだと述べている（DK82A. 22）。本論文で扱う著作『ヘレネ

⁴ DK82A. 2. 原注2を参照。

⁵ DK82A. 11. 原注1を参照。

⁶ セリュンブリアのヘロディコスに関しては、加来 2007, pp. 281-282による。

賛』においても、薬と身体に言及している箇所（第14章）がある。このヘロディコスを通じて、ゴルギアス自身も、医術に関するいくつかの知識を得ていたのであろう。

さらに、ゴルギアスには姉妹もいたようである。パウサニアス（DK82A. 7）や『ギリシア碑文集』（DK82A. 8）によれば、ゴルギアスの姉妹と結婚したデイクラテスという人物が、その女性との間にヒッポクラテスという息子をもうけ、ヒッポクラテスの息子、すなわちデイクラテスにとっては孫にあたるエウモルポスが、ゴルギアスの像をオリュンピア神殿に奉納したという⁷。

イソクラテスの『アンティドシス』155-156（DK82A. 18）における証言によれば、ゴルギアスは妻や子供を持つことなく、生涯独身で過ごした。ゴルギアスはひとつのところに定住せずギリシア各地を回りながら弁論術の教育を行っていたため、家族を持たない方がよいと考えていたのかもしれない。しかし、このイソクラテスの証言とは異なる証言が、プルタルコス（DK82B. 8a）によってなされていることは興味深い。その証言によれば、ゴルギアスがオリュンピアにてギリシアの協和を説く演説をするのを聞いたメランティオスは、ゴルギアスが若い侍女に懸想していることにゴルギアスの妻がやきもちを焼いているらしい、協和を説教していながらたった3人しかいない家で心をひとつにさせられないでいると皮肉ったという。

ゴルギアスの人生において、おそらくもっとも大きな出来事といっても差し支えないことのひとつは、前427年に彼が祖国レオンティノイの使節団代表として、アテナイへやって来たことである。

ディオドロス（DK82A. 4）が伝えるところでは、レオンティノイはカルキスからの移民が建設したポリスで、アテナイとはもともと祖を同じくする関係にあった。そのレオンティノイは、同じシケリア島のポリスであるシュラクサイの脅威にさらされていた。シュラクサイの軍事力は強大で、レオンティノイは存亡の危機に瀕していた。そこで、アテナイへ使節団を派遣し助けを求めたのである。その使節団の代表こそ、ゴルギアスその人であった。

⁷ 1876年、ドイツの考古学者たちによって、碑文が刻まれた土台部分がオリュンピアのゼウス神殿付近で発見された。前4世紀前半のもの。Spatharas 2001, p. 9. n. 2も参照。

アテナイへやってきたゴルギアスは、見事に使命を果たした。彼はアテナイ到着後、民会に出席して同盟を求める演説を行った。そこで彼は様々な修辞技法を駆使した演説を行い、アテナイ人たちを魅了したという。そしてアテナイは、レオンティノイとの同盟を結ぶこととなったのである。

このアテナイ訪問に関してSpatharas (2001, p. 12) は、この使節団に関して、トゥキュディデス『戦史』3. 86. 2⁸によって年代がわかるけれども、ゴルギアスという名はトゥキュディデスの記述中に直接あらわれてはいないと述べている。また、プラトン『ヒippias (大)』282bにおいて、ゴルギアスの訪問に関する記述があるにも関わらず、Diels-Kranz版にはこの資料が所収されていないことを指摘している⁹。

ところで、この使節団としてのアテナイ派遣が、ゴルギアスにとって最初のアテナイ訪問であったと多くの研究者は考えているが、Spatharasはこの通説に対しても疑問を呈している。彼のいうところによれば、まず、プラトンやトゥキュディデスといった関連資料には、これが初のアテナイ訪問という明確な記載はなく、さらに前427年が彼の初訪問であればその時既にゴルギアスは60歳程度、かなりの年齢になっているという計算になる。それならば前427年以前にもゴルギアスがアテナイを訪れる機会があったのではないかということである。

さて、アテナイ市民を見事説き伏せたゴルギアスではあったけれども、使節団の成功もむなしく、レオンティノイはそののち滅ぼされてしまい、ゴルギアスは祖国のない身となってしまった。そして彼は、ギリシア本土に活躍の場を移すこととなる。テッタリア (DK82A. 18及び19) やボイオティア¹⁰ (DK82A. 5) などギリシア各地に出向き、有償で弁論教育を行っていたようである。先にも言及したディオドロスの証言 (DK82A. 4) によれば、ゴルギアスは弟子ひとりにつき100ムナという高額の謝礼を受けていたという。

⁸ ἐς οὖν τὰς Ἀθήνας πέμψαντες οἱ τῶν Λεοντίνων ξύμμαχοι κατὰ τε παλαιὰν ξυμμαχίαν καὶ ὅτι Ἴωνες ἦσαν πείθουσι τοὺς Ἀθηναίους πέμψαι σφίσι ναῦς 「レオンティノイの同盟者たちは人をアテナイへ送って、彼らもまたイオニア人であったのだからと、かつての同盟国に対しアテナイ人が軍船を派遣するようにと説得する」という記載がある。

⁹ Spatharasの指摘の通り『ヒippias (大)』282bに、ゴルギアスがやってきたことにソクラテスが言及するという箇所が存在する (Γοργίας τε γὰρ οὗτος ὁ Λεοντίνος σοφιστῆς δεῦρο ἀφίκετο δημοσίᾳ...)。

¹⁰ ボイオティアのプロクセノスなる人物が、ゴルギアスの教えを請うたというクセノフォンの記述がある。

ゴルギアスは、弟子の教育だけでなく、弁論家の本領ともいえる演説も数多く行っている。そのうちデルフォイで行った演説に関してフィロストラトス（DK82A. 1）が伝えるところによれば、ゴルギアスは祭壇上から朗々と演説¹¹を行い、それによってデルフォイに彼の黄金像がおかれることとなった。パウサニ阿斯やプリニウスは、ゴルギアスが自身でデルフォイに黄金像を献納したと伝えているが、キケロはパウサニ阿斯らと異なり、彼がギリシア人の間で受けた栄誉によるものと伝えている。またプリニウスは、この黄金像が建てられたのは第70オリュンピア祭期と伝えているが、この数字は破損の疑いが高く、Bergkが提案する第90という読み替えに従った場合、前420年頃というありそうな年代が算出されるということである¹²。

パウサニアスの伝えるところでは、ゴルギアスの像は金箔で覆われていたように読めるが、キケロはパウサニ阿斯と異なり、黄金で造られていたと書いている（パウサニ阿斯、キケロ、プリニウスすべてDK82A. 7）。

ゴルギアスの先達にあたる人物としては、彼の祖国レオンティノイの南に位置するポリス、シュラクサイの人であるテイシ阿斯及びコラクスの名が挙げられる（DK82A. 14）。パウサニアスの証言によれば、テイシ阿斯はゴルギアスのアテナイ訪問に同行したとされるが、これは誤解であると考えられている（DK82A. 7及び原注1）。

ゴルギアスに影響を与えたとされるもうひとりの人物は、同じシケリア島のアクラガス出身で、前5世紀最大の自然学者とされるエンペドクレスである。ゴルギアスとエンペドクレスの師弟関係については『スーダ』（DK82A. 2）、オリュンピオドロス（DK82A. 10）など複数の資料に言及されている。中でも興味深いものがディオゲネス・ラエルティオス（DK82A. 3）の証言である。そこでは「彼（ゴルギアス）についてサテュロスが伝えるところでは、エンペドクレスの魔術をこの目で見たと言っていたという」と伝わっている。

ただし、ゴルギアスとエンペドクレスを結びつけることに関しては異論もある。例えばDodds（1959, p. 7）は、ゴルギアスとエンペドクレスが結びつけられるのは彼らが同じシケリア島の出身

¹¹ 『ピュティア演説』（DK82B. 9）のこと。

¹² DK82A. 7. プリニウスの資料の原注1を参照。

であることからだろうと述べている。とはいえ、『ヘレネ賛』においてみられるエンペドクレスとゴルギアスとの間の類似など、注視すべき点は存在する¹³。

テイシアス、コラクス、そしてエンペドクレスから学んだと伝えられるゴルギアスは、自身も多くの著名人に影響を与えた。ゴルギアスの弟子として、フィロストラトス（DK82A. 1）は、クリティアス¹⁴や、その才気と美貌でもってアテナイ人たちを魅了し、シケリア遠征へと駆り立てたアルキピアデス¹⁵、さらにアテナイの黄金期を築いたペリクレスなどの政治家や、『戦史』で名高い歴史家トゥキュディデス、悲劇作家のアガトンなどを挙げている。ただしペリクレスに関しては、ゴルギアスが初めてアテナイにやってきたのが従来通り前427年であると仮定する場合、アテナイに蔓延した疫病によって前429年の時点で既に没していたペリクレスとの接触は不可能であることを忘れてはならない。演説に長けていたペリクレスと、当代きっての弁論教師であったゴルギアスが偶然結びつけられたのだと考えるべきなのかもしれない。

『スーダ』（DK82A. 2）ではさらに、エンペドクレスと同じシケリア島アクラガス出身、プラトン『ゴルギアス』にも師とともに登場するポロスや、小アジアのエライア出身でゴルギアスの学校を継いだとされるアルキダマス、さらに、プラトンらと同時期に活躍し『ヘレネ賛』『アンティドシス』など数々の著作を残した、偉大な弁論家のひとりイソクラテスの名が紹介されている。

イソクラテスはゴルギアスに関して実際に証言も残している（DK82A. 18）。また、擬プルタルコス（DK82A. 17）によれば、イソクラテスの墓の近くにある台座には彼の師であった幾人かの姿が刻まれているが、その中に天球儀を見ているゴルギアスの姿があり、その傍らにイソクラテス自身が立っているという。

とはいえクインティリアヌス（DK82A. 16）は、イソクラテスの師が誰であったかについて「これらの弁論家の継承者は多数いるが、最も有名なのはゴルギアスの弟子であったイソクラテスである。もっとも彼の師がだれであったかについて諸家の証言は一致しないが、われわれはアリストテレス（失われた著作『ギュアロスもしくは弁論術について』のことをさす、同訳注1より）の言うところ

¹³ Spatharas 2001, p. 11も、ゴルギアスとエンペドクレスの師弟関係について言及している。

¹⁴ 彼もまたソフィストのひとりとして考えられている人物であり、DK第88章がクリティアスに割り振られる。

¹⁵ トウキュディデス『戦史』第6巻において、シケリア遠征に反対の立場を取る将軍ニキアスに対する、アルキピアデスの見事な大演説が伝えられている。

にしたがう」¹⁶と記しており、イソクラテスとゴルギアスの師弟関係についても確証があるものではないことをにおわせている。

なお、イソクラテスは『ヘレネ賛』第14章において、「何かに関してよく語ろうとする人々のうちでもヘレネに関して書いた人を取りわけ私は賞賛したい」と書いた。けれどもその直後には「彼はヘレネに対する讃歌を書いたというが、実際はヘレネの行いについて弁護しているのだ」と指摘する。ここで言及されている「ヘレネに関して書いた人」が誰なのかについては諸説あるが、イソクラテスがここでゴルギアスに言及している可能性があることは議論されている¹⁷。

ゴルギアスとイソクラテスの大きな違いは、前者が演説や弁論を口頭で多く披露しているのに対して、後者は生まれつき声が弱かったこともあり、もっぱら書き物として著作を残していることではないだろうか。書き物中心に活動していたイソクラテスとは逆に、話し言葉としての弁論を重視する、ゴルギアス流の正当な継承者ともいえる人物が別にいた。それがエライアのアルキダマスである¹⁸。

このソフィストは、前5世紀後半に生まれ、前4世紀前半にかけて活躍したとされる。前432年から前411年の間にアテナイに滞在し、ゴルギアスの影響を受けたものと考えられる。彼はいくつかの断片¹⁹と、『書かれた言論を書く人々について、あるいは、ソフィストについて（以下『ソフィストについて』と略記）』及び『オデュッセウス』なる著作を残しているが、『オデュッセウス』については、他の人の手による疑いがある。また、現存してはいないが『ムーセイオン』という著作が古代世界では知られていたことがわかっている。

アルキダマスとイソクラテス是对立関係にあった。『ソフィストについて』という著作も、イソクラテスが前390年頃、ライバルでもあったプラトンのアカデメイアに先んじてアテナイに学園を創設した際宣伝パンフレットとして書かれた『ソフィスト反駁』なる著作に対抗したものである。そこでイソクラテスは自分以外のソフィストたちのやり方を手厳しく批判している。アルキダマスはこの著

¹⁶ イソクラテスとゴルギアスの師弟関係に関しては、現在も議論がある。Spatharas 2001, p. 13及び同n. 2を参照。

¹⁷ この議論については、Zajonz 2002, pp. 138-140を参照。

¹⁸ アルキダマスに関する記述は、納富 2006, pp. 245-289及びGuthrie 1971, pp. 311-313による。

¹⁹ 彼の書き物に関して、アテナイオス（592c）によれば、Naïsという名のヘタイラ（高級娼婦）への賛辞が、ディオゲネス・ラエルティオス（8. 56）によれば、自然哲学に関連する書き物があつたと伝えられている。Guthrie 1971, p. 313を参照。

作への反論として『ソフィストについて』を著したと考えられる。その中で「か細い声の人」という表現が現れるが、これはイソクラテスを意識した発言とみられる²⁰。

アルキダマスは、イソクラテスのごとく書き物を中心に活動したソフィストに対して批判的であった。アルキダマスから見れば、書かれた弁論はあくまでも語られる弁論に付随するものにすぎないという位置付けであった。ホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』時代から受け継がれる、語られる言葉の優位性については、プラトン『パイドロス』などの著作からも見ることができるだろう²¹。

ギリシア各地で思い思いに活動したソフィストたちの間には「～学派」というような思想的なつながりはなく、お互いに商売敵として批判しあい、自分自身のやり方がいかに優れているかを競いあった。たとえば、本論文の主役であるゴルギアスは、フィロストラトス（DK82A. 24）によれば、陳腐化した話を繰り返すプロディコスを嘲って、自身は臨機応変に語るのをつねとしたという。また、彼は自身をあくまで「弁論家」と名乗り、徳の教師として売り出さなかったことはよく知られる事実であるが、これもライバルたちとの差別化を図る手段であったと考えられている。ソフィストたちがこのような関係性にあった事実を踏まえれば、同じ師のもとで学んだアルキダマスとイソクラテスの敵対関係は、決して不思議なことではないのである。

ゴルギアスが残したとされる演説、弁論著作のうち、現在完全な写本の形で伝承されているものは、本論文で取り扱う『ヘレネ賛』と、『ヘレネ賛』と同様にトロイア戦争関連の人物を扱った演説弁論『パラメデスの弁明』の2つのみである。

ゴルギアスの著作に関して正確な年代決定は困難とされるが、エウリピデスの悲劇作品との関連性は以前から議論されている。エウリピデスは前415年に『アレクサンドロス（トロイア王子パリスの別名）』『パラメデス』『トロイアの女たち』という3部作を発表しており、その中の『トロイアの女たち』におけるヘレネの弁明とゴルギアスの『ヘレネ賛』の対応関係は研究者たちによってしばしば指摘される。また、パラメデスに関しても、エウリピデスのみならずアイスキュロスやソフォクレ

²⁰ 納富 2006, p. 275を参照。

²¹ 同上 pp. 269-280を参照。

スもそれぞれ題材として扱っており、ゴルギアスはそれらを意識しながら弁論を著したと考えられる²²。

もうひとつの有名な著作である『ないについて』を直接伝える写本は既に失われてしまったが、アリストテレス著作集に含まれ、ヘレニズム期か紀元前後にペリパトス派の誰かが著したと考えられる『メリッソス、クセノファネス、ゴルギアス』（以下MXGと略記）及び、2世紀の懐疑主義者セクストス・エンペイリコスが著した『学者たちの論駁』第7巻によって伝えられている。しかしながら、これらの資料をつきあわせて検討していくと細かな点で食い違いが見られ、どちらの資料がよりゴルギアスの著作の原型をとどめているのかという点に関する議論が続いている。以前は、独立した論考として伝わるセクストス版を用いることでゴルギアスの議論がほぼ再構成できると考える研究者も存在したというが、検討の結果、時代の下ったセクストス版のほうがより多く元の議論に手を加えた疑いが強くなり、現在ではMXG版の資料的価値が見直されている²³。

他に現存しないものとしては『弁論術書』なるものがゴルギアスの手によって執筆されたとされる(DK82B. 12及び13, 14)。ハリカルナッソスのディオニュシオスは、好機(καίρὸς)についての技術書を試みたのはゴルギアスが初めてであったが、語るに値することは何も書かれていないと評した(DK82B. 13)。

さらに、アテナイ人戦没者へ向けられた『葬礼演説』(DK82A. 1及び82B. 5a, 5b, 6)、『オリュンピア演説』(DK82A. 1及び82B. 7, 8, 8a)、『ピュティア演説』(DK82A. 1及び82B. 9)、『エリス人に寄せる賛辞』(DK82B. 10)などが、他著作家の引用によって伝わっている。

『葬礼演説』はアテナイ人戦没者へ向けて公の葬礼でなされたと考えうるが、アテナイ市民ではないゴルギアスがそのような場で演説を行うとは考えにくく、実際に発表するアテナイ人のためにゴルギアスが代作したか、演説とはかくあるべきという模範を示すためのものだったのかもしれない²⁴。

2. 『ヘレネ賛』研究の歴史²⁵

²² 納富 2006, p. 124を参照。

²³ 『ないについて』を伝える資料に関しては同上 pp. 201-203を参照。

²⁴ MacDowell 1982, p. 10を参照。

²⁵ この節に関しては、多くをDonadi 1982, pp. XLVIII-LXI及び同書のBibliografiaによった。

本論文で取り扱う『ヘレネ賛』は、現在のところ、ゴルギアスの手による作品、すなわち真作と考えて差し支えないという意見が一般的である。では、この著作はこれまでいかにして伝承され、研究されてきたのであろうか。ここからは、『ヘレネ賛』研究の歴史を大まかにではあるがたどっていきたい。

『ヘレネ賛』研究の初期段階では、La写本が重要な位置を占めていたようである²⁶。1493年にPietro Bemboの手による *Gorgiae Leontini in Helenam Laudatio* が成立したが、そのラテン語訳はLa写本に従ったものであったし、それからちょうど20年後の1513年にAldus Manutiusが刊行した *Rhetorum Graecorum Orationes*（本文中ではAld. と表記。『ヘレネ賛』は第3巻pp. 102-104）も基本的にLa写本を元としている。このAldus Manutiusは、その後1534年にイソクラテスの著作を扱った *Isocrates nuper accurate recognitus et auctus*（『ヘレネ賛』はpp. 86v-87）を刊行しているが、そこにもゴルギアスの『ヘレネ賛』が収められており、1534年版では1513年版に頻出する印刷上の間違いが部分的に修正されている。後述のReiskeは、1534年版を使用したようである。

1566年出版のCanterによるラテン語訳 *Aelii Aristidis [...] orationum tomi tres*（『ヘレネ賛』は第4巻 pp. 577-579）は、Ald. に忠実なものであった。その中で彼が提案した第16章の読み替え（写本で ἀσμενίσαι と伝わることを ἀμελῆσαι と読む）は重要な読み替えのひとつである。

1773年発行のReiskeによる *Oratorum Graecorum*（『ヘレネ賛』は第7巻 pp. 91-101）は、ゴルギアスの『ヘレネ賛』のみを扱ったものではなく、多くの弁論家の著作を集めた中のひとつとしてゴルギアスの著作が収録されている。後述のBaiter-Sauppe版やDiels-Kranz版など、多くの作家、思想家を扱う中のひとつとしてゴルギアスの著作を扱う校訂本は複数存在する。

Reiske版では、読み替えや注釈に関する覚え書きなどは、ページ下部や巻末など適切な場所に配置された。校訂者としてのReiskeは、本文の保存状態やゴルギアスの文体の美点については懐疑的であった。

1822-23年版と、1823-24年版の2つが出ているBekkerの *Oratores Attici*（『ヘレネ賛』は第1版第4巻 デモステネスの項pp. 54-62及び第2版第5巻 pp. 679-684に収録）は、Ald. の本文から距離を置

²⁶ 写本情報に関しては本論文第2章に付属の写本・略号一覧表を参照。

いたものであった。彼は通俗本文 (vulgata) だけではなく、A写本やX写本を含む14の写本について考察している。またBekkerは、その読みが明らかに最もよいであろう場合はA写本の血統に特権を与え、それ以外の特徴に関してはC写本を最もよい写本とみなした。このBekker版に関しては、C写本を過大評価していることや、新しく得られた写本を系譜学的に整理することを放棄しているという問題も指摘されているが、単一の資料に追従せず多くの写本を吟味したことや、現在でも最重要写本、しかも原型から直接派生した写本とみなされているA写本の価値を発見したことは、大きな功績だろう。また、Bekker版には検討に値する読み替えが複数提案されていることも忘れてはならない。このことは、後述のBaiter-Sauppe版やBlass版にもいえる。

1841年には、Sauppeが*L' Epistola critica ad Godofredum Hermannum*の中で、論駁不可能な証拠に基づいて、A写本をのぞいたその他写本はすべてX写本に由来するということを明らかにした。Bekkerが重視したC写本の権威はそれによって失墜した。その後1845-50年発行のBaiterとSauppeの手による*Oratores Attici* (『ヘレネ賛』は第2巻 pp. 132-134) では、*L' Epistola...* において得られた結果を考慮していることが明白である。つまり、A写本とX写本を並べた一方で、C写本を排除したのである。Sauppeの*L' Epistola...*およびその後のBaiter-Sauppe版の本質的な功績とは、X写本に基づいた研究への道を開いたことであるとDonadiは記している。

その後、Blassがアンティフォン著作を収めた*Antiphontis orationes et fragmenta*を1871年に出版しているが、そこには同時にゴルギアスの著作もおさめられている (『ヘレネ賛』はpp. 143-152)。Blassはそこで『ヘレネ賛』を収録する写本を3つのグループに分けた。第1のグループにはA写本とB写本が、第2のグループにはX写本のほかC写本、I写本、K写本、M写本、N写本、Mu写本が含まれ、そして最後のグループはH写本、R写本、V写本、W写本、Y写本、E写本、Pa₃写本を含むが、E写本はX写本から派生したものであり、続いて出た版においてはこの誤りは訂正されている。Blassはここにおいてすでに『ヘレネ賛』の伝承には原型が求められる (A写本やX写本など、現存する写本の親にあたるべき写本が存在することか) との結論に達しており、第2章の脱落箇所に関する新たな証拠を提示した。さらに、A写本の優越を証明し、Sauppeがその権威を否定していたC写本についても再評価した。1881年の後続の版 (『ヘレネ賛』はpp. 150-159) では『ヘレネ賛』の3つの写本グループを明瞭に区分し、第3のグループはA写本やX写本にさかのぼるものではないと書い

ている。しかしながら、伝承が2つに分かれていることは明らかで、それゆえ第3のグループは混交の結果であると思われるので、Blass版を受け入れることは困難であるとDonadiは評する。

その後は、A写本とX写本の対立関係を軸に研究が行われてきた。1903年に初版が世に出たDiels-Kranz版では、写本についてはA写本とX写本以外のものはrの記号で示された。主要な2つの写本は共に原型の写しとして対等に扱われるが、本文はA写本の読みを優先したものとなっている。

A写本を重要視したDiels-Kranz版に対して、1927年発行のImmisch版はX写本を優先すべきとの方針を取っている。X写本をより信頼できる写本と考える校訂者は少数派であり、その点彼は独特の立場を取っているといえる²⁷。DonadiはImmisch版に関して、注釈に関してはまだ有益であると一定の評価を下している一方、本文については「原文を歪曲した」「本文は損なわれ混乱した」などと批判的な態度を取っている。Immischの校訂本文にみられる校訂者による推測は、ゴルギアスの文体上の傾向について理解した上でなされている印象ではあるが、写本上の根拠がないことを差しおいてまで採用されるべきものではなく、Donadiの評価は理にかなったものだ。

A写本が原型の写しと考えられていることは先に述べたが、もうひとつの主要写本であるところのX写本については議論がある。Immisch版が発表された翌年の1928年、SykutrisがImmischを批判する論文を発表したが、そこで彼はA写本とX写本が直接的な競合関係にはないことを主張した²⁸。Sykutrisは、原型からはA写本の枝ともうひとつ、 β という下位原型が生じ、さらに β からF写本 (Coisl. 249) とX写本という2つが派生している可能性を提示している。ただし彼も「われわれがその系統図を据えることができるかどうか、確実には言えない」と記している。

1982年のDonadi版では、『ヘレネ賛』写本群に関して詳細な調査が行われている。彼の校訂本の序論部は、ほとんどすべて写本関連の調査に費やされている。

彼はまず、A写本とX写本の他にV写本（写本情報から見るに、SykutrisがF写本として記載していたものと同一であろう）、Am₃写本、R写本、そしてCo写本を比較対照し、A写本は他の5つとは異なった枝に属するとした。そして、A写本の系統に対立する、原型から派生するもうひとつの枝 β を

²⁷ Immisch以外では、UntersteinerがX写本の読みを好む傾向があるとDonadiは報告している（1982, p. LVI）。

²⁸ Sykutris 1928, pp. 11-18を参照。

想定した。Donadiに従うならば、この β 写本こそがA写本と直接競合関係となるものである。ここまでは先に述べたSykutrisと共通している部分がある。

ただし、Donadiの場合、この β という仮想の写本からさらに γ 及び δ 、 ϵ という3種類の分岐が生じていると想定している。 γ からはR写本とAm₃写本という2つが派生し、そして δ からはV写本と ϵ という2つの分岐が生じ、 ϵ から派生しているのがX写本とCo写本である。さらにもうひとつ β から分かれる枝である ζ からはH写本、To写本、W写本、そしてPl₁写本といった写本が派生しているというのがDonadiの考えだ²⁹。

もしも、SykutrisやDonadiの考え方がより真実に近いとすれば、A写本とX写本は直接的な競合関係にあるわけではないということになる。とはいえ、1989年のBuchheim版³⁰では「このこと（この直前にあたる部分では、Donadiに従えばA写本とX写本は直接の競合関係にならないことが示されている）からは本文の復元に関していくらかの非本質的な変更だけがもたらされた。従って、本ゴルギアス集成の本文確定に関しては、Diels-Kranzがこの2写本に優先的な地位を与えたのと同様に、多くの損失を被ることなく、AとXの対立に基礎をおくことが可能なのである」と記しているし、そのBuchheimも含めて、現在われわれが入手する校訂本のほとんどはA写本とX写本をベースとして、『ヘレネ賛』テキストに関する議論を行っているというのが現状であろう。

3. 失われた写本について

ここからは補足的な情報となるが、Stolpe (1970, pp. 55-60) が失われた写本に関していくらか言及しているので、以下に概略を示したい。

1. ヴェネツィア サンアントニオ修道院の図書館は1685年から1687年の間に破壊された。その修道院にあった写本は、cod. Rep. I/44cがライプツィヒにあることがわかった以外、すべてが失われたとされるが、それらの中にゴルギアスの写本を含むものが2つあったとみられる。そのうちのひとつにはリュシ阿斯、アルキダマスらの著作が収められているが、これらを含む写本にはParisinus Gr.

²⁹ より詳しくは、Donadi 1982, pp. XXII-LXIを参照。

³⁰ Buchheim 1989, p. XXXVIIIを参照。

2944をのぞいて『ヘレネ賛』が所収されていることから、『ヘレネ賛』が含まれる可能性をStolpeは指摘する。また、もう片方に関しては、現存する写本との同定ができない写本だということである。

2. ローマ Bibliotheca Apostolica Vaticanaにあったとされる *Chisianus* 34 (R VI 42) は、破損があるようだが、アンドキデス、イサエウス、ディナルコス、アンティフォンの著作が含まれている。インデックスによれば、ゴルギアスの2つの演説が含まれており、H. Buermannがいくつかの紙片（ただし、アンティフォンのテキストのみ）を発見している。ただし、本当にゴルギアスのテキストが含まれるという確証はない。

3. チェルトナム イギリス、チェルトナムのSir Thomas Phillipps (1792-1872) の個人蔵書の中に含まれる *Phillippicus* 8296, chart. には、プロクルスらの作品とともにゴルギアス『ヘレネ賛』が含まれていたようだが、この蔵書は彼の死後、19世紀末以降は次第に散逸してしまい、その後の状態は不明である。

Stolpeは論文の最後において、ナポリにもアンドキデスとイサエウスを所収する写本（アンドキデスやイサエウスが所収されている場合、ゴルギアスもまた所収されている場合がある）があるとH. Buermannが報告していることに触れているが、実際にはロンドンにある *Burneianus* 96と同一であると考えられているようだ。

4. 本論文における校訂方針

第2章に掲載する校訂本文は、全文を特定の校訂本に従って印刷したものではなく、必要に応じて最良と思われる読みを選択し、編集したものである。

また、本論文の執筆に際し、本論文筆者は現存する写本を実際に入手および確認することはできなかった。そのため、本論文の校訂本文はすべて先行の校訂本から得られた情報を利用して構成されている。

本文下に配置されている異読一覧 (Apparatus critics) は、基本的にはA写本とX写本の読みが食い違う場合にそれぞれの読みを報告するというものであるが、中世劣位写本に伝わる異読ならびに校訂者による読み替えの中に考慮すべきものがあると判断する場合には、それらをともに掲載している。

本論文に掲載したギリシア語本文は、可能な限り写本伝承を尊重するという方針で編集されている。ゴルギアスの文体は非常に技巧的であるが、それゆえ推測による不必要な加筆、修正その他の操作がなされている可能性があるためだ。

先にも述べたように、本論文の執筆に際しては実際に写本を参照した上での本文構成はかなわなかったが、先行の校訂本を利用し、必要に応じて情報の整理や追加を行い、見やすくかつ精度の高い本文及び異読一覧となるように力を尽くした。

第2章

ギリシア語本文及び日本語訳

写本・略号一覧表³¹

(London, British Library)

A *Londiniensis Burneianus* 95 13-14世紀

(Heidelberg, Universitätsbibliothek)

X *Heidelbergensis Palatinus* Gr. 88 12世紀

(Firenze, Biblioteca Mediceo-Laurenziana)

B *Florentinus Laurentianus* IV. 11 1491-1492

C *Florentinus Laurentianus* LVII. 4 1459-1475

E *Florentinus Laurentianus* LVII. 52 15世紀

Fl *Florentinus Laurentianus* LXX. 35 15世紀

(Messina, Biblioteca Universitaria)

Me *Messanensis* Gr. 12(ιβ') 16世紀

(Milano, Biblioteca Ambrosiana)

Am₂ *Mediolanensis Ambrosianus* D 15 sup. (Gr. 218) 15世紀

Am₃ *Mediolanensis Ambrosianus* D 42 sup. (Gr. 230) 14世紀

Am₄ *Mediolanensis Ambrosianus* H 52 sup. (Gr. 436) 1459-1462

(Napoli, Biblioteca Nazionale)

Np *Neapolitanus* II. D. 26 (Gr. 122) 15世紀

(Torino, Biblioteca Nazionale)

Tr *Taurinensis* Gr. 108 (C. IV. 27) 16世紀

(Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana)

M *Vaticanus* Gr. 66 15世紀

Vt *Vaticanus* Gr. 894 15世紀

³¹ 以下の表はDonadi 1982, pp. XV-XXIを主に参考としてまとめたものである。

N *Vaticanus* Gr. 1366 18. 3. 1453

Co *Vaticanus* Gr. 2207 14世紀

Pl₁ *Vaticanus* Pal. Gr. 117 15世紀

Pl₂ *Vaticanus* Pal. Gr. 179 15世紀

Pl₃ *Vaticanus* Pal. Gr. 404 1579

(Venezia, Biblioteca Nazionale Marciana)

H *Venetus Marcianus* Gr. 422 (coll. 900) 15世紀

I *Venetus Marcianus* Gr. 522 (coll. 317) 1465-1468

K *Venetus Marcianus* Gr. VIII. 1 (coll. 1159) 15世紀

(Paris, Bibliothèque Nationale)

R *Parisinus* Gr. 1038 14世紀

Pa₁ *Parisinus* Gr. 2551 15-16世紀

Pa₂ *Parisinus* Gr. 2866 15-16世紀

Pa₃ *Parisinus* Gr. 2955 15世紀

W *Parisinus* Gr. 3009 16世紀

V *Parisinus* Coisl. 249 10世紀

(Escorial, Biblioteca de El Escorial)

Sc *Scurialensis* Φ. II. 12 (209) 16世紀

(Madrid, Biblioteca Nacional)

La *Matritensis* 7210 (N 98) 15世紀

(Toledo, Biblioteca del Cabildo Toledano)

To *Toletanus* 101-16 15世紀

(Oxford, Bodleian Library)

Ox *Oxoniensis* Auct. F. 4. 5 (misc. 104, *olim* 2290) 15世紀

Y *Oxoniensis* Barocc. Gr. 119 15世紀

(Bruxelles, Bibliothèque royale)

Br *Bruxellensis* 11262-69 (Gr. 64) 15世紀

(Gotha, Landesbibliothek)

Go *Gothanus* Chart. B 572 16世紀

(Kopenhagen, Kongelige Bibliotek)

Hn *Hauniensis* GKS 1898 15世紀

(Moskwa, Biblioteka Moskovskogo Universiteta)

Mu *Muscoviensis Bibl. Univ. Gr. 3 (olim Coislinianus 342)* 15世紀

(Wien, Nationalbibliothek)

Vi *Vindobonensis phil. Gr. 12* 16世紀

dep. Flor. Lask. Florentinus bibliothecae divi Marci deperditus, quo usus est C. Laskaris.

Be translatio Petri Bembi (Florentinus BNC It. II. VII. 125)

Ald. *Rhetorum Graecorum Orationes*, Pars 3. apud Aldum et Andream Socerum, 1513.

A¹, X¹ 訂正前のA (X) の読み

A², X² 訂正後のA (X) の読み

X^{sscr} 上方に訂正が入っているXの読み

<> 挿入された語、文

[] 削除された語、文

<...> 欠落が想定される箇所

{ } 空白がある箇所

校訂者一覧 (アルファベット順)

Baiter-Sauppe (Sauppe)

Bekker

Blass
Buchheim
Canter
Diano (apud Donadi, 1970-1971, p. 419)
Diels
Dobree
Friedländer (apud Diels-Kranz)
Graham
Immisch
Br. Keil (apud Diels-Kranz)
MacDowell
Paduano
Radermacher
Reiske
Spatharas
Untersteiner

その他略号

LSJ

Liddell, H. G., R. Scott. *A Greek-English Lexicon*, revised and augmented throughout by Sir Henry Stuart Jones, with the assistance of Roderick McKenzie, and with the cooperation of many scholars, with a revised supplement. 9th Ed. Oxford: Clarendon Press, 1996.

ΓΟΡΓΙΟΥ ΕΛΕΝΗΣ ΕΓΚΩΜΙΟΝ

- (1) Κόσμος πόλει μὲν εὐανδρία, σώματι δὲ κάλλος, ψυχῇ δὲ σοφία, πράγματι δὲ ἀρετή, λόγῳ δὲ ἀλήθεια· τὰ δὲ ἐναντία τούτων ἀκοσμία. ἄνδρα δὲ καὶ γυναῖκα καὶ λόγον καὶ ἔργον καὶ πόλιν καὶ πρᾶγμα χρὴ τὸ μὲν ἄξιον ἐπαίνου ἐπαίνῳ τιμᾶν, τῷ δὲ ἀναξίῳ μῶμον ἐπιτιθέναι· ἴση γὰρ
5 ἁμαρτία καὶ ἀμαθία μέμφεσθαι τε τὰ ἐπαινετὰ καὶ ἐπαινεῖν τὰ μωμητά.
(2) τοῦ δ' αὐτοῦ ἀνδρὸς λέξαι τε τὸ δέον ὀρθῶς καὶ ἐλέγξαι τοὺς μεμφομένους Ἑλένην, γυναῖκα περὶ ἧς ὁμόφωνος καὶ ὁμόψυχος γέγονεν ἢ τε τῶν ποιητῶν ἀκουσάντων πίστις ἢ τε τοῦ ὀνόματος φήμη, ὃ τῶν συμφορῶν μνήμη γέγονεν. ἐγὼ δὲ βούλομαι λογισμὸν τινα τῷ λόγῳ δοῦς
10 τὴν μὲν κακῶς ἀκούουσαν παῦσαι τῆς αἰτίας, τοὺς δὲ μεμφομένους ψευδομένους ἐπιδείξαι καὶ δεῖξαι τ' ἀληθὲς ἢ παῦσαι τῆς ἀμαθίας.

1-6 κόσμος...ψυχῇ et τὰ δ' ἐναντία...μωμητά Antonius Melissa, *Patrologia Graeca*, 136. 940b

Tit. γοργίου ἐλένης ἐγκώμιον A X² : om. X¹ : Γοργίου ῥήτορος Ἑλένης ἐγκώμιον Am₃ | 3 καὶ πρᾶγμα A : πρᾶγμα X | 4 ἐπαίνου, ἐπαίνῳ A : ἐπαίνων X | ἐπιτιθέναι X : ἐπιθεῖναι A | 6 lac. sign. Dobree : sensus: <τὸ λεγόμενον οὐκ ὀρθῶς προσήκει τοίνυν ἐλέγξαι> Diels | 7 ὁμόφωνος καὶ ὁμόψυχος A : ὁμόψυχος (ὁμόψηφος corr. X¹) καὶ ὁμόφωνος X | 8 lac. sign. Dobree : <ἢ τε τῶν> Blass : <πύστις ἢ τε τῶν> Immisch | φήμη, ὃ A : φήμης X | 11 ἐπιδείξαι καὶ δεῖξαι A X : ἐπιδείξας καὶ δεῖξας Blass : ἐπιδείξαι καὶ δεῖξας Immisch : ἐπιδείξαι, καὶ δεῖξαί τε MacDowell | ἢ A X : καὶ La Ald : [ἢ] Blass

(1)ポリスにとっては優れた男たちが、肉体にとっては美しさが、魂にとっては知恵が、行為にとっては徳が、そして言論にとっては真実性が「整いし様」なのである。そして、それらの反対が「整わぬ様」なのである。男でも女でも、言論でも行いでも、ポリスでも行為でも、賞賛に値するものは賞賛をもって尊重し、他方で賞賛に値しないものは非難することが必要である。つまり、賞賛すべきものを非難したり、非難すべきものを賞賛するということは、等しく過ちであり無知なのである。

(2)同じ男のすべきこととは、必要なことを正しく語ること、そして、ヘレネを非難する人々を論駁することである。すなわち、詩人たちの言うことを聞いた人々の信用と、災いの記憶となったその名の評判とが、同じ響き、同じ心となったところのかの女を非難する人々を。

そこで、私は何らかの言理（ことわり）をこの言論に与えて、悪い評判のたっているその女に対する非難をやめさせ、彼女を非難する人々は嘘つきなのだということを示し、真実を示したい、あるいは無知をやめさせたいと思う。

(3) ὅτι μὲν οὖν φύσει καὶ γένει τὰ πρῶτα τῶν πρώτων ἀνδρῶν καὶ
γυναικῶν ἢ γυνὴ περὶ ἧς ὅδε ὁ λόγος, οὐκ ἄδηλον οὐδὲ ὀλίγοις. δῆλον γὰρ
ὥς μητρὸς μὲν Λήδας, πατρὸς δὲ τοῦ μὲν γενομένου θεοῦ, τοῦ δὲ
λεγομένου θνητοῦ, Τυνδάρειω καὶ Διός, ὧν ὁ μὲν διὰ τὸ εἶναι ἔδοξεν, ὁ δὲ
5 διὰ τὸ φάναι ἠλέγχθη, καὶ ἦν ὁ μὲν ἀνδρῶν κράτιστος, ὁ δὲ πάντων
τύραννος.

(4) ἐκ τοιούτων δὲ γενομένη ἔσχε τὸ ἰσόθεον κάλλος, ὃ λαβοῦσα καὶ οὐ
λαθοῦσα ἔσχε· πλείστας δὲ πλείστοις ἐπιθυμίας ἔρωτος ἐνιργάσατο, ἐνὶ
δὲ σώματι πολλὰ σώματα συνήγαγεν ἀνδρῶν ἐπὶ μεγάλοις μέγα
10 φρονούντων, ὧν οἱ μὲν πλούτου μεγέθη, οἱ δὲ εὐγενείας παλαιᾶς
εὐδοξίαν, οἱ δὲ ἀλκῆς ἰδίας εὐεξίαν, οἱ δὲ σοφίας ἐπικτήτου δύναμιν
ἔσχον· καὶ ἦκον ἅπαντες ὑπ' ἔρωτός τε φιλονίκου φιλοτιμίας τε
ἀνικῆτου.

(5) ὅστις μὲν οὖν καὶ δι' ὅτι καὶ ὅπως ἀπέπλησε τὸν ἔρωτα τὴν Ἑλένην
15 λαβών, οὐ λέξω· τὸ γὰρ τοῖς εἰδόσιν ἃ ἴσασι λέγειν πίστιν μὲν ἔχει,
τέρψιν δὲ οὐ φέρει. τὸν χρόνον δὲ τῷ λόγῳ τὸν τότε νῦν ὑπερβὰς ἐπὶ τὴν
ἀρχὴν τοῦ μέλλοντος λόγου προβήσομαι, καὶ προθήσομαι τὰς αἰτίας, δι'
ἃς εἰκὸς ἦν γενέσθαι τὸν τῆς Ἑλένης εἰς τὴν Τροίαν στόλον.

2-3 ὀλίγοις δῆλον γὰρ ὥς A X : ὀλίγοις <δῆλον>. δῆλον Reiske : ὀλίγοις δῆλον, [γὰρ] ὥς
Immisch | 3-4 τοῦ δὲ λεγομένου X : λεγομένου δὲ A | 5 φάναι A X : φῦναι Ald | ἠλέγχθη A X :
ἐλέχθη codd. | 7 δὲ X : om. A | [καὶ] Sauppe | 8 ἐνει(ἐνερ- Immisch)ργάσατο A X : ἐνηργάσατο
Immisch | 9 μέγα A : μεγάλα X | 10 πλούτου <ἀρχαίου> Immisch | 11 ἰδίας A : οἰκείας X | 12 ὑπὸ
A | φιλονίκου Baiter : φιλονείκου A X | 15 εἰδόσιν ἃ X : εἰδόσι καὶ A | 16 τότε <τῷ> νῦν Blass |
17 προβήσομαι (βῆς in corr. A²) A | 18 τήν A² X : om. A¹

(3)この言論の主題であるその女が、本性と生まれにおいて、第1の男たちと女たちの中の、第1のものであるということは、少なからざる人々に不確かでない。すなわち、以下のことは明白である。母親はレダ、父親は、一方で神であったもの、他方でいわゆる死すべきもの、すなわちテュンダレオスとゼウスである。彼ら2人のうち、一方は事実そうであるがゆえにそのように考えられており、もう一方はそうだと言っていることのゆえに論駁される。一方のもの（テュンダレオス）は人間のうちで最高の男であり、もう一方のもの（ゼウス）はすべての支配者であった。

(4)彼らから生まれたヘレネは、神に等しい美しさを持ち、彼女はそれを身に受け隠さずに持っていた。ヘレネはきわめて多くの男たちに、きわめて多くの愛の欲望を生じさせた。ヘレネはひとつの身体に、大いなることのために大いなる自信を持っているたくさんの男たちの身体を集めた。彼らのうちあるものは富の大きさを、またあるものは古くよき家柄の名声を、またあるものは己が功名のたくましさを、そしてあるものは身につけた知恵の力を持っていた。彼らは皆、勝利を愛する渴望と、不屈の功名心のゆえに、やってきた。

(5)ヘレネを得ることで、誰が、何故に、そしてどのように欲望を満たしたかについては話すつもりはない。既に知っている人々に彼らが知っていることを話すことは、信用性を持つけれども喜びはもたらさないからだ。言論によって往時の時を今は素通りして、これから始めようと意図している言論の始まりへと前進しよう、そして理由を前に掲げよう。ヘレネのトロイア行が行われたことが理にかなっているというその理由を。

(6) ἡ γὰρ Τύχης βουλήμασι καὶ θεῶν βουλεύμασι καὶ Ἀνάγκης ψηφίσμασιν
 ἔπραξεν ἃ ἔπραξεν, ἡ βία ἄρπασθεῖσα, ἡ λόγοις πεισθεῖσα. εἰ μὲν οὖν διὰ
 τὸ πρῶτον, ἄξιός αἰτιᾶσθαι ὁ αἰτιώμενος· θεοῦ γὰρ προθυμίαν ἀνθρωπίνην
 προμηθία ἀδύνατον κωλύειν. πέφυκε γὰρ οὐ τὸ κρείσσον ὑπὸ τοῦ ἥσσονος
 5 κωλύεσθαι, ἀλλὰ τὸ ἥσσον ὑπὸ τοῦ κρείσσονος ἄρχεσθαι καὶ ἄγεσθαι, καὶ
 τὸ μὲν κρείσσον ἡγεῖσθαι, τὸ δὲ ἥσσον ἔπεσθαι. θεὸς δ' ἀνθρώπου
 κρείσσον καὶ βία καὶ σοφία καὶ τοῖς ἄλλοις. ἡ οὖν τῇ τύχῃ καὶ τῷ θεῷ τὴν
 αἰτίαν ἀναθετέον, ἢ τὴν Ἑλένην τῆς δυσκλείας ἀπολυτέον.

(7) εἰ δὲ βία ἠρπάσθη καὶ ἀνόμως ἐβιάσθη καὶ ἀδίκως ὑβρίσθη, δῆλον ὅτι ὁ
 10 <μὲν> ἄρπάσας ὥς ὑβρίσας ἠδίκησεν, ἡ δὲ ἄρπασθεῖσα ὥς ὑβρισθεῖσα
 ἐδυστύχησεν. ἄξιός οὖν ὁ μὲν ἐπιχειρήσας βάρβαρος βάρβαρον
 ἐπιχείρημα καὶ λόγῳ καὶ νόμῳ καὶ ἔργῳ, λόγῳ μὲν αἰτίας, νόμῳ δὲ
 ἀτιμίας, ἔργῳ δὲ ζημίας τυχεῖν· ἡ δὲ βιασθεῖσα καὶ τῆς πατρίδος
 στερηθεῖσα καὶ τῶν φίλων ὀρφανισθεῖσα πῶς οὐκ ἂν εἰκότως ἐλεηθείη
 15 μᾶλλον ἢ κακολογηθείη; ὁ μὲν γὰρ ἔδρασε δεινά, ἡ δὲ ἔπαθε· δίκαιον οὖν
 τὴν μὲν οἰκτεῖραι, τὸν δὲ μισῆσαι.

1 βουλήμασι καὶ βουλεύμασι A² : βουλεύμασι καὶ βουλήμασι (dubie) A¹ : βουλήματι καὶ
 κελεύσματι X | ψηφίσμασιν A : ψηφίσματι X | 2 <ἡ ἔρωτι ἀλοῦσα> La Ald Y in marg. : <ἡ ὄψει
 ἐρασθεῖσα> Immisch : <ἡ ἔρωτι μανείσα> Radermacher | 3 αἰτιώμενος A X : αἴτιος Dobree : ὁ
 αἴτιος ὢν Friedländer : αἴτιος μόνος Diels | 4 προμηθία La Ald M E Am₂ Pa₂ : προμηθεία A X | 5
 ἥσσον X : ἴσον A | κρείσσονος A : κρείττονος X | 6 ἥττον X : ἴσον A | θεὸς A : θεοὶ X | 7 ἡ οὖν
 A X : εἰ οὖν Reiske | τῷ θεῷ A : τῇ θῷ (super ῶ add ^) X | 8 ἀναθετέον (prius ε in corr. A²) A | ἡ
 τὴν A X : [ἡ] Dobree : καὶ τὴν Reiske : ἡ τὴν MacDowell | δυσκλείας A² X : δικλείας ut vid. A¹ |
 10 <μὲν> Blass | ὥς Blass : ἡ A X | ὥς A : ἡ X | 12-13 καὶ λόγῳ καὶ νόμῳ καὶ ἔργῳ, λόγῳ μὲν
 αἰτίας, νόμῳ δὲ ἀτιμίας A : καὶ νόμῳ καὶ λόγῳ καὶ ἔργῳ, νόμῳ μὲν ἀτιμίας λόγῳ δὲ αἰτίας X |
 15 μᾶλλον ἢ κακολογηθείη X : μᾶλλον ἀπολογοῦνται A¹ (corr. A²) | 16 οἰκτεῖραι Am₃ R (οἰκτῖραι
 Blass) : οἰκτεῖρειν A X : οἰκτῖρειν Radermacher Donadi

(6)すなわち、運命の意図と、神々の決議と、必然の評決によって、あるいは力づくで誘拐されることによって、あるいは言論によって説き伏せられることによって、彼女は彼女が為したところのことをしたのである。もしも第1の事柄が原因であるなら、非難する人こそ非難に値する。神の熱意を人間の先見によって妨げるなど不可能なのだから。弱いものによって強いものが妨げられることなく、弱いものが強いものに支配され導かれることこそ、強いものが導き弱いものが従うことこそ当然だ。力において、知恵において、そしてその他のことどもにおいて神は人間より強い。であるから、あるいは運命と神に責めを帰すべきであり、あるいはヘレネを悪名から解放すべきである。

(7)もしも彼女が力づくで誘拐され、不法な仕方でも無理強いされ、不正な仕方でも手ひどく扱われたのなら、一方で誘拐した男が手ひどく扱ったものとして不正を行ったこと、他方で誘拐された女が手ひどく扱われたものとして不運であったことは明らかだ。それゆえ、一方で、言論や法や行いによって野蛮な企てを企てた野蛮な男は、言論において責めを、法において権利喪失を、そして行いにおいて刑罰を受けるに値するのであり、他方で、無理強いされ祖国を奪われ親しいものたちを失った女がいったいどうして、悪く言われるよりもむしろ哀れまれる方がふさわしくないだろうか？ 不正をなしたのは男の方であって、女はそれを被ったのだから。それゆえ、女を哀れみ男を憎むのが正当だ。

(8) εἰ δὲ λόγος ὁ πείσας καὶ τὴν ψυχὴν ἀπατήσας, οὐδὲ πρὸς τοῦτο χαλεπὸν ἀπολογήσασθαι καὶ τὴν αἰτίαν ἀπολύσασθαι ὧδε. λόγος δυνάστης μέγας ἐστίν, ὃς σμικροτάτῳ σώματι καὶ ἀφανεστάτῳ θειότατα ἔργα ἀποτελεῖ· δύναται γὰρ καὶ φόβον παῦσαι καὶ λύπην ἀφελεῖν καὶ
5 χαρὰν ἐνεργάσασθαι καὶ ἔλεον ἐπαυξῆσαι. ταῦτα δὲ ὥς οὕτως ἔχει δεῖξω·
(9) δεῖ δὲ καὶ δόξῃ δεῖξαι τοῖς ἀκούουσι· τὴν ποιήσιν ἅπασαν καὶ νομίζω καὶ ὀνομάζω λόγον ἔχοντα μέτρον· ἥς τοὺς ἀκούοντας εἰσῆλθε καὶ φρίκη περίφοβος καὶ ἔλεος πολύδακρυς καὶ πόθος φιλοπενθής, ἐπ' ἄλλοτρίων τε πραγμάτων καὶ σωμάτων εὐτυχίαις καὶ δυσπραγίαις ἴδιόν τι πάθημα διὰ
10 τῶν λόγων ἔπαθεν ἡ ψυχὴ. φέρε δὴ πρὸς ἄλλον ἀπ' ἄλλου μεταστῶ λόγον.
(10) αἱ γὰρ ἔνθεοι διὰ λόγων ἐπῳδαὶ ἐπαγωγοὶ ἡδονῆς, ἀπαγωγοὶ λύπης γίνονται· συγγινομένη γὰρ τῇ δόξῃ τῆς ψυχῆς ἡ δύναμις τῆς ἐπῳδῆς ἔθελξε καὶ ἔπεισε καὶ μετέστησεν αὐτὴν γοητεία. γοητείας δὲ καὶ μαγείας δισσαὶ τέχναι εὗρηνται, αἱ εἰσι ψυχῆς ἀμαρτήματα καὶ δόξης
15 ἀπατήματα.

11-12 αἱ γὰρ...γίνονται A. Nauck, *Lexicon vindobonense*, p. 69

6 καὶ δόξῃ δεῖξαι A X : καὶ δεῖξαι <καὶ> δόξαι Blass : καὶ δόξαι [δεῖξαι] Diels : κάδοξα δεῖξαι Immisch | 7 ἥς τοὺς X : ἥ ὥς A | 8 πόθος φιλοπενθής A : φίλος φιλοπενθής X : ζήλος φιλοπενθής Am₄ | 9 εὐτυχίαις A : εὐτυχίας X : εὐπραγίαις Blass : δυστυχίας Immisch | δυσπραγίαις A : δυσπραγίας X | 11 ἐπῳδαὶ A : ἡδοναὶ X | ἀπαγωγοὶ λ. X : ἐπαγωγοὶ λ. A | 12 γίνονται συγγινομένη A : γίνονται συγγινομένη X | 13 αὐτὴν A : om. X

(8)もしも魂を説得し欺いたのが言論であるのなら、それについて弁護することも、以下のようにして非難を取り除くこともこれまた困難ではない。

言論とは偉大な支配者なのだ。それはきわめて小さく目に見えない身体によって、きわめて神がかった行いを成し遂げるのだ。すなわち、恐れをおさめ、苦悩を取り去り、喜びを生じさせ、哀れみをいや増すことができるのだ。ではそれがそうであるのだということを示そう。

(9)そしてまた、判断によって、聴衆に示さねばならない。すべての詩のことを、韻律を持つ言論であると私はみなし、呼んでいる。それを耳にする人々には、大きな恐れを伴う畏怖と、多くの涙を伴う憐憫、そして悲しみに満ちた憧憬が入り込み、魂は言論を通じて、他人の行為や身体の幸運や不運に関するある種の固有の災難を被るものなのだ。さて、ひとつの言論からまた別の言論へと話を進めることにしよう。

(10)なぜなら、言論を通じた神がかった呪文は喜びの導き手であり、苦しみを追いやるものともなるのだから。つまり、呪文の力は魂の判断と交わり、魂を魅了し、説き伏せ、魔法で変えてしまうものなのだ。妖術及び魔術という2つの技術が発見されているが、これらは魂の誤りと、判断の欺瞞である。

- (11) ὅσοι δὲ ὅσους περὶ ὅσων καὶ ἔπεισαν καὶ πείθουσι δὲ ψευδῇ λόγον
 πλάσαντες. εἰ μὲν γὰρ πάντες περὶ πάντων εἶχον τῶν <τε>
 παροιχομένων μνήμην τῶν τε παρόντων <ἔννοιαν> τῶν τε μελλόντων
 πρόνοιαν, οὐκ ἂν ὁμοίως ὁμοιος ἦν ὁ λόγος, ἐπεὶ τὰ νῦν γε οὔτε
 5 μνησθῆναι τὸ παροιχόμενον οὔτε σκέψασθαι τὸ παρὸν οὔτε
 μαντεύσασθαι τὸ μέλλον εὐπόρως ἔχει· ὥστε περὶ τῶν πλείστων οἱ
 πλείστοι τὴν δόξαν σύμβουλον τῇ ψυχῇ παρέχονται. ἡ δὲ δόξα σφαλερὰ
 καὶ ἀβέβαιος οὕσα σφαλεραῖς καὶ ἀβεβαίοις ἀτυχίαις περιβάλλει τοὺς
 αὐτῇ χρωμένους.
- 10 (12) ἥτις οὖν αἰτία κωλύει καὶ τὴν Ἑλένην ὕμνος ἦλθεν ὁμοίως ἂν οὐ νέαν
 οὔσαν ὥσπερ εἰ βιατήριον βία ἠρπάσθη. τὸ γὰρ τῆς πειθοῦς ἔξῃν ὁ δὲ
 νοῦς καίτοι εἰ ἀνάγκη ὁ εἰδὼς ἔξει μὲν οὖν, τὴν δὲ δύναμιν τὴν αὐτὴν
 ἔχει.† λόγος γὰρ ψυχὴν ὁ πείσας, ἣν ἔπεισεν, ἠνάγκασε καὶ πείθεσθαι
 τοῖς λεγομένοις καὶ συναινέσαι τοῖς ποιουμένοις. ὁ μὲν οὖν πείσας ὥς
 15 ἀναγκάσας ἀδικεῖ, ἡ δὲ πεισθεῖσα ὥς ἀναγκασθεῖσα τῷ λόγῳ μάτην
 ἀκούει κακῶς.

8-9 σφαλεραῖς... χρωμένους A. Nauck, *Lexicon vindobonense*, p. 149

1 πείθουσι A X : πείσουσι Blass | 2 <τε> Blass | 3 <ἔννοιαν> Blass | 4 ὁμοιος ἦν ὁ λόγος A : ὁμοιος ὦν ὁ λόγος X : ὁμοιος deperditum MacDowell : ὁμοίως ὁ λόγος ἦν Spatharas | (δεινὸς ἦν)...ἐπεὶ τὰ νῦν γε Sauppe : ἢ τα νῦν γε A : εἰ τα νῦν γε X¹ : ἢ τα νῦν γε X² : ἢ <πά> τα νῦν δὲ Blass (sed νῦν δὲ iam Dobree) : (ὁμοιος ἦν)...οἷς τα νῦν γε Diels : ἀλλὰ νῦν γε MacDowell | 8 ἀτυχίαις A X : εὐτυχίαις Am₂ Lex. Vind. | περιβάλλει A X : παραβάλλει Lex. Vind. | 10 ὕμνος ἦλθεν deperditum Donadi : secl. La Ald : λόγον ἐλθοντα Am₄ | ἂν οὐ νέαν A : ανουνεαν X | 11-13 τὸ γὰρ...ἔχει deperditum Donadi | 11 ἔξῃν A : ἔξειν X | 11-12 ὁ δὲ νοῦς om. A¹ | 12 ὁ εἰδὼς ἔξει μὲν οὖν A : ὄνειδος ἔξει μὲν οὖν X | 13 ψυχὴν A : τὴν ψυχὴν X | πείθεσθαι A X : πιθέσθαι Blass | 15 ἀναγκασθεῖσα (ναγκας A²) A | τῷ λόγῳ A : λόγῳ X |

(11)どれだけ多くの人が、どれだけ多くの人を、どれだけ多くのことに関して、偽りの言論を捏造して説き伏せたことか、そして説き伏せていることか。もしもすべての人がすべての事柄に関して、過去の記憶と、現在の考察と、未来の見通しを持っているとすれば、言論は同じであっても、同じあり方ではないだろう。過去のことを想起することも、現在をよく見つめることも、未来を占うことも容易ではないのだから。それゆえ、きわめて多くの人が、きわめて多くのことに関して、判断を助言者として取り入れているのだ。だが、判断とは不安定かつ信頼できないもので、それを利用する人を不安定かつ信頼できない不運で包み込んでしまう。

(12) (伝承不全の箇所。ここについては第3章注釈部の当該箇所を参照) つまり、魂を説得するものである言論が、魂を説き伏せて、言われたことによって説き伏せられることを、また為されたことに従うことを無理強いするのである。それゆえに、説き伏せた男こそ強いたものとして不正を行っているのであり、説き伏せられた女は言論によって強いられたものとして誤って悪く言われているのである。

(13) ὅτι δ' ἡ πειθὼ προσιοῦσα τῷ λόγῳ καὶ τὴν ψυχὴν ἐτυπώσατο ὅπως ἐβούλετο, χρὴ μαθεῖν πρῶτον μὲν τοὺς τῶν μετεωρολόγων λόγους, οἵτινες δόξαν ἀντὶ δόξης τὴν μὲν ἀφελόμενοι τὴν δ' ἐνεργασάμενοι τὰ ἄπιστα καὶ ἄδηλα φαίνεσθαι τοῖς τῆς δόξης ὄμμασιν ἐποίησαν· δεύτερον
 5 δὲ τοὺς ἀναγκαίους διὰ λόγων ἀγῶνας, ἐν οἷς εἰς λόγος πολὺν ὄχλον ἔτερψε καὶ ἔπεισε τέχνη γραφεῖς, οὐκ ἀληθείᾳ λεχθεῖς· τρίτον <δὲ> φιλοσόφων λόγων ἀμίλλας, ἐν αἷς δείκνυται καὶ γνώμης τάχος ὡς εὐμετάβολον ποιοῦν τὴν τῆς δόξης πίστιν.

(14) τὸν αὐτὸν δὲ λόγον ἔχει ἢ τε τοῦ λόγου δύναμις πρὸς τὴν τῆς ψυχῆς
 10 τάξιν ἢ τε τῶν φαρμάκων τάξις πρὸς τὴν τῶν σωμάτων φύσιν. ὥσπερ γὰρ τῶν φαρμάκων ἄλλους ἄλλα χυμοὺς ἐκ τοῦ σώματος ἐξάγει, καὶ τὰ μὲν νόσου τὰ δὲ βίου παύει, οὕτω καὶ τῶν λόγων οἱ μὲν ἐλύπησαν, οἱ δὲ ἔτερψαν, οἱ δὲ ἐφόβησαν, οἱ δὲ εἰς θάρσος κατέστησαν τοὺς ἀκούοντας, οἱ δὲ πειθοῖ τινα κακῇ τὴν ψυχὴν ἐφαρμάκευσαν καὶ ἐξεγοήτευσαν.

1 προσιοῦσα A X : προσοῦσα Blass | 4 ἄπιστα καὶ ἄδηλα A : ἄδηλα καὶ ἄπιστα X | 5 τοὺς ἀναγκαίους διὰ λόγων ἀγῶνας A² X : διὰ τοὺς ἀναγκαίους τῶν λόγων ἀγῶνας A¹ | ἀναγκαίους deperditum Paduano | 6 ἔτερψε A¹(corr. A²) | τρίτον <δὲ> Am₄ : τρίτον A X | 7 ὡς A X : om. H To W Pl₁ | 8 τὴν (ἡ A²) A | 9 λόγου A : νόμου X | τῆς A : om. X | 11 ἄλλα χυμοὺς Am₄ : ἀλλαχοῦ A X | 12 τῶν X : ἐκ (exp.) τῶν A | 13 ἔτερψαν A | 14 ἐφαρμάκευσαν καὶ ἐξεγοήτευσαν X : ἐξεφαρμάκευσαν καὶ ἐγοήτευσαν A

(13)言論に接近する説得が、望むままに魂に刻印を与えることに関しては、第1に自然哲学者たちの理屈に注目せねばならない。この類いの人々は、ある判断を別の判断に対置して、一方を取り去り、他方を作り上げて、判断の目に、信用するに足らない不確かなものが見えるようにする。第2に、ひとつの言論が真理によって語られるのではなく技巧によって書き記されて、大勢の群衆を喜ばせ説き伏せるという、言論を通じた不可避的な闘争に注目せねばならない。第3に、哲学的言論の競い合いに注目せねばならない。そこでは、可変的なものとしての思考の迅速さもまた判断の信用性を形成することが示される。

(14)魂の状態（あんばい）に対する言論の力と、身体の性質に対する薬の処方（あんばい）とは同じ関係にある。薬のうちのあるひとつのものが、あるひとつの体液を身体から取り去り、ひとつの薬は病を鎮めるが、他のある薬は命を奪うとかいうのと同じように、言論のうちあるものは聞くものたちを悲しませ、あるものは喜ばせ、あるものは恐れさせ、あるものは奮い立たせ、またあるものはある種の悪い説得によって、魂を薬漬けにして幻惑するものなのだ。

(15) καὶ ὅτι μὲν, εἰ λόγῳ ἐπείσθη, οὐκ ἠδίκησεν ἀλλ' ἠτύχησεν, εἴρηται·
 τὴν δὲ τετάρτην αἰτίαν τῷ τετάρτῳ λόγῳ διέξειμι. εἰ γὰρ ἔρως ἦν ὁ
 ταῦτα πάντα πράξας, οὐ χαλεπῶς διαφεύξεται τὴν τῆς λεγομένης
 γεγονέναι ἁμαρτίας αἰτίαν. ἃ γὰρ ὁρῶμεν, ἔχει φύσιν οὐχ ἦν ἡμεῖς
 5 θέλομεν, ἀλλ' ἦν ἕκαστον ἔτυχεν· διὰ δὲ τῆς ὀψεως ἡ ψυχὴ καὶ τοῖς
 τρόποις τυποῦται.

(16) αὐτίκα γὰρ ὅταν πολέμια σώματα καὶ πολέμιον ἐπὶ πολεμίᾳ ὀπλίσει
 κόσμον χαλκοῦ καὶ σιδήρου, τοῦ μὲν ἀλεξητήριον τοῦ δὲ προβλήματα,
 θεάσεται ἡ ὄψις, ἐταράχθη καὶ ἐτάραξε τὴν ψυχὴν, ὥστε πολλάκις
 10 κινδύνου τοῦ μέλλοντος ὄντος φεύγουσιν ἐκπλαγέντες. ἰσχυρὰ γὰρ ἡ
 ἀμέλεια τοῦ νόμου διὰ τὸν φόβον εἰσφύκισθη τὸν ἀπὸ τῆς ὀψεως, ἥτις
 ἐλθοῦσα ἐποίησεν ἀμελῆσαι καὶ τοῦ καλοῦ τοῦ διὰ τὸν νόμον κρινομένου
 καὶ τοῦ ἀγαθοῦ τοῦ διὰ τὴν δίκην γινομένου.

3 πάντα A : om. X | 4 ἃ A : καὶ X | ἔχει φύσιν A² : ἔχει τὴν φύσιν A¹ : ἔχει φύσιν om. X | 5
 ἕκαστον Bekker : ἕκαστος A : ἕκας (superscr.o) X | ἡ A : om. X | 7 [καὶ] Blass | ἐπὶ πολεμίᾳ
 Sauppe : ἐπὶ πολεμίοις A : ἐπὶ πολεμι' X | ὀπλίσει A X¹ : ὀπλίση X² | 8 ἀλεξητήριον A X |
 προβλήματα A X : πρόβλημα τ<ῆ θέ>α Diano | 9 θεάσεται Sauppe : εἰ θεάσεται A X : εἰ
 θεάσαιτο Am₄ : ἐπιθεάσεται MacDowell | ἐτάραξε ex ἐσπάραξε A² | 10 κινδύνου τοῦ μέλλοντος
 ὄντος A X : ἀκινδύνου τοῦ μέλλοντος ὄντος Am₃ R : τοῦ κινδύνου μέλλοντος [ὄντος] Blass :
 κινδύνου τοῦ μέλλοντος <ὡς> ὄντος Diels | 11 ἀμέλεια MacDowell : ἀλήθεια A X : συνήθεια
 Diels : ἐπιλήθεια Immisch | νόμου A X : πόνου Donadi (cf. Donadi, 1977-1978, pp. 74s) |
 εἰσφύκισθη A X : ἐξφύκισθη Canter Reiske Diels | 12 ἀμελῆσαι Canter : ἀσμενίσαι A X | τοῦ ante
 διὰ A² X : om. A¹ | 13 δίκην A X : νίκην Blass | γινομένου Diels : γιγνομένου A X

(15)さて、もしもヘレネが言論によって説き伏せられたのであれば、彼女は不正を為したのではなく不運だったという点については以上で話し終えた。

第4の原因を第4の議論によって詳しく語ろう。もし愛がすべてをなしたのだとすれば、彼女が行われたと言われている過ちの責任から難なく逃れるだろう。というのも、われわれが見ていることがらは、われわれが望んでいるような性質ではなく、それぞれが偶然持っている性質を持つことから。魂は視覚を通して、気質の内側においてすら刻印を受ける。

(16)敵の人間と、敵に向かう準備を整えた、銅や鉄からなる敵の装備—あるものは攻撃用あるものは守備用である—とを視覚がとらえると、たちまち視覚は動揺させられて、魂を揺り動かす。そしてその結果、そのような危険が起こりそうな場合、人々はしばしば放心状態で逃げ出すのだ。というのも、法に対するなおざりは、視覚から生ずる恐れによって強く入り込み、それがやってくると、法によって判断される良いことも、正義によって生ずる善いこともなおざりにさせるからだ。

(17) ἤδη δέ τινες ἰδόντες φοβερὰ καὶ τοῦ παρόντος ἐν τῷ παρόντι χρόνῳ
φρονήματος ἐξέστησαν· οὕτως ἀπέσβεσε καὶ ἐξήλασεν ὁ φόβος τὸ
νόημα. πολλοὶ δὲ ματαίοις πόνοις καὶ δειναῖς νόσοις καὶ δυσιάτοις
μανίαις περιέπεσον· οὕτως εἰκόνας τῶν ὀρωμένων πραγμάτων ἡ ὄψις
5 ἐνέγραψεν ἐν τῷ φρονήματι. καὶ τὰ μὲν δειματοῦντα πολλὰ μὲν
παραλείπεται, ὅμοια δ' ἐστὶ τὰ παραλειπόμενα οἷάπερ <τὰ> λεγόμενα.
(18) ἀλλὰ μὴν οἱ γραφεῖς ὅταν ἐκ πολλῶν χρωμάτων καὶ σωμάτων ἐν
σῶμα καὶ σχῆμα τελείως ἀπεργάζωνται, τέρπουσι τὴν ὄψιν· ἡ δὲ τῶν
ἀνδριάντων ποίησις καὶ ἡ τῶν ἀγαλμάτων ἐργασία <ν>όσον ἠδεῖαν
10 παρέσχετο τοῖς ὄμμασιν. οὕτω τὰ μὲν λυπεῖν τὰ δὲ ποθεῖν πέφυκε τὴν
ὄψιν. πολλὰ δὲ πολλοῖς πολλῶν ἔρωτα καὶ πόθον ἐνεργάζεται πραγμάτων
καὶ σωμάτων.
(19) εἰ οὖν τῷ τοῦ Ἀλεξάνδρου σώματι τὸ τῆς Ἑλένης ὄμμα ἡσθὲν
προθυμίαν καὶ ἄμιλλαν ἔρωτος τῇ ψυχῇ παρέδωκε, τί θαυμαστόν; ὅς εἰ
15 μὲν θεὸς θεῶν θείαν δύναμιν <ἔχων>, πῶς ἂν ὁ ἥσσω εἴη τοῦτον
ἀπώσασθαι καὶ ἀμύνασθαι δυνατός; εἰ δ' ἐστὶν ἀνθρώπινον νόσημα καὶ
ψυχῆς ἀγνόημα, οὐχ ὥς ἀμάρτημα μεμπτέον ἀλλ' ὥς ἀτύχημα νομιστέον·
ἦλθε γάρ, ὥς ἦλθε, ψυχῆς ἀγρεύμασιν, οὐ γνώμης βουλευμασιν, καὶ
ἔρωτος ἀνάγκαις, οὐ τέχνης παρασκευαῖς.

1 χρόνῳ A : om. X | 3 ματαίοις πόνοις καὶ δειναῖς (δεινοῖς A¹ : corr. A²) νόσοις A : ματαίαις
νόσοις καὶ δεινοῖς πόνοις X | 4 περιέπεσον A² X : περιέπεσαν A¹ | 5 φρονήματι A X¹ : νοήματι
X² | 6 <τὰ> Am₄ La Ald : om. A X | 9 <ν>όσον Dobree : ὅσον A X : θέαν Br. Keil | 10 λυπεῖν A X :
λύπην Immisch | ποθεῖν A X : ποθεῖν <ποιεῖν> Blass : πόθον Immisch : κηλεῖν Diels : τέρπειν
MacDowell | τὴν A : om. X | 11 ἐνεργάζεται X : ἐργάζονται A | 12 καὶ σωμάτων A : om. X | 13
ὄμμα X : σῶμα A | 14 ὅς A² X : om. A¹ | 15 θεὸς <ῶν ἔχει> Blass | θεῶν A X : ἔχων MacDowell |
δύναμιν <ἔχων> Buchheim : δύναμιν <ἔχει> Donadi | τοῦτον A : τούτων X | 18 ψυχῆς A X :
τύχης Reiske |

(17)これまでには、恐ろしいものを目にしたその瞬間に現在の心を失っている人々もいた。そのように、恐れは認知能力を失わせて、また追いやってしまうのだ。そして、多くの人々が、意味のない苦痛や重篤な病、救いがたい狂気に陥る。そのように、視覚は見られたことどもの姿を心に刻み込むのだ。人を怖がらせる多くのことどもは語り残されているが、語り残されたことどもというのは、すでに語られたことどもと同様なのである。

(18)しかしながら、絵描きが多くの色と物体からひとつの物体と形をついには完成するとき、彼らは視覚を喜ばせる。彫像の制作や、神像の創作は目に甘美な病をもたらす。そのように、あるものは視覚を悲しませ、またあるものは強い欲望を引き起こす。多くのことどもは、多くの人々に、多くの事物と肉体へ向けた愛と欲望を生じさせる。

(19)であるから、アレクサンドロスの身体によってヘレネの目が喜び、ヘレネの魂に愛への熱意と闘争心を送り込んだのなら、驚くことがあるだろうか？ もしも、愛というものが神であり、神々の神的な力を持つのなら、いったいどうすれば、弱いものでありながらそれを追い返し抵抗することが可能であろうか？

また、もしそれが人間の病と魂の不注意であるなら、過ちとして非難されるべきではなく、不運として考えられるべきだ。というのもヘレネは、彼女がやってきた時、理性の意図によってではなく魂に対する畏によって、また技術の仕掛けによってではなく愛の強制力によってやってきたのだから。

(20) πῶς οὖν χρὴ δίκαιον ἡγήσασθαι τὸν τῆς Ἑλένης μῶμον, ἥτις εἴτ' ἐρασθεῖσα εἴτε λόγῳ πεισθεῖσα εἴτε βία ἀρπασθεῖσα εἴτε ὑπὸ θείας ἀνάγκης ἀναγκασθεῖσα ἔπραξεν ἢ ἔπραξε, πάντως διαφεύγει τὴν αἰτίαν;

(21) ἀφείλον τῷ λόγῳ δύσκειαν γυναικός, ἐνέμεινα τῷ νόμῳ ὃν ἐθέμην ἐν ἀρχῇ τοῦ λόγου· ἐπειράθην καταλῦσαι μῶμου ἀδικίαν καὶ δόξης ἀμαθίαν, ἐβουλήθην γράψαι τὸν λόγον Ἑλένης μὲν ἐγκώμιον, ἐμὸν δὲ παίγνιον.

1 εἴτ' X : εἴτε (ex ἥτε A¹) A² | 3 ἢ ἔπραξε A : om. X | 4 τῷ νόμῳ ὃν ἐθέμην X : τῷ μῶμον ὃν ἐθέμην A¹ : μῶμῳ ὃν ἐνεθέμην A² : τῇ γνώμῃ ἣν ἐθέμην MacDowell

(20)であるから、愛されてその為したことをしたのであれ、言論によって説き伏せられてその為したことをしたのであれ、力づくで誘拐されてその為したことをしたのであれ、神の強制力によって強いられてその為したことをしたのであれ、責めを全く免れているかの女、ヘレネに対する非難を正当だとみなすことがどうして必要だろうか。

(21)この弁論によって、女に関する悪評を私は取り去ったし、弁論の始めに示した決まりごとに忠実であった。私は非難の不当性と判断の無知を解消しようとしてきたのだ。ヘレネの讃歌として、また自分のちょっとした遊びとして、私はこの弁論を記したかったのである。

第3章 ゴルギアス『ヘレネ賛』注釈

第1章

『ヘレネ賛』第1章の構造を分析すると以下の通りである（以下、表と略号はSpatharas 2001, p. 25より引用）。

（略号について）：A=冠詞 Adj=形容詞 Adv=副詞 c=接続詞 N=名詞または代名詞 p=小辞 Pr=前置詞 V=動詞(不定詞の場合はInf) /n=主格 g=属格 d=与格 a=対格/Part=分詞（ただし、形容詞的な用法をとる場合はAdjと記載）p*=先の小詞と同じ小詞（他の品詞の場合も同様、略号右肩に*で表示）

Nn Nd p Nn Nd p Nn Nd p* Nn Nd p* Nn Nd p* Nn

An p* Adjn. Ng Nn

Na p c Na c* Na c* Na c* Na c* Na

V

Aa p Adja. Ng Nd Inf Ad p Adjd Na Inf.

Adjn p Nn c Nn

Inf c Aa Adja c Inf Aa Adja

Spatharasによる分析からわかるように、[Nn Nd p]のような、いくつかの要素の組み合わせが規則的に現れている。ゴルギアスの著作中においてこのような構成が認められる実例としてSpatharasは、『ヘレネ賛』第1章の例に続けて『パラメデスの弁明』30章及び『葬礼演説』に関しても同様に分析を行っている（2001, pp. 25-26）。

Κόσμος「整いし様」 κόσμοςという語は"order"「秩序」と"ornament"「装飾品」という2つの主立った意味を持つが、Spatharas (2001, p. 129) が「κόσμοςはできる限り柔軟に解釈すべきと考える」と指摘するように、ここでは辞書的な訳のどれかをそのまま当てはめるべきではない。

この箇所について納富（2006, p. 148）は「本当の秩序と見かけの装飾は正反対にある、と私たちは思うかもしれない。それに対して、ゴルギアスは、そういった区別そのものを拭き去る。それらは、どちらも美しく整った言論として異ならないではないか。少なくとも、ゴルギアスの整った言論は、私たちの心に悦びを与える『力』を、実際に持っている。そして、言論の整いし様は『真理』とされる」と述べている。このことを踏まえてつけられた「整いし様」という納富の日本語訳は、ここでのκόσμοςの多義性、曖昧さを的確に表現している。

εὐανδρία「優れた男たち」 MacDowell (1982, p. 33) が注を付しているように、ただ数が多いということではなく、勇敢さにおいて優れた男たちを擁するという意味で訳すのがふさわしいであろう。用例として Spatharas (2001, p. 129) は、クセノフォン『ソクラテスの思い出』3. 3. 12-13 οὐδὲ εὐανδρία ἐν ἄλλῃ πόλει ὁμοία τῇ ἐνθάδε συνάγεται; 「他のポリスでは、ここのポリスに集まっているのと同等の勇敢さはないのだろうか」などを挙げている。

πράγματι δὲ ἀρετή「行為にとっては徳が」 λόγος対ἔργον「言論対行い」はトゥキュデίδηςやギリシア悲劇などにも頻出する思想である。しかし、ここではἔργονではなくπᾶγμα「行為」という語が使用されている。πᾶγμαはἔργονと意味の上で重なる部分があること、また Spatharas (2001, p. 131) が指摘するように、πράγματι δὲ ἀρετήとλόγῳ δὲ ἀλήθειαが対応関係にあることなどから、ここでのπᾶγμαはἔργονとほぼ同じだろう。とはいえ、ゴルギアスが異なった語を使用していることを示すため、πᾶγμαは「行為」ἔργονは「行い」と訳し分けている。

この箇所について Päll (2007, p. 148) が、πράγματι δὲ ἀρετήとそれに対応するλόγῳ δὲ ἀλήθειαが共に7音節になることと（ἔργονを使った場合は前者が6音節になる）、πράγματιとσώματι「肉体」との形態における対応を指摘しているのは興味深い視点である。ゴルギアスが音声・形態上の理由からἔργονでなくπᾶγμαを使用した可能性は十分にある。

καὶ πᾶγμα「行為でも」 πᾶγμα「行為」とἔργον「行い」が同時に現れており、後者は「言論／行い」という、先にも述べた対立概念を構成しているが、前者と対をなすのは「ポリス」であり、対立概念をなすのかどうかは疑問である。

ここで2つの語が同時に現れているのは語数を合わせるためであり、πᾶγμαとἔργονの間に重大な相違はないと MacDowell (1982, p. 33) は指摘している。さらに Spatharas (2001, p. 132) はこれを正しいとした上で、ゴルギアスはここでλό-γον／ἔρ-γονとπ-όλιν／π-ῥᾶγμαという均等のとれた音声構造 (symmetrical sounds) を作りだそうとしたのだと指摘している。

μῶμον「非難」 詩的な単語を使用していることに注目したい。散文において「非難」を意味する語はὄνειδοςを用いるほうが普通である (MacDowell 1982, p. 33)。『ヘレネ賛』以外の散文においてμῶμοςが見られる例としてはキケロ『アッティコスへの手紙』5. 20. 6やプルタルコス2. 820aなどがある。また、プラトン『国家』487aではこのμῶμοςが人格化されて登場している。

Μῶμοςはヘシオドス『神統記』214において、夜(νύξ)の息子のひとりであると語られている。このΜῶμοςは、トロイア戦争に関して語られる8編の叙事詩（『イリアス』『オデュッセイア』もこのうちのひとつである）のうちのひとつ『キュプリア』の中で、人口の過剰な増加に対する対策とし

てのトロイア戦争についてゼウスに助言した (Paduano 2007, p. 90. n. 6)。このあとゼウスはヘラ、アテナ、アフロディーテの3女神による争いを引き起こし、これがトロイア王子パリスによる審判に結びついた。パリスはアフロディーテを選んだため、その見返りに世界の美女ヘレネを得ることとなったのである。このいきさつがあったことを考えれば、ゴルギアスがὄνειδοςでなく μῶμοςを使ったことに、何らかの意図があった可能性も考えられる。

ἐπιτιθέναι 「(非難) する」 現在不定詞ἐπιτιθέναιを伝えるのはX写本である。X写本の読みを支持する理由として「周辺の不定詞との兼ねあい」が挙げられる。すなわち、第1章で使用されている不定詞はこの箇所以外すべて現在不定詞であるからここでも同じく現在不定詞が適当という説明である。文法的な側面から見ると、ここでアオリスト不定詞が唐突に現れなければならない理由が存在しないことは事実である。よって、周囲の動詞に合わせ、現在不定詞を取るという考え方は理にかなっている。

反対に、A写本に従ってアオリスト不定詞ἐπιθεῖναιを印刷するならば、写本同士の関係性がひとつの鍵となる。『ヘレネ賛』の伝承に関しては、2つの重要写本のうちA写本は原型から直接枝分かれしているが、X写本の場合は現存しない上位写本の存在が想定されうるという考え方がある。その場合、X写本に対するA写本の価値は必然的に高まる。このことから、アオリスト不定詞を印刷するという考え方もまた、説得力を持つものである。

上記の理由から、判断の難しい箇所であることは確かであるが、アオリスト不定詞が突然単独で現れるという事態は、不自然であることが否めない。よって、本論文では現在不定詞ἐπιτιθέναιという形を印刷する。

第2章

ここで「ヘレネに対する非難に反論する」という、ゴルギアスの目的が明らかにされる。冒頭の τοῦ αὐτοῦ ἀνδρός 「同じ男」とは、ゴルギアス自身のことをさしているのかもしれない。

第1章でまず「賞賛に値するものは賞賛をもって尊重し、他方で賞賛に値しないものは非難することが必要である」と述べておいてから、それをふまえた上で「同じ男のすべきこととは、必要なことを正しく語ること、そして、ヘレネを非難する人々を論駁すること」と表明すれば、おそらく読者の気持ちを強く引きつけるだろう。エウリピデスの『ヘレネ』81において、エジプトに流れ着いたテウクロスが「あのゼウスの娘を、ヘラス全土が憎んでいる」と発言しているように、ヘレネが決してほめられた女性ではないという認識は、古代ギリシア人たちにも浸透していたのだから。

納富（2006, pp. 149-150）は、第2章に並べられる「論駁する」「真実を示し、無知をやめさせる」などの言葉について「理性的な言論活動を表わす、馴染みの哲学用語である。他方で、相手を論駁する試みの演示性を強調すれば、それはソフィスト的な（つまり、いかがわしい）言論の宣言にもなる」と指摘する。納富は続けて「この両義性は、無論、ゴルギアスによって意図されたものであり、そこで『真理』の意味が問われる」と述べている。

ἐλέγξαι「論駁すること」 Dobreeはこの直後における本文の欠落を想定し、一方Dielsはτὸ λεγόμενον οὐκ ὁρθῶς προσήκει τοῖνυν ἐλέγξαι「言われていること（ヘレネの悪名）は正当でない（と反論すべきだ）。それゆえ、ヘレネを非難する人々を…」という意味を異読一覽にて提案している。

しかし、この箇所についてMacDowell（1982, p. 33）が、意味的にも構造上もそれなしで納得できるものであって補遺は必要ないと指摘していることは正しい。手を加えずとも十分意味の通る箇所であると判断し、ここでは写本に従って読む。

ἢ τε τῶν ποιητῶν ἀκουσάντων πίστις「詩人たちの言うことを聞いた人々の信用と」

この箇所では、分詞をどのように解釈するかということが大きな問題となる。すなわちτῶν ποιητῶν ἀκουσάντωνという箇所を「詩人たちの言うことを聞いた人々の」と解釈するのか、それとも「詩人たちが聞いたことの」と解釈するのかということである。前者の理解では、ποιητῶνという語は目的語としての属格であるが、後者の場合では主語として機能している。

Spatharas（2001, pp. 135-136）によれば、Segal（1962, p. 145 n. 63）やUntersteiner（1961, p. 90）は後者の考えを支持していて、ゴルギアスがここで話題にしているのはムーサたちから詩人が受け取るインスピレーションのことであると主張している。Spatharasによって提示されているもうひとりであるBona（1974, p. 30 n.1）もSegalらと同じく後者の解釈をとっているが、詩人が聞いたことというのは、口頭で詩人が受け継いでいる口頭伝承のことを指すと主張している。

一方、MacDowell（1982, pp. 33-34）のように、聞かれたことのソース（誰から聞いたのか？）を示す属格が存在しないという理由で後者を支持しない考え方もある。納富（2006）においても「詩人たちの言うことを聴いた人々の信念」と訳されている。

仮にSegalやBonaらの考え方を受け入れる場合、例えばΜουσῶνなどの語が省略されているという事態を想定することになるが、そういった省略は受け入れることはできないと本論文では判断し、MacDowellや納富らと同じ解釈をとる。

なお、この箇所についてはἢ τε τῶν ποιητῶν <πίστις ἢ τε τῶν> ἀκουσάντων πίστις（Immisch）やἢ τε τῶν ποιητῶν <ἢ τε τῶν> ἀκουσάντων πίστις（Blass）のように、読み替えも提案されている。上に紹介した2つの案についていえば、ἢ τε τῶνが先に出現していることや、πίστιςとπίστιςという類

似した単語があることが写字生のミスを誘発したと考えれば説明は容易い上、構造という点を鑑みても魅力的かもしれない。けれども、異読一覧をみる限り、写本伝承に基づいた証拠が存在せず、写本の通りに読むとしても意味を取ることが可能な部分であることから、本論文のテキストには反映しないこととする。

φήμη 「評判」 「意味のある音声」の意味をもつ語である。ヘレネという彼女の名前自体が、ἐλεῖν「壊す」という語と似ている (MacDowell 1982, p. 34)。アイスキュロス『アガ멤ノン』681と比較: τίς ποτ' ὠνόμαζεν ὧδ' ἐς τὸ πᾶν ἐτητύμως μή τις ὄντιν' οὐχ' ὀρώμεν προνοίαισι τοῦ πεπρωμένου γλῶσσαν ἐν τύχᾳ νέμων; τὰν δορίγαμβρον ἀμφινεικῇ θ' Ἑλέναν; 「誰であろう、いったいその名をつけたのは、これほどになにもかも真実そのままをあらわすような。もしや、われらの目には映らぬなものか、運命のさだめを予め知るものが言葉のひびきを、そのめぐりあわせに合わせたのであろうか、婚家の男らに槍を握らせ、二手にわかれて争わせたあの女を『ほろび女』と名付けたのは」

Spatharas (2001, p. 136) は、ゴルギアス自身が『ないについて』の中で、ここで認められる「名前がそのものの真実を明らかにする」という古典的な思想 (ヘラクレイトス DK48と比較すること) を否定していることをまず指摘する。なお、Spatharasは『ないについて』のどの箇所においてそれがいわれているのかという明確な指示をしてはいないが、おそらくセクストス・エンペイリコス版の第84章から第86章での議論を意図していると推測される。

Spatharasは続けて、ゴルギアスが主張しているらしい理論を支持するためにゴルギアスの文章どうしを比較するやり方は方法論的に適当でないことを、この否定が示していると指摘する。事実 Spatharasは、第11章のοὐκ ἂν ὁμοίως ὅμοιος ἦν ὁ λόγος 「言論は同じであっても、同じあり方ではないだろう」という箇所に関する注釈においても、ゴルギアスの文章どうしを比較対照することに対して否定的な態度を取っている。

τοῦ ὀνόματος φήμη, ὃ τῶν συμφορῶν μνήμη 「災いの記憶となったその名の評判」

MacDowell (1982, p. 34) はこの箇所に関して「ゴルギアスは、それぞれに属格を付加することで対応する句の組をつくり出しているが、この構造の平行関係は不自然なものとなっている。τοῦ ὀνόματος 「名」は主語的属格であるのに対し、τῶν συμφορῶν 「災い」は目的語的属格であるのだから」と説明している。

MacDowellは同様の例として、第10章ψυχῆς ἀμαρτήματα καὶ δόξης ἀπατήματαと、第19章ψυχῆς ἀγρεύμασιν, οὐ γνώμης βουλευμασινを挙げ、異なった種類の属格の組み合わせとしての他の例が第3章ὁ μὲν ἀνδρῶν κράτιστος, ὃ δὲ πάντων τύραννοςであることも指摘している。

λογισμὸν τινα「何らかの言理（ことわり）」 MacDowell (1982, p. 34) が主張するように、このτιναは"a special kind of..."を意図しているのではない。

τὴν μὲν κακῶς ἀκούουσιν παῦσαι τῆς αἰτίας「悪い評判のたっているその女に対する非難をやめさせる」 κακῶς ἀκούωはイディオムで「悪く言われる」。εὖ ἀκούωは反対に「よく言われる」の意味となる。LSJ, ἀκούω, III. 1を参照。

παύω + 対格（人） + 属格（もの）で「（人）を（もの）から遠ざける」。ここでは「悪い評判のたっているその女（τὴν κακῶς ἀκούουσιν）に対する非難（τῆς αἰτίας）をやめさせる」という解釈となる。その他用例、解説はLSJ, παύω, I. 2を参照。

ἢ παῦσαι τῆς ἀμαθίας「無知をやめさせる」 ἢはA写本及びX写本に伝わる読みだが、中世劣位写本（recentiores）にはκαίが伝わり、またBlassはἐπιδείξαι καὶ δεῖξαιという箇所をἐπιδείξας καὶ δείξαςという分詞に置き換えたとうえで接続詞を削除している。しかし、ここでは写本の読みを保ちἐπιδείξαι καὶ δεῖξαιを印刷したいので、何らかの接続詞が必要という前提で考える。

中世劣位写本の読みはκαὶ...καὶ...というごく一般的な構造を示し、文意にも十分にそっている。καὶ...ἢ...に比べれば受け入れやすいものであり、判断は難しい。

しかしながら、中世劣位写本の読みは写字生による改ざんの可能性を否定できない。一見不適切に感じられる読みを、より一般的なものに変更することは十分想定できるからだ。

第3章

この第3章と続く第4章は『ヘレネ賛』のタイトルにふさわしく、ヘレネの生まれや美貌を賞賛する内容となっている。この章ではまずヘレネの父親2人、すなわち実父であるゼウスと、レダの夫であり、ヘレネの養父であるスパルタ王テュンダレオスについて語られる。

οὐκ ἄδηλον οὐδὲ ὀλίγοις「少なからざる人々に不確かでない」 Reiskeによる読み替えοὐκ ἄδηλον οὐδὲ ὀλίγοις <δηλον>. δηλον γὰρ...は魅力的である。2つ同じ単語（δηλον）が並んでいれば、そのうちのひとつを書き落とすことは十分に想定できる。ただし、写本は十分に解読可能な文章を伝えており、あえてそれを放棄する必要性はないと判断する。

μητρός μὲν Λήδας「母親はレダ」 ヘレネの母であるレダはアイトリア王テストイオスの娘で、スパルタ王テュンダレオスの妃となった女性。彼女がエウロタス川で水浴していた際に、ゼウスが白鳥

の姿となって彼女と交わった。その後、レダは卵を産み、そこからヘレネやポリュデウケスが生まれたと伝えられる。

ヘレネとポリュデウケスの誕生と同時に、アガ멤ノンの妻として有名なクリュタイムネストラ、そしてカストルの2人が誕生しているが、後者2人はレダとテュンダレオスの子であって、ヘレネらのごとく半神ではないとされる。

πατὴρ δὲ τοῦ μὲν γενομένου θεοῦ, τοῦ δὲ λεγομένου θνητοῦ, Τυνδάρειω καὶ Διὶ 「父親は、一方で神であったもの、他方でいわゆる死すべきもの、すなわちテュンダレオスとゼウスである」

τοῦ μὲν γενομένου θεοῦ 「実際の父＝ゼウス＝神」と、τοῦ δὲ λεγομένου θνητοῦ 「言われているところの父＝テュンダレオス＝人間」という対立する2つの要素に関する文章であるが、πατὴρ δὲ以降の文章構成をみる場合、全く同じ品詞かつ音節数、すなわち1-1-4-2で記述されている。これはイソコロン（ラ：Isocolon）という修辞技法で、ゴルギアスが特に好んだとされるもののひとつであることには触れておかねばならない。

はじめにゼウス-テュンダレオスの順番で言及したにも関わらず、その直後にΤυνδάρειω καὶ Διὶとキアスムス構造をなしている。おそらく音声上の理由であろう。γενομένου, λεγομένου, Τυνδάρειωはすべて4音節、それに対して θεοῦ, θνητοῦ, Διὶはすべて2音節の語である。

ἡλέγχθη 「論駁される」 ἐλέχθηは中世劣位写本由来であるが、より古い写本の読みであるἡλέγχθηよりも好ましい読みであるとMacDowellは指摘する。彼によると「ἡλέγχθηは意味をなしていない」(1982, p. 34及び同著者 1961, p. 121を参照)。しかし、このἡλέγχθη (ἐλέγχω) という動詞はもともと「面目を失う」といった意味を持った動詞だが、ここでは「論駁される」という意味で解釈すれば意味をなすと考え (LSJ, ἐλέγχω, IIを参照)。

Wardy (1996, pp. 31-32, ただしSpatharas 2001, pp. 139-140よりの引用) はA及びX写本の読みを支持して「ゴルギアスは大胆にも、テュンダレオスに関する叙述を覆した...その見解とは、ヘレネの神に等しい美しさはきわめて輝かしく、死すべきものの主張について嘘であると証明するに足るというものだ。彼女の美しさが神に等しいということは、単語の厳密な意味の中で明らかである」と主張している。要するにWardyは、第4章冒頭のτὸ ἰσόθεον κάλλος「神に等しい美しさ」という言葉からして、ヘレネは神にも等しい姿を備えている、すなわち実の親は人間などではなく神すなわちゼウスであるということが一目でわかるということを主張している。

それを念頭においてこの箇所について考えた場合、A写本及びX写本に従って「一方（ゼウス）は、事実そうであるがゆえにそのように考えられており、もう一方（テュンダレオス）は、そうだとやっていることのゆえに論駁される」と読んだ場合でも意味が通る。さらにこちらを読むことによって神ゼウスが「事実そうである (εἶναι) がゆえにそのように考えられている (ἔδοξεν)」ことに対し

て、人間テュンダレオスは「**そうだと**言っている (φάναι) ことのゆえに**論駁される** (ῥέγγεσθαι) という対立が生まれる。この対立は、エレア派的な哲学語彙であることも忘れてはならない (納富 2006, p. 150を参照)。

第6章で現れる「弱者たる人間に対する強者たる神の優越」という観点を加味すれば、神であるゼウスは、言わずともヘレネの並外れた美貌によって彼女の父であると信じられるが、一方人間であるテュンダレオスは、いくら自分で主張しても、ヘレネの父であるとは認められようがないのだ。

もちろん、中世劣位写本による「**そうだと**言っていることのゆえに、**そうだと**言われている」という異読をとる場合でも文章としては成立するのだが、ゼウスとテュンダレオス、神と人間、信と疑という対立関係をはっきりと見ることができる古写本の読みを本論文では支持したい。

第4章

この章では、ヘレネの神に等しい美しさと、それに惹かれて集まったヘレネの求婚者たちについて語られる。神話上では、ヘレネの養父テュンダレオスはヘレネの結婚に際して、求婚者の中から誰を選んでも選ばれなかったものたちの怒りに触れることを理解していたので、『イリアス』『オデュッセイア』に登場する有名な知将、イタケのオデュッセウスにアドバイスを求めた。そこでオデュッセウスは「選ばれなくても怒らず、ヘレネと夫の結婚生活を妨げるものがいた場合、皆で夫となったものを助けること」という誓いを求婚者たちにかかわさせることを提案し、テュンダレオスはそれに従った。その上で、ヘレネは夫としてアガ멤ノンの弟であるメネラオスを選んだ。この時の誓いによって、後にヘレネがパリスと共に去った時、メネラオスとアガ멤ノンはギリシア中の英雄を集めることができたのである。

なお、このときヘレネに求婚した人々の一覧はヘシオドス (fr. 197-204) やアポロドロス、ヒュギヌスに見られる (Spatharas 2001, p. 140)。

ὁ λαβοῦσα καὶ οὐ λαθοῦσα ἔσχε 「彼女はそれを身に受け隠さずに持っていた」 Sauppeのごとく **καί** を削除する必要はないと判断する。MacDowell (1982, p. 35) の説明では、この接続詞が適切であると考えられる場合、接続ではなく **οὐ λαθοῦσα** という箇所を強調する機能を果たす。 **λαθοῦσα** という分詞の使い方 (**λανθάνω** + 分詞の逆転形) については *LSJ*, **λανθάνω**, A. 3 を参照。

πλείστας δὲ πλείστοις ἐπιθυμίας ἔρωτος ἐνειργάσατο 「ヘレネはきわめて多くの男たちに、きわめて多くの愛の欲望を生じさせた」

非常にわかりやすいポリュプトン（ラ：Polypoton）が用いられている点に注目。これは、同じ名詞及び代名詞、形容詞の格語尾変化形を連続させるという、ゴルギアスが非常に好んで使用する修辭技法である。ここではπλείσταςとπλείστοιςという2つがそれに該当する。ただし、前者はἐπιθυμίαςにかかる形容詞であるのに対して、後者は名詞化して「たくさんの男たちに」、つまりヘレネへの求婚者たちをさす語となっている。

Spatharas (2001, p. 140) は、この修辭技法によってゴルギアスは、ヘレネに対して求婚した男たちの数の多さと、彼女が男たちにもたらした愛情の強さを強調するのだと説明している。

ἐνὶ δὲ σώματι πολλὰ σώματα συνήγαγεν ἀνδρῶν 「ヘレネはひとつの身体に、たくさんの男たちの身体を集めた」

ἐνὶ（ひとつの）とπολλὰ（たくさんの）という対句法を使用している。あるものの魅力によって多くを引きつけるというのは、エンペドクレスの基本理論であること（Buchheim 1989, p. 162, n. 10を参照）にも注目する必要がある。

Spatharas (2001, p. 141) はこの箇所について、ヘレネを間接的な方法で賞賛していると説明している。彼女の高貴で神々しい生まれについて示した後の、彼女に引きつけられた男たちへの賞賛は、彼女自身の高貴さを類推的に証明するのである（ヘシオドス fr. 200, 34, 39と比較）。

Spatharasはまた、イソクラテスは『ヘレネ賛』の中で、テセウス（アテナイの伝説的な王である彼は、ヘレネの美しさを聞き及び親友ペイリトゥスと共謀して彼女を誘拐したことがある。とはいえ、そのときヘレネはまだ少女だった）に関してかなり多くの部分を割いているが、これについてWardy (1996, p. 28, ただしSpatharas 2001, p. 141より引用) が「賞賛の真の対象とはテセウスという人物であり、すなわち、傑出した神話上の代表者を通したアテナイという都市そのものののだ」と述べていることを挙げ、イソクラテスがゴルギアスと類似した方法をとっているということは注視すべきことだとも指摘している。

ἐπὶ μεγάλοις μέγα φρονούντων 「大いなることのために大いなる自信を持っている」 X写本に伝わるμεγάλαは、ポリュプトンを意識した読み替えの可能性はある。

ここでのμεγάλοιςは「大いなる事柄」を示し前置詞ἐπίと結びつく一方で、μέγαは後続の分詞について「大いなる自信を持っている」というイディオムを構成している。

μεγέθη 「（富の）大きさ」 MacDowell (1982, p. 35) によれば、μέγεθοςという単語に関して、この具体的な（concrete）複数形の用法は一般的なものではない。MacDowellは例として、プラトン『プロタゴラス』356c φαίνεται ὑμῖν τῇ ὄψει τὰ αὐτὰ μεγέθη ἐγγύθεν μὲν μείζω, πόρρωθεν δὲ

ἐλάττω「同じ大きさのものが、諸君の目には、近寄れば大きく見え、遠くからは小さく見えるものだ」を引いている。

ὧν οἱ μὲν...δύναμιν ἔσχον「彼らのうちあるものは...力を持っていた」 Immischがπλούτουの直後に欠落を想定しているのは、シンメトリーをつくり出すためであるとSpatharas (2001, p. 141)は推測している。

構造の点からみると、確かにImmischの挿入はあながち見当はずれではないように思うが、写本上の根拠はなく、必ずしも必要な処理であるともいえない。よって、ここでは写本通りに読む。

εὐδοξίαν...εὐεξίαν「名声」「たくましさ」 -ξίανという語尾が共通している。ホモエオテレウトン（ラ：Homoeoteleuton. いわゆる脚韻）という修辞技法である。また、語頭でもεὐ-という韻を踏んでいる。

ὕπ' ἔρωτός τε φιλονίκου φιλοτιμίας τε ἀνικήτου「勝利を愛する渴望と、不屈の功名心のゆえに」 φιλονίκουとφιλοτιμίαςという隣接する2語の間では、φιλο-という頭韻法が認められる。φιλονίκουとἀνικήτουがともにνικ-の語根を持つ点は注目に値する。

なお、この箇所について納富（2006）は「そしてすべての者は、勝利を愛し名誉を愛する負け知らずの愛によって、やってきたのだ」と訳しているが、ここではἔρωτος φιλονίκου「勝利を愛する渴望」とφιλοτιμίας ἀνικήτου「不屈の功名心」という2つの要素があることを、はっきり示す訳をつける方が好ましいと考える。

φιλονίκου「勝利を愛する」 Baiterによる読み替えである。A及びX写本では、-νείκουの形が伝えられている。意味上は全く違いがない。

-ει-と-ι-は、二重母音が後のギリシア語すなわちコイネーやビザンツのギリシア語において消滅したこともあって、中世写本における伝承が揺れていることがある。しかし、動詞νικάω及び名詞νίκηなどの同族語との関連をみるに、ここではBaiterの案を受け入れるほうが望ましいのではないか。

第5章

ゴルギアスは、第3章から第4章にわたって続けてきたヘレネへの賞賛を終え「ヘレネのトロイア行」の原因へと議論を向けようとする。彼の目的は、ただ神話を語って聞かせることではない。

誰がヘレネを手に入れて、愛を満たしたかについては話さないと宣言したところで、読者は神話の世界から現実へと引き戻される。さらにゴルギアスは、これまで意図してきた議論（ヘレネが悪女ではないと証明すること）に進むと述べ「ヘレネのトロイア行の原因」をもちだす。

ヘレネの汚名の原因といっても過言ではない「トロイア行」について、このタイミングで触れることで、読者は驚愕するであろう。ヘレネのトロイア行を認めてしまえば、それはヘレネの不貞を認めることと同義である。ゴルギアスは、この先どのようなやり方でヘレネの汚名をはらそうとするのだろうと、読者は興味をそそられたはずである。

ὅστις μὲν οὖν...τὴν Ἑλένην λαβών, οὐ λέξω 「ヘレネを得ることで、誰が...話すつもりはない」

この箇所ですべて述べられている人物に関して、MacDowell (1982, p. 35) はヘレネの夫となったメネラオスを指しているとコメントしているが、Spatharas (2001, p. 143) は、*λαβών* という分詞には2つの解釈があると反論している。つまり、ヘレネと正式に結婚したメネラオスをさすという解釈の他に、そのメネラオスからヘレネを奪ったパリスをさすとも読める一文だということだ。これをはっきりさせてしまうと不愉快で下劣な語りに関わることになってしまうため、2人ともゴルギアスによって無視されているのだとSpatharasは述べている。Spatharasの疑問は納得できるもので、*ὅστις* が表わす人物がメネラオスだけだと断定できる文脈ではない。

τὸ γὰρ τοῖς εἰδόσιν ἃ ἴσασι λέγειν πίστιν μὲν ἔχει 「既に知っている人々に彼らが知っていることを話すことは、信用性を持つけれども」

τοῖς εἰδόσιν 「知っている人々に」 *ἴσασι* 「(彼らが) 知っている」という2つの語はいずれも *εἶδω* に由来する同根語であることに注意。これとよく似た構造として、第6章に *ἔπραξεν ἃ ἔπραξεν* 「彼女は、彼女が為したところのことをした」という一文があるが、第6章の場合は全く同一の語が繰り返されているという点が異なる。類例としては、プラトン『国家』596e *αὐτὸν ποιεῖν ἃ ποιεῖ* など。

πίστιν...τέρψιν 「信用性」「喜び」 「この2つは、言論における目的であり、聞き手が既に聞き知っていること（この場合はヘレネに関するエピソード）を語るという場合においては、信用性という目的は果たされても、喜びという目的を果たすことにはならない」 (MacDowell 1982, p. 35)

τέρψιν に関してUntersteiner (1961, p. 62, ただしSpatharas 2001, p. 143より引用) は "motivo edonistico della dottrina estetica di Gorgia: l' artista è un giusto ingannatore...al servizio della *τέρψις*" 「ゴルギアスの美学的学説の快楽主義的モチーフ、すなわち、芸術家とはちょうど騙し屋なのだ...*τέρψις* の給仕としての」と解説している。

しかしSpatharas (2001, pp. 143-144) は、Untersteinerの視点は散在している証拠を不当に体系化 (systematise) しているとする。Spatharasは続けて、ゴルギアスは既に知られていることを付け加えることで弁論の信用性は増すと認めているが、喜びのために既に知られた事柄を犠牲にすることが弁論の信用性を減ずるということを同時に言うてはいないということは興味深いことだと説明する。さらに、πίστιςとτέρψιςは切っても切れない関係にあり、喜びが説得をもたらす、反対に快さのない弁論は説得力のないものであると述べている。

τὸν χρόνον δὲ τῷ λόγῳ τὸν τότε νῦν ὑπερβάς 「言論によって往時の時を今は素通りして」

ὑπερβάςは "omit" の意味。類例としてはプラトン『ゴルギアス』528Dなど。

この箇所は非常に込み入った構造を取っている。すなわちτὸν τότεはτὸν χρόνονに付随し、その一方でτῷ λόγῳがνῦν ὑπερβάςに付随しているのである (MacDowell 1982, p. 35)。

τῷ λόγῳは納富訳 (2006) のごとく、「言論によって」手段の与格として解釈する。

ἐπὶ τὴν ἀρχὴν 「始まりへと」 話題の転換が今一度はっきりと示されている (Spatharas 2001, p. 144)。

εἰκός ἦν 「理にかなっている」 εἰκόςの解釈も『ヘレネ賛』を読む上で重要なことがらのひとつである。εἰκόςに関して "reasonable" という訳を提示するSpatharas (2001, pp. 144-145) は、『ヘレネ賛』においては蓋然性に由来する議論は重要な役目を果たしていないと述べ、被告が不当に訴えられている『パラメデスの弁明』と違い、ヘレネのトロイア行は事実として認められていることに触れている。

とはいえ、納富 (2006, p. 152) の「ありそうな」という解釈も無視できない。納富によれば、この「ありそうな」という概念は、テイシアスが開発したギリシア弁論術の最も重要な道具であり、明白な証拠や証人のない法廷での争いにおいて陪審員を説得するために使用される技法だが、ゴルギアスはヘレネへの告発に対してその技法を用いているという。

Spatharasと納富の解釈は全く異なったものだが、どちらともとれる文脈である。ゴルギアスはあえて、このように曖昧さを残した言い回しをしている可能性がある。

ゴルギアスやイソクラテスの『ヘレネ賛』では、ヘレネがパリスとともにトロイアへ向かったこと自体は決して否定しておらず、あくまでその行いがヘレネの放埒によるものではないという論法をとっている。エウリピデスの『ヘレネ』 (もつとも、これはヘレネを賞賛したり守ったりする意図のある作品ではないが) のように、そもそもヘレネはトロイアに行っておらず貞節は守られていたのだなどという神話の事実から遊離した論法、もしくは少数派の伝承に従う姿勢はとられていないのであ

る。なお、これは余談であるが、エウリピデスの『ヘレネ』は、前7-6世紀頃の詩人、ステシコロスに由来するとされる³²。ステシコロスは最初にヘレネの不貞について詩をつくると盲目になり、前言撤回の詩をつくったところ視力を取り戻したといわれる（イソクラテス『ヘレネ賛』第64章）³³。

悲劇作家のエウリピデスとは異なり、ゴルギアスやイソクラテスはあくまでも弁論家である。あえてヘレネの行いを否定せずに、なおかつヘレネを弁護したり賞賛したりするという困難なタスクを自らに課することによって、自身の弁論能力を誇示したことは容易に想像できる。

第6章

この章においては、ヘレネがトロイアへ向かった理由として考えられる4つの可能性が示されたあと、早速第1の可能性「運命と神の意図」について語られる。

前半部の文章構成についてMacDowell (1982, p. 35) は、4つの可能性について述べる際に、シンメトリーをつくり出す目的で、第1の可能性については3つの句（複数与格の名詞と属格の組み合わせ）によって説明し、それ以外の3つ（ただし、本論文では2つ）については、1つの句によって（分詞と与格の組み合わせ）によって説明しており、その中心となるのはἐπράξεν ἃ ἐπράξενという一節であると解説している。

Τύχης βουλήμασι καὶ θεῶν βουλευμασι καὶ Ἀνάγκης ψηφίσμασιν 「運命の意図と、神々の決議と、必然の評決によって」 A¹におけるβουλευμασι, βουλήμασι, ψηφίσμασινとA²におけるβουλήμασι, βουλευμασι, ψηφίσμασινという読みは前後の語順が入れ替わっているのみの違いであるが、もうひとつの主要写本であるX写本では、βουλήματι, κελεύσματι, ψηφίσματιという語が伝わっている。これら3パターンのうち、どの読みをとることが最善であるか、まず検討しなくてはならない：

1. A¹及びA²の読みをとるか、X写本の読みをとるかという問題

X写本におけるβουλήματι, κελεύσματι, ψηφίσματιという読みをとる場合、-ματιという脚韻をふむこととなるが、一方、A¹及びA²の場合では（βουλήμασι, βουλευμασι）ψηφίσμασινという並びになる。その場合、-μασιという脚韻のみではなく、前2つの語がβουλ-という頭韻をふむこととなる。ゴルギアスの技巧的な文体を考慮に入れるならば、A¹もしくはA²の読みが好ましいように思われる。X

³² *Poetae meliae Graeci*中にステシコロスの『ヘレネ』及び『パリノーディアー（前言撤回の歌）』が断片として残っている。

³³ Ἐνεδείξατο δὲ καὶ Στησιχόρῳ τῷ ποιητῇ τὴν αὐτῆς δύναμιν· ὅτε μὲν γὰρ ἀρχόμενος τῆς ὁδῆς ἐβλασφήμησέν τι περὶ αὐτῆς, ἀνέστη τῶν ὀφθαλμῶν ἐστερημένος, ἐπειδὴ δὲ γνοὺς τὴν αἰτίαν τῆς συμφορᾶς τὴν καλουμένην παλινωδίαν ἐποίησεν, πάλιν αὐτὸν εἰς τὴν αὐτὴν φύσιν κατέστησεν.

「詩人ステシコロスによっても、ヘレネの力は示される。というのは、彼が歌作りにかかって、ヘレネに関して非難めいたことを言ったところ、視力を奪われてしまったのだ、彼が歌が原因であったことを理解して、前言撤回の歌を作ると、彼は元通りの状態を取り戻した（視力が戻った）」

写本にあるκελεύσματι「命令」という語は、この1節の政治的語彙 (political vocabulary) に合っていないというSpatharas (2001, p. 146) の主張も軽視できない。

2. A¹とA²のどちらの語順をとるかという問題

またSpatharas (同上) は、βούλευμαを「評議会 (βουλή) の決定」βουλήμασιを「願望 (ここでの用法は意思決定に関するもの)」と説明している。評議会や合議というと、単独ではなく複数の参加者があるものとするのが一般的であろう。このことから、βούλευμαはθεῶνと結びつく方が自然と判断する。

さらに、X写本においてもΤύχηとβουλήματιが結びついていることも総合して、ここではA²に伝わるごとく、Τύχης βουλήμασι καὶ θεῶν βουλευμασι καὶ Ἀνάγκης ψηφίσμασινと読むことが最善であると判断する。

Τύχης βουλήμασι「運命の意図」 MacDowell (1982, p. 35) は、Τύχηを普通名詞としてではなく人格化された存在として考慮すべきであるとしている。同様の例としてMacDowellは、ピンダロス『オリュンピア祝勝歌』12. 1-2, ソフォクレス『アンティゴネ』1158, メナンドロス『盾』147-148, デモステネス『書簡』2. 5などを挙げている。

Spatharas (2001, p. 146) は加えて、ピンダロスが断片21においてこれをΜοῖραι (運命の女神たち) に含んでいることを報告している。

Ἀνάγκης ψηφίσμασιν「必然の評決」ここでのἈνάγκηは、上に述べたΤύχηと同様に、人格化されているとみるべきである。神々のうちでも強い存在であるとされる点においてこの2つは共通しており (シモニデス 5. 21との比較)³⁴、ソフォクレス『アイアス』485³⁵においては、これら2つが連結されていることは興味深い (Spatharas 2001, p. 146)。

ゴルギアスはエンペドクレスの弟子であったと言われるが、『ヘレネ賛』におけるこの一節が、エンペドクレス (DK31B. 115) を思い出させる³⁶。Ἀνάγκη「必然」を人格化するというのは、ギリシアの著作家においては一般的なことではない (MacDowell 1982, pp. 35-36)。

ψηφίσμαという語が「神の評決」として使用されることは決して一般的ではなく、他の用例としては、アリストファネス『蜂』376-378³⁷がある (MacDowell p. 36及びSpatharas 2001, p. 146)。

³⁴ Ἀνάγκη δ' οὐδὲ θεοὶ μάχονται 「必然によっても、神々は相争わない」

³⁵ τῆς ἀναγκαίας τύχης οὐκ ἔστιν οὐδὲν μείζον ἀνθρώποις κακόν 「人間にとって、強制的な偶然というものの以上の不幸は存在しない」

³⁶ ἔστιν Ἀνάγκης χρῆμα, θεῶν ψήφισμα παλαιόν 「必然の命令、神々の古い命令がある」

³⁷ τὸν περὶ ψυχῆς δρόμον δραμεῖν, ἵν' εἰδῇ μὴ πατεῖν τὰ τοῖν θεοῖν ψηφίσματα 「そして、生命に関わるレースを走らせてやるぞ、神々の判断を踏みにじることは許されないのだということを彼に知らしめるためにだ」

神の評決とはあくまでも、ポリス社会に暮らす人間たちが聞き手であるが故の比喩的表現だろうが、いくらか滑稽な印象を受ける。

<ἡ ἔρωτι ἀλοῦσα><愛によってとらえられたか> この読みは中世劣位写本によって伝承されているものだが、多くの校訂者はこれを受け入れている。A写本及びX写本が当該箇所について全く伝承していないことは、決して軽視できる事態ではない。ただし、文のバランスという点を考えると、本章冒頭の解説においてMacDowellによる説明を引用したように、ἐπραξεν ἃ ἐπραξενという文を間にはさんだ形で、前半部においては複数与格と属格名詞の組が3組 (Τύχης βουλήμασι, θεῶν βουλευμασι, Ἀνάγκης ψηφίσμασιν)、後半部では分詞と与格の組が3組 (βίᾳ ἀρπασθεῖσα, λόγοις πεισθεῖσα, ἔρωτι ἀλοῦσα) という構造は魅力的であり、ゴルギアスの傾向を考慮しても、もともと何らかの分詞と与格から構成される句が存在していたという可能性を完全に否定することはできない。

その他に、あえて中世劣位写本の読みを採用する理由としては、この <ἡ ἔρωτι ἀλοῦσα> 「愛によってとらえられたか」という読みが、後の展開 (第15章を参照) と合致していることを挙げることができる。仮にこの追加が改ざんによるものだとすれば、写字生はあらかじめ本文に空白を残し、その上で後続の本文を読んでからこの一節を付け加えたと考えられるが、そういったことは一般的に起こりうることではない。

さらに、第20章 εἴτ' ἐρασθεῖσα εἴτε λόγῳ πεισθεῖσα εἴτε βίᾳ ἀρπασθεῖσα εἴτε ὑπὸ θείας ἀνάγκης ἀναγκασθεῖσα 「愛されてだとしても、言論によって説き伏せられたとしても、力づくで誘拐されたとしても、神の強制力によって強いられて (それを行った) にしても…」という一文との対応も、この読みを支持する根拠たりえるものだ。

とはいえ、冒頭でも述べているように、A写本及びX写本にはこのような読みは全く伝わっていない。これは大きな問題となりうる。それでは次に、この挿入を認めない主張について見ていくこととしよう。

Päll (2007, p. 167) は、愛を神として考える場合 (第19章において、愛の神的な力についての言及が見られる)、第1の原因として神の責任が既に述べられているので、あえて補足を加える必要がないという解釈が可能であることや、加えて先述した第20章との対応関係に関しても、他3つの理由については行為者を表す与格もしくはὑπό+属格の形で行為者が示されているにも関わらず、愛に関しては受動相分詞のみで表されているという不均等さが認められることを指摘する。さらにPällは、Immisch (1927, p. 12) によればゴルギアスのリズムは基本的に2つ組であり、3つ組はまれであることも指摘する (p. 168及びp. 230. n. 41)。このことを考慮する場合、3+1+3というリズムは急激に魅力を失う。とはいえImmisch自身がこの箇所に <ἡ ὄψει ἐρασθεῖσα> という挿入を提案しているという矛盾があることは指摘されている。

挿入に賛成する側の意見も反対する側の意見もある程度の説得力を持っており、判断は難しいところであろう。だが、A写本及びX写本がこの読みの痕跡すら残していないことはやはり軽視できない。よって本論文では、中世劣位写本やその他校訂者（Immisch, Radermacher）による挿入を現段階では受け入れることができないと判断する。

ἄξιος αἰτιῶσθαι ὁ αἰτιώμενος 「非難する人こそ非難に値する」 ἔπραξεν ἃ ἔπραξεν という文章の構造と類似しているが、全く同一の繰り返しではなく同じ動詞の受動／能動という構造であることに注意。

πέφυκε...κωλύεσθαι...ἄρχεσθαι καὶ ἄγεσθαι...ἡγεῖσθαι...ἔπεισθαι 「妨げられる...支配され導かれる...導き...従うことこそ当然だ」

πέφυκε+不定詞で「～することは当然である」という非人称構文をとる。LSJ, φύω, B. II. 5を参照。

ἢ οὖν...ἀπολυτέον 「であるから、あるいは...解放すべきである」

Spatharas (2001, pp. 147-148) は、この議論の背景として、自然の摂理である φύσις と人間社会の法律である νόμος の対立関係を見ている。

この一文から、ゴルギアスが既成の道徳に対立的である (immoralist) などと考える研究者もいるようだが、Spatharas (2001, p. 148) は、ゴルギアスがただ摂理として、強いものが弱いものに自分のやり方や意思を押し付けるのは自然なことだと言ったに過ぎず、ゴルギアス自身がそのような人物かどうかをこの箇所だけでは判断できないと主張している。Spatharas も意見しているように、この箇所を根拠としてゴルギアス自身の思想について言及することは、いささか無理があるように感じられる。

一方納富 (2006, pp. 154-155) は、νόμος-φύσις の対立を必ずしもこの箇所に見ていない。納富が提示する三段論法は以下の通りである：

- [大前提] 強者が弱者を支配し導くことは、自然である
- [小前提] 神は、あらゆる面で強者であり、人間は弱者である
- [結論] 従って、神が人間を支配し導くことは、自然である

納富は、φύσις を大前提においているが、ここでは νόμος との対比がないことを明言している（同書 p. 154）。

どちらにしろ、ゴルギアスがここで述べていることはヘレネ弁護のための理論であって、ゴルギアス自身の考えを表明しているのかどうかまで判断すべきではないだろう。

ἡ οὖν τῇ Τύχῃ...ἡ τὴν Ἑλένην τῆς δυσκλείας ἀπολυτέον 「であるから、あるいは運命...あるいはヘレネを悪名から解放すべきである」

τὴν Ἑλένηνの前におかれるἡに関しては、写本の形がそのまま読まれるケースは少なく、ほとんどの校訂本では：

1. Dobreeに従って削除
2. Reiskeの読み替えに従ってκαίと置き換える
3. MacDowellの読み替えに従ってἡと置き換える

といういずれかの方法が取られている。しかしながら、そういった処遇が必要になる原因というのがそもそも、直前に位置する一節において、もともとA及びX写本に伝わる読みであるἡ οὖν...を放棄しReiskeによる読み替えεἰ οὖν...を採用していることではなかろうか。

しかし、写本に伝わる読みは本当に放棄されるべきなのだろうか。例えばPäll (2007, pp. 171-172) はこの箇所に関して、神や運命以外にもヘレネのトロイア行の原因があることはすでに明かされているのだから、神と運命の責任を問えなかったとしても、ほかの可能性についての議論に進めるという解釈をすれば、写本の読みは維持できると主張する。本論文では、写本の読みを維持するという方針のもと、Pällに従って解釈している。

第7章

次にゴルギアスが展開するのは、パリスの暴力によるヘレネ誘拐説である。もしもパリスが力づくでヘレネをスパルタから連れ去ったのであるなら、責任はあくまで加害者（パリス）にあるのであって被害者（ヘレネ）はなんら責められるべきではないとゴルギアスは論ずる。確かに、ヘレネの意思はまったく関係なしに、力に勝るパリスが彼女を連れ去ったなら、ヘレネが不貞な女であったと考えすることは適当でないと結論づけることは可能だ。

より強いものが弱いものを従えるという、『ヘレネ賛』におけるヘレネ弁護全体における流れが、ここでは「人間対神」ではなく「男性対女性」という、主に身体的な強さ（あるいは性別）を主眼とした形で現れている点には注目すべきである。ヘレネとパリスの対立関係については、パリスに関する動詞を能動相で表す一方、ヘレネに関する表現は受動相または受動的な意味を持つ動詞によって語られるケースが多く見られることから見てとれる。

εἰ δὲ βία ἤρπασθη καὶ ἀνόμως ἐβιάσθη καὶ ἀδίκως ὑβρίσθη 「もしも彼女が力づくで誘拐され、不法な仕方でも無理強いされ、不正な仕方でも手ひどく扱われたのなら」

副詞＋アオリスト受動相という構造を3回、しかも段階をおって表現を強める修辞技法（漸層法/climax）を織り交ぜて繰り返すことによって、畳み掛けるような強烈な印象を与え、次の文章で語られる「罰せられるべきはパリスであり、ヘレネは被害者であるのは明らかだ」ということへの同調を導く。

ὕβρισθηと同族関係にあるὑβριςという語についてSpatharas (2001, pp. 149-150) は、ただ相手を害する（この場合には性的暴行を加えること）だけではなく、相手に対して屈辱、不名誉を与える意図を含む語で、その点では単なる暴行以上に悪い行いをさす語であり、ゴルギアスはパリスの行いのみならず、その悪しき意図を同様に非難しようとしたのではないかと指摘している。

δῆλον ὅτι ὁ <μὲν> ἀρπάσας ὡς ὑβρίσας ἠδίκησεν, ἡ δὲ ἀρπασθεῖσα ὡς ὑβρισθεῖσα ἐδυστύχησεν 「一方で誘拐した男が手ひどく扱ったものとして不正を行ったこと、他方で誘拐された女が手ひどく扱われたものとして不運であったことは明らかだ」

2つの文章は完全な平行構造（冠詞＋小辞＋アオリスト分詞＋小辞＋アオリスト分詞＋アオリスト動詞）をなしているが、パリスの行いがまず能動相によって表現され、次にヘレネに関する記述が同じ動詞の受動相によって述べられている。このことによって、「パリス／ヘレネ」「男／女」「加害者／被害者」という構造が明白に示される。

また、Spatharas (2001, p. 150) は、先行する文章に現れる動詞（ἀρπάζω, ὑβρίζω）がここでは分詞の形で、さらに副詞（ἀδίκως）が動詞の形で再び現れていることを指摘している。

ὁ μὲν ἐπιχειρήσας βάρβαρος βάρβαρον ἐπιχείρημα 「一方で、野蛮な企てを企てた野蛮な男は」

βάρβαρος βάρβαρονという箇所は典型的なポリュプトン構造を示す。βάρβαροςは男性形でパリスのことを指し、続くβάρβαρονは中性形で「野蛮な」の意味。前者には冠詞がついて「野蛮な男」という名詞的な用法であるが、後者は後続のἐπιχείρημαにかかる形容詞という用法の違いがある。ἐπιχειρήσας...ἐπιχείρημαは、自動詞として使われるἐπιχειρέωに同族目的語がついた形であり、ポリュプトン同様に音声上の効果を狙ったものである。

この構造は、パリスの生まれ（非ギリシア人であること）が、パリスの行いの一因であることを強調するものであり、ギリシア人の非ギリシア人に対する優越という理念をゴルギアスもまた持っていたであろうことが読み取れる（Spatharas 2001, p. 150）。

その一方で、ゴルギアスもその作品を意識していたといわれるエウリピデスは、『トロイアの女たち』（764）におけるアステュアナクス（ヘクトルの息子で、トロイア落城の際にアキレウスの息子ネオプトレモスによって殺された）の殺害のような野蛮な行いを犯したことの責任をギリシア人に帰しており、通念を覆しているという指摘（Paduano 2007, pp. 92-93. n. 26）は興味深いものだ。

καὶ λόγῳ καὶ νόμῳ καὶ ἔργῳ, λόγῳ μὲν αἰτίας, νόμῳ δὲ ἀτιμίας, ἔργῳ δὲ ζημίας τυχεῖν 「言論において責めを、法において権利喪失を、そして行いにおいて刑罰を受けるに値する」

いくつかの校訂本においては、**καὶ λόγῳ καὶ νόμῳ καὶ ἔργῳ λόγῳ μὲν αἰτίας...**と、カンマを挿入せずに印刷されているようだが、**καὶ λόγῳ καὶ νόμῳ καὶ ἔργῳ**という前半部は明らかに直前の**ἄξιός οὖν ὁ μὲν...ἐπιχείρημα**に関連する部分であるから、カンマの挿入が必要と判断する。なお、ここで**καί**が使用されていることについて、パリスが「言論」「法」「行い」の3種すべてを行使したと考えるべきではなく「できうる限りの手段でもって」ということを意味しているというMacDowell (1982, p. 36) の指摘は正しい。

一方、カンマ以降の後半部で見られる与格は道具（手段）の与格ではなく観点の与格として解釈すべきである。よって「言論において責めを、法において権利喪失を、そして行いにおいて刑罰を受けるに値する」と解釈する。

Spatharas (2001, p. 150) は、ここでの与格の繰り返しが、悪事を働いたものには被害者が被ったものと同じ苦しみを味わわせるべきという考え方を強調していると説明している。ここでは加えて、「責め」「権利喪失」「刑罰」と、徐々に強い表現を使用する漸層法が使用されているとも理解できる。

ἀτιμίας, ζημίας 「権利喪失」「刑罰」 ともに法律用語である。前者は古い時代には「社会的追放 (outlawry)」を意味していたが、時代が進むにつれて「公民権の剥奪」という意味になった。

ゴルギアスがここで、神話にほとんど適用しようのない法律上の専門的な問題 (legal technicalities) を取り上げようと考えているわけではないだろうが、法律用語を盛り込むことによって本当らしさを加えようとしたという可能性は指摘されている (MacDowell 1982, p. 36およびSpatharas 2001, pp. 150-151)。

τῶν φίλων 「親しいものたち」 ここでは家族、親戚、友人を含む「親しい人々」を表す。『イリアス』第3歌には、ヘレネがプリアモスに対して「わたくしが夫や縁者、それに愛しい娘や仲のよかった幼な友達たちまで捨て、御子息に随ってこちらへ参りました折、むしろ惨めな死を選んだ方が宜しゅうございました」と語るシーンがある。

οἰκτεῖραι 「哀れむ」 A写本及びX写本ではοἰκτεῖρεινという現在不定詞が伝えられている。οἰκτεῖραιという読みはAm₃写本及びR写本に伝わるもので、Blassによる読み替えοἰκτῖραιもここに由来する。なお、この箇所においてはヘレネについてもパリスについても形の上では能動相が使われている点に注意。

第7章においては、アオリストが多くの場合に使用されており、またこの箇所はδίκαιον οὖν τὴν μὲν οἰκτεῖραι, τὸν δὲ μισῆσαι「女（ヘレネ）を哀れみ、男（パリス）の方を憎むのが当然だ」という平行構造（対格冠詞／ただしここでは指示代名詞に近い＋小辞＋不定詞）をなしていることから、A写本及びX写本とは異なった読みを根拠にしているにも関わらず、中世劣位写本の伝える読みやBlassによる読み替えが魅力的なものとなる。加えて、このοἰκτίρωという動詞が多く of the 写本においてοἰκτεῖρωと綴られる（LSJ, οἰκτίρωの項を参照）ことや、A写本及びX写本においては後者の綴り方が用いられていることを考慮した場合、Am₃写本及びR写本によるοἰκτεῖραιを印刷することがここでは望ましいと判断する。

第8章

この章において、ゴルギアスは言論を「偉大な支配者」と呼び、その効能として「人間の様々な感情を喚起すること」を挙げている。ここから語られる言論の力は『ヘレネ賛』においてもっとも重要なテーマのひとつであり、ゴルギアスがもっとも強調したい事柄である。

先の第7章においては「パリス／ヘレネ」すなわち「男性（支配する側）／女性（支配される側）」という対立関係が扱われていたが、ここからの議論においては「言論（支配する側）／魂（支配される側）」が同じ対立関係をなしていると考えられる。この章以降に現れる「言論／魂」「愛／魂」の関係性についても同じことだが、男性（名詞）が女性（名詞）を常にコントロールするという関係となっていることは非常に興味深い。

納富（2006, p. 156）が指摘するように、本来、古代ギリシアにおける「説得」とは、「暴力」との対比で肯定的にみられるものだが、ここでは必ずしもそうではないことは、注視すべき点である。

ἀπατήσας「欺く」　ゴルギアスの著作とἀπάτηの関係性については、多くの研究者が言及している。Spatharas（2001, pp. 151-153）によれば、Verdenius（1981, p. 125）は、ゴルギアスが説得と欺瞞を同一視していると主張した。またKerferd（1981, pp. 81-82）の、人間の知識は不完全なゆえに、ゴルギアスにとってλόγοςは常に当てにならない、人を惑わすものだという視点や、Rosenmeyer（1955）の、ゴルギアス的な欺瞞の概念というものが、言論は具現描写に関わるもの（representational）ではないという事実の中にあるという見方も紹介されている。

ゴルギアスの「欺瞞に関する理論」については、DK82B. 23にも所収されているプルタルコス『アテナイ人の栄光について』5p. 348C ὡς Γοργίας φησὶν, ἣν ὁ τ' ἀπατήσας δικαιότερος τοῦ μὴ ἀπατήσαντος, καὶ ὁ ἀπατηθεὶς σοφώτερος τοῦ μὴ ἀπατηθέντος「ゴルギアスが語るところでは、だま

す人は、だましていない人よりも公正で、かつ、だまされている人は、だまされていない人よりも賢い」の一節について言及されることも多いことも、Spatharasは指摘している。

そしてSpatharasは、これらの見方に対してことごとく反論している。まずVerdeniusの主張について、後続している「説得力のあるλόγοςに関する議論」が、ある状況においてのみλόγοςは人を惑わしかねないものだということを明らかにしているとし、ゴルギアスに帰されている欺瞞の理論というのは他の証拠からみても筋が通らず支えに乏しいのだから、それらをゴルギアスに帰するのは間違っていると主張する。またKerferdの視点については『ないについて』に由来する証拠の危険な利用であると指摘し、さらにRosenmeyer (1955, p. 232) の、ゴルギアス以前はネガティブな状態と見られていた「言葉と物事がしばしば一致しないこと」について、ゴルギアスがポジティブなものとしてとらえたことで、ἀπάτηはゴルギアスの語彙の中でも特に目立ったものとなっているという主張についても、ἀπάτηという単語が実際にはそれほど多く使われていないという理由を挙げて退けている。Spatharasの報告によれば、ἀπάτη及びその派生語がゴルギアスの著作に登場する回数は非常に少なく、『ヘレネ賛』においては当該部分と、第10章に現れるἀπατήματαという2つのみが認められ、『パラメデスの弁明』においても第33章にひとつの例があるだけである³⁸。

そして、DK82B. 23については、ここでいわれているのは演劇であり、演劇の場合に限ることであると説明している。パリスとヘレネの関係にこの断片の論理を当てはめれば、筋が通らないという主張はもっともである。

λόγος δυνάστης μέγας ἐστίν, ὃς σμικροτάτῳ σώματι καὶ ἀφανεστάτῳ θειότατα ἔργα ἀποτελεῖ 「言論とは偉大な支配者なのだ。それはきわめて小さく目に見えない身体によって、きわめて神がかった行いを成し遂げるのだ」

この箇所はゴルギアスの言論に対する考え方、言論の持つ力への礼賛を明確に示す箇所のひとつである。λόγος「言論」は人格化され、身体を持つものとして扱われる。MacDowell (1982, p. 36) はエウリピデスが『ヘカベ』814-819においてπειθώ「説得」をτύραννος「僭主」と表現していることとの比較を促している。λόγοςを人格化して扱うことは、もちろんゴルギアスが始めたことではなく『イリアス』『オデュッセイア』においてῥεα「言の葉」は身体的に翼をもって、話者の口から飛び出していくと描写されている。

『ヘレネ賛』ではさらに、λόγοςは小さな身体をしているが偉大な支配者であり、神がかった行為をなす存在とされている。ここではλόγοςを人格化し、その小さな目に見えにくい身体と神がかった偉大な力を対比することで、より印象を強める効果を狙っていることは明白だ。

³⁸ οὐκ ἀπατήσαντά με δεῖ διαφυγεῖν τὴν αἰτίαν ταύτην 「私はこの罪状を、だますことで逃れるべきではない」

Buchheim (1989, p. 164. n. 19) は興味深い類似例として『ヒッポクラテス集典』所収のπερὶ τῶν Φυσῶνから οὗτος δέ (=ὁ αἷρ) μέγιστος ἐν τοῖσι πᾶσι τῶν πάντων δυνάστης ἐστίν「空気というのはまさしく、すべてのものの中でもっとも偉大な支配者である」という一節を引用している。そこでは同じくδυνάστηςである空気が、理性的でかつ同時に物理的な説明下に置かれているとSpatharas (2001, p. 153) は説明する。

καὶ φόβον...ἐπαυξῆσαι「すなわち、恐れを...いや増す」 ゴルギアスは、具体的にλόγοςが何をなせるのかという例を示している。ここでは、「恐れ」「苦悩」と「喜び」「哀れみ」とが組をなす構造が見られる。ごく単純な見方としては、前者はネガティブな感情であるのに対して後者はポジティブな感情であるという区別が可能であろう。それぞれの感情に関する一般的な解釈はもちろんのこと、前者については「おさめる」「取り去る」、後者に関しては「生じさせる」「いや増す」という動詞がそれぞれ使われていることからそれは読み取れる。

Segal (1962, p. 124, ただしSpatharas 2001, pp. 154-155より引用) は、この配列はおそらく故意に変えられたもので、喜びと苦痛はともに受動的、恐れと哀れみは能動的であると指摘する。さらに第19章末ψυχῆς ἀγρεύμασιν, οὐ γνώμης βουλευμασιν, καὶ ἔρωτος ἀνάγκαις, οὐ τέχνης παρασκευαῖς (pp. 149-150. n. 97) と比較し、この箇所でも同様に2つの外的要素と2つの内的要素が意味における一致をみていると説明している。

またSegalはἐπαυξῆσαι「いや増す」という動詞の用法に基づいて、ゴルギアスはある程度の量のἔλεοςの存在を、λόγοςが訪れるよりも前の段階において魂に割り当てていると仮定しているが(元々そこになにかがなければ、「増す」という言い方はできない)、それに対してMacDowell (1982, p. 36) のように、動詞の並べ替えは修辞学上のバランスのためであって、前者2つと後者2つの意味の違いのためではないという見方も存在する。

第9章

ここでは「言論の力」を示している具体的な例として詩を挙げて、その影響力について示している。ゴルギアスは詩の定義として「韻律を持った言論」と説明しているが、そのことに関して、ゴルギアスは詩という全体についてここで言及しているのではなく、悲劇に特化して述べていると解釈する研究者も存在している(詳しくは後述)。だが、ゴルギアスは決して限定的な意味で定義しているのではなく、詩作全体を含めたいと考えるべきだろう。MacDowell (1982, pp. 36-37) が考えるように、ここでゴルギアスが注目しているのは「詩とは言論の一種である」という点であって、それ

以上深い意味はないように思われる。彼が『ヘレネ賛』において強調したいのは言論の力なのだということを見失うべきではない。

なお、「韻律を持つ言論」という表現は、西洋文芸批評史上でも最初の詩に関する定義とされている（納富 2006, p. 157）。

δεῖ δὲ καὶ δόξῃ δεῖξαι τοῖς ἀκούουσι 「そしてまた、判断によって、聴衆に示さねばならない」

この箇所では、写本が非常に理解しづらい構造を示しているため、様々な読み替えが提案されている。例えばDielsはκαὶ δόξαι [δεῖξαι], Immischはκαὶ δοξα δεῖξαιといった読み替えを提示している。とはいえ、MacDowell (1982, p. 36) も指摘するように、完全に納得のいく説明もしくは読み替えというのはないというのが現状ではないだろうか。

写本に従って読もうとする場合、δόξῃの解釈についてSpatharas (2001, p. 156) は、Untersteiner (1961, pp. 98-99) のように、δεῖξαιに支配される間接目的語とみなす考え方で、MacDowell (1982, p. 36) のように、道具の与格とみなす考え方が可能であるが、ただし前者の考え方を採用するならばδόξῃ δεῖξαι τῶν ἀκούόντων「聴衆の判断に対して示す」という構造が求められるのに、ここでは与格（τοῖς ἀκούουσι）が不定詞δεῖξαιの目的語とならざるをえない構造となっているため弱く、そのため必然的に後者を採用することになるが、それでも意味は不明瞭であると説明している。

τὴν ποίησιν ἅπασαν καὶ νομίζω καὶ ὀνομάζω λόγον ἔχοντα μέτρον 「すべての詩のことを、韻律を持つ言論であると私はみなし、呼んでいる」

ここでゴルギアスが「あらゆる詩とは韻律を持つλόγος」と考えていることが明らかになる。この定義についてはアリストテレス『詩学』との関連性が長らく議論されている。アリストテレスは詩の媒体（media）としてλόγοςのほかにῥυθμός「リズム」ἀρμονία「メロディ」という3つの要素を挙げ、μέτρονとはῥυθμόςとλόγοςが結びついたものを意味するとしている。けれどもMacDowell (1982, p. 37) が指摘するように、ゴルギアスにとってそういった特徴は重要ではないと理解すべきである。なお、ここで描写されている概念に類似した例としてSpatharas (2001, pp. 158-159) は、イソクラテス『エウアゴラス』10-11やプラトン『ゴルギアス』502c5-7を示している。『エウアゴラス』では、詩的言語からμέτρονが取り去られると、われわれの詩に対する尊重はひどく衰えてしまうと主張されている。一方『ゴルギアス』では、詩的な創作物からメロディ、リズム、韻律をはいでしまうと残るものは言論であると言われている。

ここで言われているのは悲劇に限られるという主張（Pohlenz, Rostagni, Cataudella, なお Untersteiner, 1954, p. 127. n. 53に引用されている）は受け入れがたい。この主張は、後続の部分

にアリストテレス『詩学』の数節との言葉の類似が見られること（幾人かの研究者は、ゴルギアスが『ヘレネ賛』第9章においてκάθαρσις「浄化」の理論を先取りしていると考えているようだ）から来るものようだが、Spatharas (2001, pp. 159-160) がこれに反論する理由として挙げる理由：

1. 悲劇は見せ物として考えられているにも関わらずἀκούοντας「聴衆」という語が後続すること
 2. ἄπασαν「あらゆる（詩）」と言われていること
 3. 詩によって人間の感情が喚起されるというのは決して悲劇の専売特許ではないこと
 4. なぜ悲劇だけが「韻律を持った言論」という描写をされるのか解せない
- という4点は、いずれも納得のいく視点である。

de Romilly (1973; ただしSpatharas 2001, p. 160より引用, Segal 1962, p. 128も参照) は、『ヘレネ賛』において詩は人間のτέχνη「技能」の産物として描写されており、神的な力やムーサによって喚起されるものではないと指摘しているが、これに関してはMacDowell (1982, p. 37) が、第10章において表れるἐνθεοί「神によって喚起される」とτέχναιという2つの語が、ゴルギアスにとってτέχνηは神的な力と共存できないものではないことを示しているとして反論している。さらにSpatharas (同上) は、『ヘレネ賛』では第11章よりも前では、λόγοςが人間の技術による生産物であると述べられていないことを指摘している。

καὶ φρίκη περίφοβος καὶ ἔλεος πολύδακρυς καὶ πόθος φιλοπενθήης 「大きな恐れを伴う畏怖と、多くの涙を伴う憐憫、そして悲しみに満ちた憧憬」

καίによって結ばれている名詞（φρίκη「畏怖」、ἐλεος「憐憫」、πόθος「憧憬」）及びそれにかかる形容詞（περίφοβος, πολύδακρυς, φιλοπενθήης）の音節数が類似するように構成された一文である。

ゴルギアスがここでアリストテレス『詩学』を先取りしたという考え方は疑わしい。一見すると、確かにこの文脈において使用される言葉遣いは『詩学』を連想させる（『詩学』1453b 4-5ではφρίπτειν καὶ ἐλεεῖνが共存している）。一方で彼は悲劇の「定義」において、κάθαρσιςはἔλεος及びφόβοςによって得られると定義している（Spatharas 2001, pp. 161-162）。

Pohlenz (1920, pp. 142-178) は、ここでの詩の描写と悲劇との類似を指摘した。ゴルギアスによるκάθαρσις理論の先取りについてはNestle (1908, pp. 561-562) とDuncun (1938, p. 412) にも受け入れられている。Untersteiner (1961, p. 99) では、これらの語を通じて「ゴルギアスは詩について考えている」ということが明らかになると主張する際、堂々巡りの議論がなぞられ（彼はSüss, p. 85を引用している）、Vollgraff (1952, p. 93. n. 5) の場合は、アリストテレスがπόθοςではなく、ゴルギアスのφόβος（=φρίκη）とἔλεοςを利用したという結論に至りうるように思われる。

しかし、Spatharas (2001, pp. 162-163) は、プラトン『イオン』535c-dと比較して、上のような解釈に対して反論している。『イオン』では、ソクラテスが叙情詩上演家のイオンに「私が何か哀

れみを誘うようなことを言った場合、私の目は涙で一杯になり、また何か恐ろしいことやひどいことであれば、髪は逆立ち、心臓は恐ろしさに跳ね上がるだろう」と語る。また、それからイオンに対して、彼が観衆たちの間に同じような感情を引き起こしていることを理解しているかと尋ねる。するとイオンは「はい、とてもよくわかっています。私は毎度、彼らが言われたことに対して泣きわめいたり、恐ろしげに顔を見合わせたり、一斉に驚いたりしているのを、演台の上から見ています。また、私は彼らに注意を向けねばなりません。もし彼らを泣かせることができたら、自分自身は銀貨を得て笑っているでしょうし、また彼らを笑わせてしまった時は、私自身は銀貨を失って泣いているでしょうね」と答えるのだ。

この対話篇では、ソクラテスとイオンが詩について対話している。イオンのレパトリーがホメロスの叙事詩を語ることとその解釈であることは、この少し前に明らかになっている。このことから、叙事詩が悲劇と同じ種の感情や反応を引き起こすということが断言できるとSpatharasは考えている。

また、κάθαρσιςをゴルギアスが先取りしたという仮説も間違いであると彼は続けている。なぜなら、その意味がまだ知られていない概念にそれを投影することで、彼らはその仮説を説明しているからだという。すなわち、アリストテレスはκάθαρσιςの意味を何も説明していない。ゴルギアスとアリストテレスの間に唯一共通のものとは、悲劇（ゴルギアスに従えば詩というもの全般；Russel 1981, p. 23を参照）によって明瞭に生ずる感情として「哀れみと恐れ」を設定していることを強調していることだ。しかしその2つの感情におかれた強調はゴルギアスによって始まったことではなく、ホメロスは既に、ネガティブな感情を体験させることで喜びをもたらすという詩の力に気づいていた（Spatharas 2001, p. 163）。

πόθος φιλοπενθήης 「悲しみに満ちた憧憬」 MacDowell (1982, p. 37) によれば、πόθοςとは不在または亡くなった人に対する熱望を表わす語である。この読みはA写本のみにみられる読み方で、もうひとつの主要写本であるX写本はφίλος φιλοπενθήηςという読みを伝えている。しかしながらX写本の読みは、ゴルギアスの語法を明らかに意識した手直し（φιλο-の連続をあえてつくり出す）が加えられた結果ではないかと考えられる。

φιλοπενθήηςという語は、プルタルコス（LSJ, φιλοπενθήηςの項によれば2. 113a及び2. 822c）以前には他のどこにもみられない語であるようだということもMacDowellは合わせて指摘している。

ἐπ' ἄλλοτρίων τε πραγμάτων...ἰδίον τι πάθημα διὰ τῶν λόγων ἔπαθεν ἡ ψυχὴ 「魂は言論を通じて、他人の行為や...ある種の固有の災難を被るものなのだ」

ἐπίは、εὐτυχίαις καὶ δυσπραγίαιςを支配する (MacDowell 1982, p. 37) 。LSJ, ἐπίの項を合わせて参照。

πάθημα διὰ τῶν λόγων ἔπαθεν ἡ ψυχὴ 「魂は言論を通じて、災難を被るものなのだ」

納富 (2006) は「言論によって魂は何か固有の受難を被ったのだ」と訳している。この訳は、明らかに「ヘレネ／パリス」と「魂／言論」の対応関係を意識したものだ。ゴルギアスがヘレネ弁護の一環として言論に関する議論をしているという事実を考慮すれば、この考えは理にかなっている。

φέρει δὴ πρὸς ἄλλον ἀπ' ἄλλου μεταστῶ λόγον 「さて、ひとつの言論からまた別の言論へと話を進めることにしよう」

MacDowell (1982, p. 37) によれば、ここは伝統的な章分けに従って、第9章に含まれる形で印刷しているが、この部分から新しい話題に入ることは明らかである。

MacDowellはまた、詩と同様に感情を動かすもうひとつのもの、すなわち魔術へと議論が進んでゆくが、詩は決して魔術と同じ種類に属するものではなく、その反対でもない。ゴルギアスが議論の中で詩と魔術を別の例として区別していることは ἄλλον ἀπ' ἄλλου という箇所から明らかだと指摘する。

第10章

ゴルギアスが「言論の力」を示す第2の例としてあげるのは呪術、まじないの類いである。魔術的な呪文も詩と同様、言論を媒介として人間の感情に大きな影響を与えるものであると彼は主張する。

de Romilly (1975, ch. 1) によれば、詩の働きというものは、ゴルギアスも述べているように、魔術の働きと類似するものであり、さらに彼女は「ゴルギアスは故意に魔術を何らかの理性的なものへとシフトしようとしていた」(同書 p. 20, ただし Spatharas 2001, p. 164より引用)と推測する。しかしMacDowell (1982, p. 37) は「(詩と魔術) 両者のつながりはde Romillyによって幾分か大げさに言われている」と反論する。

これら2つが媒体たる λόγοςの力を例示するという点で関連することは確実であり、両者とも人間の精神に影響を及ぼし、神的なものである (Spatharas 2001, pp. 164-166) 。

ἐπωδαί 「呪文」 **ἐπωδή** 「呪文」 **ἐνθεός** 「神がかった」ものとされる理由は、呪文によって神的な力に対して訴えるからである (Segal 1962, p.128. しかしながらSegalは第10章と第13章における τέχνη という語の繰り返し、人間の生産物としての λόγοςの効能を強調するという考えに基づいている。de Romille (1975) も参照, ただし Spatharas 2001, p. 165より引用)。しかしSpatharas (同

上)は、呪文の神的な起源についてゴルギアスがここで否定しているというSegalの考えに懐疑的で、呪文を使って行う(神的な)方法で人間の精神に影響を及ぼすことを可能とする人間の能力と、彼らの神的な本性とは全く別であると指摘している。

『ヘレネ賛』における言葉遣いと類似性、呪文の機能に関連してはエウリピデス『ヒッポリュトス』478-479のείσιν δ' ἐπὶ δαὶ καὶ λόγοι θελκτῆριοι· φανήσεται τι τῆσδε φάρμακον νόσου「呪文というものがあり、また魅惑的な言葉というものもある、この病の薬となりそうなものなら、なにかあらわれるでしょう」という一文を見よ。この一文は『ヘレネ賛』第14章末に見られる術語のまとめとなっている。第14章では人体に対しての薬と精神に対しての言論の作用が類似しているということに関して述べているが、『ヒッポリュトス』においても「言論／呪文＝薬」という関係性が示される。

プラトンはἐπὶ δὴという語を弁論が聴衆に対して与えるインパクトを叙述するために使用する。一例としては『エウテュデモス』290a1-5 ἡ μὲν γὰρ τῶν ἐπὶ δὴ ἔχων τε καὶ φαλαγγίων...ἡ δὲ τῶν δικαστῶν τε καὶ ἐκκλησιαστῶν καὶ τῶν ἄλλων ὄχλων κήλησις τε καὶ παραμυθία τυγχάνει οὕσα「呪文の魅力はクモやサソリ...一方弁論家は陪審員や民会、その他の場での群衆の魅了と説得なのであるから」が挙げられる。

カルケドンのトラシュマコス、プラトン『パイドロス』267c (DK85B. 6)においてὀργίσει τε αὖ πολλοὺς ἅμα δεινὸς ἀνὴρ γέγονε καὶ πάλιν ὠργισμένοις ἐπὶ δὴ κηλεῖν「この男は、大勢の人の怒りをかき立て、しかもそのように怒らせておいてふたたび、呪文でもかけるようにして彼らを魅惑することのできる達人でもあるのだよ」と言われているが、このトラシュマコスは『スーダ』(DK85A. 1)によればイソクラテスの弟子とされている。しかしこの箇所には議論があり、テイシアスの弟子でありイソクラテスの教師だったと解釈する向きもある³⁹。イソクラテスやテイシアスといった、ゴルギアスとの関連があるとされる人物との関わりを持っていたトラシュマコスが聴衆をコントロールする能力に長けていたことは、ゴルギアスが『ヘレネ賛』において「言論が人間の精神に影響する」と繰り返し述べていることを思い起こさせる。仮にトラシュマコスがテイシアスの弟子であったとすれば、彼はゴルギアスと共通の師を持つことになる。テイシアスとコラクスが著したとされる書物の内容はもはや知り得ないが、この書物においても、もしかすると言論と人間心理の関係が論じられていたのかもしれない(この項全体の議論についてはSpatharas 2001, pp. 165-166)。

συγγινομένη γὰρ τῇ δόξει τῆς ψυχῆς ἡ δύναμις τῆς ἐπὶ δὴ「つまり、呪文の力は魂の判断と交わり」

納富訳(2006)では「魂の思いと交わる」という表現を採用している。ψυχή「魂」が女性名詞であることから、λόγος「言論」という男性名詞との関係性を考慮し、συγγίγνομαιを性的なニュアンスを含む語として(LSJ, συγγίγνομαι II. 3) 解釈したものである(同書 p. 158もあわせて参照)。こ

³⁹ 同書85A. 1の注を参照。

の考え方は、これまでのゴルギアスの議論の流れを考慮すれば、納得のゆくものである。本注釈第9章πάθημα διὰ τῶν λόγων ἔπαθεν ἡ ψυχὴの項も参照。

ἔθελε「魅了する」 Verdenius (1981, p. 122, ただしSpatharas 2001, p. 166より引用)は「ホメロスがθέλλεινという語を人間について使用する場合、しばしば嘘を含む巧みなスピーチに言及している」と述べている。Spatharas (同上)は上記に加えて、エウリピデス『ヒッポリュトス』478の λόγοι θελκτήριοι「魅惑的な言葉」という例があることを指摘している。

γοητεία「魔法で」 この単語には「妖術、魔術」の意味ともうひとつ"jugglery"「だまし、ペテン」の意味がある(*LSJ*, γοητείαの項を参照)。しかし文脈から判断するに、前者の意味で理解すべきであろう。

Spatharas (2001, p. 166)はDK82A. 3におけるディオゲネス・ラエルティオスのαὐτὸς παρείη τῷ Ἐμπεδοκλεῖ γοητεύοντιという証言は疑わしいものだとしている。なお、Spatharasは当該箇所について"Gorgias was initiated in the art of magic by Empedocles"「ゴルギアスはエンペドクレスによって魔術的な技術の手ほどきを受けた」と記載しているが、πάρειμιは与格と結びついて「(与格)のそばにいる」という意味となる。よってゴルギアスは「エンペドクレスの魔術をこの目で見た」のであって、少なくともこの証言からは、ゴルギアス自身が手ほどきを受けたかどうかは判断できないように思われる。

γοητείας δὲ καὶ μαγείας δισσαὶ τέχναι εὗρηνται「妖術及び魔術という2つの技術が発見されているが」

2つの属格γοητείας, μαγείαςは2つのτέχναιを定義するものである。つまり「妖術という技術と、魔術という技術が存在する」と理解できる(MacDowell 1982, p. 37)。その読みに従えば、ゴルギアスは「加えて、2つの技術、すなわち妖術という技術と魔術という技術が発見されている」と語っており、残り部分は2つの技術の説明となっている。この説明を受け入れるなら、γοητεία, μαγείαを共に提示するのはまともに欠けるように思われる可能性があり、また2つの技術が発見されているという情報は冗長かつ脈略の合わない挿入に見えるかもしれないが、これら2つはこのとき技術として昇格したということと、μαγείαという単語はゴルギアスより古い時代の古典ギリシア文学において一般的ではない語である(ティモテウス51. 102をのぞけば、この箇所ですべて初めて出現する語である)ことを心に留めておくようにとSpatharas (2001, p. 167)は指摘する。彼の考えるところでは、ゴルギアスは妖術と魔術を技術として分類するという新しいことを実行したのであるが、一見したところではその目新しい試みが理解されにくいのだ。そしてこの形式的な分類は、δισσαὶ

τέχναιという語により強められるのである（そのことは2つの技術が区別されるということを示しはするが、なにゆえそうなのかということをゴルギアスは説明していない）。

納富（2006, p. 158）は、この2つの技術に関して「魂を説得によって動かす『技術（テクネー）』が発見された。呪いと魔術とは、ゴルギアス自身の言論の術、すなわち『弁論術』を意味する」と記しているが、果たしてそこまで言い切つてよいのかどうかについては疑問である。確かに、弁論術はそのような性質を持つものかもしれないが、ここではやはり単純に、魔術や呪文の類いを指していると考えるべきだろう。

ψυχῆς ἀμαρτήματα καὶ δόξης ἀπατήματα 「魂の誤りと判断の欺瞞」

ψυχῆς ἀμαρτήματα と δόξης ἀπατήματα という脚韻を含んでいる上、構成要素、音節数なども似通っている。

MacDowell (1982, pp. 37-38) は「この一文はゴルギアスの好む種類の押韻構造をなす組み合わせになっており、ゴルギアスにとってそのことは両者を句に入れるための十分な理由となりうる。われわれは意味上の何らかの差異があるのではないかと推測する必要はないし、一方が γοητεία のみに属し、もう一方は μαγεία のみに属するということを考える必要もない」と説明している。

第11章

第11章の議論は、偽りの言論によって多くの人がだまされだまされていることから始まる。人間がもしも「過去の記憶と、現在の考察と、未来の見通し」を持っていたらまた違っていただろうが、それは容易なことではないと語られる。また、それが困難なゆえに多くの人は「判断」を頼りにしているということにも触れられている。

ὅσοι δὲ ὅσους...πείθουσι δὲ ψευδῇ λόγον πλάσαντες 「どれだけ多くの人が、どれだけ多くの人を...偽りの言論を捏造して説き伏せていることか」

Spatharas (2001, pp. 167-168) はὅσοι や ὅσους の解釈について、「どれだけ多くの人が、どれだけ多くの人を...」と翻訳すべきであり、幾人かの校訂者が考えているような「説得するものはだれであれ...」という解釈をするべきではないし、ゴルギアスの「欺瞞の理論 (theory of deception)」を常に見て取るのは間違いであると注意を促している。文法的に言い換えるならば、Spatharas はὅσοι という語を間接疑問文及び感嘆文を導く疑問代名詞であると理解することを求めているのである。たくさんのだます人がいるしだまされる人もいるが、すべての人がだまされたりだまされたりするわけでは決してない。

ὅσοςを重ねて使うことについて、MacDowell (1982, p. 38) は、鋭敏な作家が対比 (contrast) を表現するためにこの類いの感嘆を含むポリュプトンを用いることがあると説明している。彼は実例としてソフォクレス『アイアス』923及び『パラティヌス詩華集』7. 740. 6⁴⁰を示している。さらにSpatharas (2001, p. 168) は、同じゴルギアスの『パラメデスの弁明』第22章⁴¹を、対比を明らかにする例として示している。

πλάσαντες 「捏造する」 πλάσσω (アッティカではπλάττωと綴る) はもともと「形作る (mould)」の意味だが、比喩的な意味で「捏造する (fabricate)」の意味も持っている。LSJ, πλάσσω, Vを参照。

τῶν τε παρόντων <ἐννοίαν> 「現在の<考察>と」 <ἐννοίαν> はBlass (Reiske?) による補いになるが、前後の文構造から推測するに、ここに何らかの語が入る可能性はある。この読み替えは意味の点でも納得できるものだ。

οὐκ ἂν ὁμοίως ὅμοιος ἦν ὁ λόγος 「言論は同じであっても、同じあり方ではないだろう」

A写本ではὅμοιος ἦνという読みが、X写本ではὅμοιος ὦνという読みが伝わっている。ただし両写本の読みが満足なものではない (どちらの写本に従うにしても、ὅμοιοςという語の意味が不明瞭になることが問題とされている) という意見を持つ校訂者によっていくつかの読み替えが提案されており、それらに従って印刷されているテキストも存在する。

とはいえ、ゴルギアスがここで言わんとしていることは明らかだ。すなわち、実際のところ人間は過去の記憶、現在の考察、未来の見通しを持っていないものだが、仮にそれらが備わっていたなら人間は悪しき言論の餌食とはならないであろうということを彼は伝えたいのである。

Kerferd (1981, pp. 81-82) は、ὅμοιοςという読みを維持している。Kerferdはゴルギアスが『ないについて』第2部 (DK82B. 3, 第77章-第82章) 及び第3部 (同書第83章-第86章) において語っている事柄との関連性を指摘している。まず第2部では「何かが存在している場合、それらは人間には知ること、思考すること、把握することもできない」ということが言われ、次の第3部では「その何かが理解されたとしても、他の人にそれを伝えることはできない」とされる。なぜなら、人間の伝達手段は談話もしくはλόγοςであるが、このλόγοςは現実存在する外的な対象物ではないし、

⁴⁰ οἷος ὦν οἷως ἔχεις 「ああ、こんなにも偉大な男が、こんなにも低く倒れている！」

γαίης ὅσσης ὅσον ἔχει μόριον 「これほどの大きな大地の、たったこれだけの分け前」

⁴¹ τοιοῦτος ὦν τοιούτου κατηγορεῖς ἄξιον γὰρ καταμαθεῖν, οἷος οἷα λέγεις, ὡς ἀνάξιος ἀναξίῳ 「あなたはどのような人間で、どのようなことを話そうとしているのか？ 吟味する価値がある。あなたは軽蔑に値するものが、軽蔑に値するようなものに話しているような様子であるが」

またあり得ないからだ。それらを踏まえてKerferdはこの一文を"if men did possess knowledge, the logos would (visibly) not be similar (to that of which they possess the knowledge) "「もしも人々が知識を持っていたなら、言論は（彼らが知識を持っているそのものとは）同じではなかっただろう」と解釈している。

一方MacDowell (1982, p. 38) は、このὁμοιοςはὁμοίωςが直前にあることから誘発されたミスであると解釈し、短剣符をつけて、ὁμοίωςを"not with the same intensity"「同じようには（影響力をもた）ない」と解釈する読みをとっている。

さらにMacDowellは以下の点から、先のKerferdに対して反論している：

1. 先行する文と後続する文を対比する修辞学的必要性がないこと（この場合、εἰ μὲν γὰρ πάντεςのかわりにεἰ γὰρ καὶ πάντες「すべての人が知識を持っていた場合でさえ」という構造を必要とするとMacDowellは指摘する）
2. この弁論のどこにも触れられていない特別な哲学的要点は、ὁμοιοςという一語をもって聴衆に明らかになるものではない
3. ὁμοίως ὁμοιοςでは意味をなさず、ὁμοίωςが不可解なままに残ってしまう

さらにSpatharas (2001, pp. 168-169) は、MacDowellの主張に加えて、さらに2つのことからKerferdの主張は退けられると考えている：

1. Kerferdがゴルギアスに押し付けている"opinion"と"knowledge"の間の区別は『パラメデスの弁明』においては見られるが『ヘレネ賛』においては見られないものであり⁴²、散り散りの証拠を体系化したものである
2. Kerferdは『ないについて』に由来する根拠を伝えており、そこでは確かにλόγοςは「もの、こと」(things)とは異なると主張されていることを認めざるを得ないが、ゴルギアスのテキストどうしでの比較に基づく結論は信頼できるものではない

Kerferdが比較対象としている『ないについて』においては、『ヘレネ賛』で言われていることと異なるようにもとれる理論が見られる場合があるため、Spatharasはおそらくそれを考慮したのだろう（このことに関しては本注釈第2章φήμηの項も参照）。

本論文では、写本伝承を重視する立場から、Kerferdと同じく、写本の読みを維持する。

ἐπεὶ τὰ νῦν γε οὔτε μνησθῆναι τὸ παροιχόμενον...εὐπόρως ἔχει 「過去のことを想起することも...容易ではないのだから」

この箇所について、MacDowell (1982, p. 38) は読み替えとしてἀλλὰ νῦν γεを提案した。彼は、この読み方以外にDobreeによるνῦν δὲという読み替えもひとつの可能性として提示している。先の

⁴² Untersteiner 1954, p. 116も合わせて参照。

μὲνに反応する逆説的な語が必要というMacDowellの主張は納得できるものであり、文脈にもなじんでいる。

写本上でτὰ νῦν γεの文字列を伝えていることは無視すべきではない。しかし、写本の伝える読みは意味の点で満足できるものでは決してない。先行研究において示されている読み替えのうちであれば、Dielsによるοἷς τὰ νῦν γεもしくはSauppeによるἐπεὶ τὰ νῦν γεは写本伝承を尊重しており好ましい。この2つを比較する場合、Sauppeの読み替えはDielsのものよりも明確である。よって本論文においてはSauppeに従う。

εύπόρως ἔχει「容易である」 この一文は、一部の校訂者によって誤った解釈をされているとMacDowell (1982, p. 38) は指摘する。この文章は、知識の獲得が不可能だということではなく、それは非常に困難ではあるが可能だという意味であると彼は記している。

事実、この文の前後において、ゴルギアスが「誰でも〜だ」というのではなく「多くの〜が...している」という言い方をしていることから、ごくごく少数ではあるがそういった能力を獲得する人はいるのだということを念頭においていると考えることは自然なことである。

περὶ τῶν πλείστων οἱ πλείστοι「きわめて多くの人がきわめて多くのことに関して」 ここでも、ゴルギアスは「だれでも」という言い方を避けている (Spatharas 2001, p. 170)。本章ὅσοι δὲ ὅσους... πλάσαντεςの注釈も同時に参照。

σύμβουλον「助言者」 ここではδόξα「判断」がほぼ擬人化された状態になっている (Spatharas 2001, p. 170)。

ἡ δὲ δόξα σφαλερὰ καὶ ἀβέβαιος οὕσα σφαλεραῖς καὶ ἀβεβαίοις ἀτυχίαις περιβάλλει τοὺς αὐτῇ χρωμένους 「だが、判断とは不安定かつ信頼できないもので、それを利用する人を不安定かつ信頼できない不運で包み込んでしまう」

σφαλερόςとἀβέβαιοςという形容詞の変化によってポリュプトン構造を示している。

ἀτυχίαιςについては、異読としてAm₂写本及び*Lexicon vindobonense*に伝わるεὐτυχίαις「幸運」があるが、これは主要写本のA写本及びX写本に伝わるἀτυχίαιςと正反対の意味を持つ語である。

Untersteiner (1961, p. 102 ただしSpatharas 2001, p. 170より引用) のように「推測はοὐ τυχεῖν (的を外すこと) をもたらし、その際 οὐ τυχεῖνが ἀφαερὸν καὶ ἀβέβαιον (信頼できなくて頼りないもの) を生み出す。言いかえれば、この2つの形容詞は結果を先取りするものを記述しているということだ」として主要写本の読みを支持する向きもあるが、ほとんどの校訂者がεὐτυχίαιςを支

持っている。その理由についてSpatharasは、ゴルギアスがここで行っている議論は、誤りによって生じた $\delta\acute{o}\xi\alpha$ を利用している人々は、頼りなく信頼性に欠ける成功を得るだろうというものだからと説明している。

$\delta\acute{o}\xi\alpha$ というものを利用してなされる決断は決して確実性や信頼性に優れたものではなく、それを信じて行動する結果不運に見まわれるという解釈をとれば、写本に伝わる読みは十分に納得のできるものである。また、文章構造としても $\sigma\phi\alpha\lambda\epsilon\rho\alpha\acute{\iota}\varsigma\ \kappa\alpha\acute{\iota}\ \acute{\alpha}\beta\epsilon\beta\alpha\acute{\iota}\omicron\iota\varsigma\ \acute{\alpha}\tau\upsilon\chi\acute{\iota}\alpha\iota\varsigma$ という並びは先頭の語と3番目の語が脚韻を踏みさらに2番目の語と3番目の語が頭韻を踏むという、より均整のとれた構造となる。よって、本論文では写本に従って読む。

第12章

この章においては、冒頭 $\tau\acute{\iota}\varsigma\ \omicron\upsilon\acute{\nu}\ \alpha\acute{\iota}\tau\acute{\iota}\alpha\ldots$ から中盤部 $\ldots\tau\acute{\eta}\nu\ \delta\grave{\epsilon}\ \delta\acute{\upsilon}\nu\alpha\mu\iota\nu\ \tau\acute{\eta}\nu\ \alpha\upsilon\tau\acute{\eta}\nu\ \acute{\epsilon}\chi\epsilon\iota$ の周辺まで、全体の約半分にもあたる箇所非常に激しい破損ないし伝承不全が認められる。A写本やX写本に匹敵するような新たな写本が見つかりでもしなければ、完全に原文を復旧することは不可能であると言わざるを得ないだろう。われわれにできることは、前後の文脈や写本に伝承されている文章とのあいだの兼ねあいを取りながら「このようにすれば読めるのではないだろうか」という提案をすることだけである。古くから多くの校訂者によって多くの読み替えが提案されているが、決定的に受け入れられているものは未だないように思われる。このように破損の激しい箇所においては、最終的にどう処理するかは校訂者個人の判断に直接突きつけられる問題であり、非常に難しいものである。とはいえ、問題の箇所を全くの空白状態で印刷することは望ましくないので、本論文ではDiels-Kranzのテキストに従って本文を印刷したが、これは仮の措置であると考えていただきたい。なお、これまで提示されてきた読み替え案についてはDiels-Kranzの異読一覧のほかDiès (1972, pp. 112-117) に多くが紹介されているため、そちらも参照。

$\kappa\alpha\acute{\iota}\ \tau\acute{\eta}\nu\ \acute{\epsilon}\lambda\acute{\epsilon}\nu\eta\nu\ \acute{\upsilon}\mu\nu\omicron\varsigma\ldots\tau\acute{\eta}\nu\ \delta\grave{\epsilon}\ \delta\acute{\upsilon}\nu\alpha\mu\iota\nu\ \tau\acute{\eta}\nu\ \alpha\upsilon\tau\acute{\eta}\nu\ \acute{\epsilon}\chi\epsilon\iota$ 「そして、ヘレネを讃歌が訪れて...同じ力を持つ」

この文章に全く手を加えずに読むのは困難だということは確かだ。しかし、本論文ではあくまで写本伝承を尊重する立場をとりながら、適切な処置を探してみたい。

$\acute{\upsilon}\mu\nu\omicron\varsigma\ \acute{\eta}\lambda\theta\epsilon\nu$ 「讃歌が訪れて」という一節は文脈から浮き上がっている。だが、Buchheim (1989, pp. 167-168. n. 28) は、 $\acute{\upsilon}\mu\nu\omicron\varsigma\ \acute{\eta}\lambda\theta\epsilon\nu$ という一節を残すべきであると主張する。彼は、 $\acute{\upsilon}\mu\nu\omicron\varsigma$ というものが決して宗教的儀礼に関する歌 (kultischen Festgesang) に限って残っているわけではないことがDK31B. 35 (エンペドクレスの項) から証明されており、エンペドクレスを通じて、同様の語がゴルギアスによって保たれうる理由を与えていることと、ゴルギアスの語法として $\acute{\upsilon}\mu\nu\omicron\varsigma\ \acute{\eta}\lambda\theta\epsilon\nu$ という構

造は変わったものではない（第16章 ὄψις ἐλθοῦσα 及び第9章 εἰσῆλθε φρίκη κτλ. と比較）ことを根拠としている。とはいえ、ῥυμος が呪文や詩のような λόγος の一形態であると考えるにしても、唐突という感は否めない。

やはりこの箇所をそのまま残すことは難しいと思われるので、例えば MacDowell (1982, p. 39) のごとく ὑπὸ λόγους ἐλθεῖν などと読み替える、もしくは Donadi (1982) のように短剣符で処理するなど、何らかの手を加える必要があるだろう。

それに続く ὁμοίως ἂν οὐ νέαν οὖσαν...βιατήριον βία ἠρπάσθη. の部分に関しては、A 及び X 写本に伝わる文字列を参考にして文章を組み立てようとする試みが多く見られる。ἄκουσαν (Blass) や ἂν οὐχ ἐκοῦσαν (Croise) 「ヘレネは意思に反して...」, λόγων ἐνθέων ἀκούουσιν (Paton) 「ヘレネは神がかった言論を聞いて...」などは魅力的な読み替えだ。

あるいは、A 写本の読みから οὐ を削除して「彼女が若かったとき同様に、あたかも...」と読めるようにすることもひとつの方法かもしれない。この場合の νέαν οὖσαν とは、テセウスによる誘拐のことを思い起こせばしっくり来るのではないか。

βιατήριον という語は βιατηρίου に読み替える。これはもちろんパリスのことを指している。

難読箇所の後半部、τὸ γὰρ τῆς πειθοῦς... 以下の箇所も解説は困難である。A 写本と X 写本の間でも数か所伝承が異なる部分があるため、難しい部分だろう。よってこの箇所についても先に取り上げた箇所と同じく、短剣符をつけるまたは、写本に伝わる形を考慮に入れつつある程度の修正を受け入れることが必須ではないかと思われる。ここでは数多い修復のうち、いくつかを例として挙げるにとどめる。

ὑπὸ γὰρ τῆς πειθοῦς ἐξηλάθη νοῦς· καίτοι πειθῶ ἀνάγκης εἶδος ἔχει μὲν οὐ, ... 「説得によって、理性は追い払われてしまう、さらに説得は強制の姿を持つてはいないが（その一方で同じ力を持っている）」という読み (MacDowell 1982, p.39) は、A 写本に伝わっている ὁ εἶδώς ἔχει μὲν οὖν という伝承をある程度生かす形で構成され、意味という点においてもよりよい読みを提供している。この伝承不全箇所に対する彼のアプローチは全体としても評価に値するのではないだろうか。

一方、X 写本の ὄνειδος ἔχει μὲν οὖν という読みをベースに構成されたと推測されるものとしては、τὸ γὰρ τῆς πειθοῦς ἔχει ὄνειδος· καίτοι ἡ ἀνάγκη ὄνειδος μὲν ἔχει οὐ, ... 「説得に対するとがめというものは存在する、だが必然性はとがめを持たない一方、同じ力を持っている」 (Diès, 1972, p. 114) という推測読みが魅力的である。とはいえ、ゴルギアスは ὄνειδος よりも詩的な語である μῶμος を『ヘレネ賛』において「非難」の意味で使用していることを考えると、A 写本の読みに従った MacDowell の読み替えがより好ましいのではないか。あるいは、X 写本の読みは A 写本の読みに関する注釈だったという可能性もあり得る。

λόγος γὰρ ψυχὴν ὁ πείσας, ἣν ἔπεισεν, ἡνάγκασε...συναινέσαι τοῖς ποιουμένοις 「つまり、魂を説得するものである言論が、魂を説き伏せて...為されたことに従うことを無理強いするのである」

πειθεῖνという語は、中動相πειθόμεναιの場合 "obey" "trust" "believe" という3通りの解釈ができる (Buxton 1981, p. 48)。Spatharas (2001, pp. 172-173) は、これらの語はすべて「他人の意思／意見への黙認という通告」を共有していて、そして「説得する」と翻訳される能動相πειίωは、作為的なものとして「(ある人を何らかの信念や意見について) 黙認させる」というように理解するのがよいと述べている。

συναινέσαι-λεγομένοις-πειθεσται-ποιουμένοιςという構造は、言論と行為という対立関係をはっきりと示している (Spatharas 2001, p. 173及びMacDowell 1982, p. 39)。

ὁ μὲν οὖν πείσας...μάτην ἀκούει κακῶς 「それゆえに、説き伏せた男こそ...誤って悪く言われているのである」

Spatharas (2001, p. 173) は、ここでの能動相は加害者パリスに関するものであり、受動相は被害者ヘレネに関するものとも考えることもできるし、この文脈では能動相は言論であり、受動相は魂であるという解釈も可能であることを指摘している。この方法は第7章において特に頻繁に使われていたものである。

ἀδικεῖ 「不正を行っている」 MacDowell (1982, p. 39) によれば、この動詞は一般に過去に犯された罪に関して現在形で使われて、既に有罪は確定していることを意味する。

μάτην 「誤って」 LSJ, μάτην, 3を参照。

第13章

第13章では自然哲学者、言論を通じた闘争、そして哲学的言論の競いあいという、3種類の議論を具体例として、説得の力を示そうという意図を持って議論が進んでいる。第2の例である「言論を通じた不可避免的な闘争」の解釈については、校訂者の間でも意見が割れており、判断が難しいところである。

ὅτι 「～という点に関して」 LSJ, ὅτι, A. IVを参照。

προσιούσα 「～に接近する」 LSJ, πρόσειμι, εἶμι=ibo, 1. 5を参照。

ἐτυπώσατο「刻印する」 この後、第15章にも再び登場している単語である。Spatharas (2001, p. 174) が指摘するように、ゴルギアスは『ヘレネ賛』の場合、「理論上の」一般化 ("theoretical" generalisation) を用いて議論する際に、格言的アオリストを使用することが多い。

χρὴ μαθεῖν「注目せねばならない」 *LSJ*, *μανθάνω*, IIIを参照。これの直接目的語にあたるのは、冒頭のὅτι以下ではなく後続の名詞節、すなわち「自然哲学者の理屈」「言論を通じた不可避的な闘争」「哲学的言論の競いあい」という3点である。

πρῶτον μὲν...「第1に」 後続のδεύτερον δὲ... τρίτον <δὲ>と呼応関係にある。最初の例への導入を示している。ゴルギアスは常に議論の構造を明示する目印を使うことを忘れない (Spatharas 2001, p. 174)。

μετεωρολόγων「自然哲学者」 astronomer「天文学者」という訳が示されている (*LSJ*, *μετεωρολόγος*の項を参照) が、*μετεωρολόγος*という人々が実際に扱っていた範囲というのは、現代でいう天文学よりも広範囲で、物理学、宇宙論、数学などを含んだ (Spatharas 2001, p. 174)。そういう点を踏まえれば「自然哲学者」という訳語がより適当ではないだろうか。

τοῖς τῆς δόξης ὄμμασιν「判断の目に」 MacDowell (1982, p. 39) は、この一節について「英語の "the mind's eye" と全く同意義ではない。ここでのδόξαは「想像」よりもむしろ「信念」に関わることだからだ (比喩についてはプラトン『国家』533d τὸ τῆς ψυχῆς ὄμμαも参照)。自然哲学者たちはそれぞれに別の理論を持っているが、普通一般の人間には、自分の経験をもとにして、誰が真実を語っているのか判別するなどできるわけもない。最終的には、自分にとってもっとも真実らしく感じられる考え方、納得できるような考え方を選ぶことになる」と述べている。

MacDowellは加えて、ゴルギアスがここで当時の自然科学の理論を批判的に見ているということではないとも注意している。確かに、ゴルギアスがここで言わんとしているのは、議論によって人が誘導されることは往々にしてありうるということであり、それ以上のことを含意しているわけではないと考えるべきだ。

φαίνεσθαι「見える」 Spatharas (2001, p. 176) は、ここでゴルギアスは、*φαίνεσθαι*という語が「星が現れる」(ホメロス『イリアス』1. 447, 2. 456, 『オデュッセイア』2. 1; ヘシオドス『労働と日々』598, 及び*LSJ*, *φαίνω*, Bも参照) という意味ももっていることから、不定詞のとりうる2つ

の意味を用いて言葉遊びをしていると推測したくなると指摘する。ここでは自然哲学者について語られていることでもあるし、そのような使い方もあり得るかもしれない。

τοὺς ἀναγκαίους 「不可避的な」 この箇所においては議論の動作主が見えてこないため、ἀναγκαίουςという語に関して2つの解釈が可能であるということを整理しておかなくてはならない（第10章 αἱ γὰρ ἔνθεοι διὰ λόγων ἐπὶ δαί と比較すること。また、Buchheim, p. 169. n. 29も参照）。では、2つのそれぞれについてSpatharas (2001, p. 176) を参考に見てゆこう。

まず、第1の解釈としては"under compulsion" 「強制されて、強いられて」という解釈である (Immisch, MacDowell 1982, pp. 39-40, Sykutris 1928, Gagarin 1994, p. 67. n. 26; Wardy 1996, pp. 162-163は、両方の意味を組み合わせた解釈が可能と考えている)。つまり、『パラメデスの弁明』におけるパラメデスのごとく、敗訴を避けるために説得力のあるスピーチをしなければならぬ状況におかれているというケースで、強制力とか必然性といったしがらみのない自然哲学者や哲学者の議論とは相反するものだ。この場合、話し手の側が敵対者や観衆の側から圧力を受けていると言える。この解釈に関しては、Dielsによってプラトン『テアイテトス』172e οὐκ ἐγχωρεῖ περὶ οὗ ἂν ἐπιθυμήσωσι τοὺς λόγους ποιεῖσθαι, ἀλλ' ἀνάγκην ἔχων ὁ ἀντίδικος ἐφέστηκεν 「彼らが熱望しているものがあっても、それについて議論をしている時間的余裕はありません、（時間に関して）敵対者がいて、内容に関して脱線しないように強制力を働かせるのです」の一節と比較されている。

第2の解釈としては"compelling", "persuasive" 「説得力のある」という解釈である。すなわち、話し手の説得力によって、聞き手がそれに従わざるを得ない状況をつくり出すというケースだ。この場合、先ほどとは反対に、聞き手が話し手からの圧力を受けることとなる。この考え方に関しては主に Melikoff-Tolstoj (1929) が引かれ、そこではプラトン『ソフィストたち』265d τῷ λόγῳ μετὰ πειθοῦς ἀναγκαίως ἐπεχειροῦμεν ποιεῖν ὁμολογεῖν 「強制的な説得を伴う言論によって、同意を得ようと私（たち）は試みるつもりだ」という一節が挙げられている。この見方は直前の第12章において説得と強制力が関連づけられていることから裏付けられるとSpatharasは述べている。

しかしながら、そもそもἀναγκαίουςという読み自体が破損しているという見方（Paduanoはこの語に短剣符をつけている）もあり、判断が困難な箇所のひとつであるといえる。ただし本論文では、この文章を読み替えなどの手を加えずに、写本に従って読むこと自体は可能であるという前提で処理している。

εἰς λόγος πολὺν ὄχλον ἔτερψε 「ひとつの言論が大勢の群衆を喜ばせ」 ひとつが多くを引きつけるという論理は第4章におけるヘレネの描写にも見られるものである。本注釈の第4章 ἐνὶ δὲ σώματι πολλὰ σώματα συνήγαγεν ἀνδρῶνの項も参照。

ἔτερψε καὶ ἔπεισε 「喜ばせ説き伏せる」 本注釈第5章 πίστιν...τέρψινの項を参照。

τέχνη γραφείς, οὐκ ἀληθεία λεχθείς 「真理によって語られるのでなく技巧によって書き記されて」

γραφείςという記述があることから、この時代には法廷弁論において書き物（原稿）が使用されていたことが見て取れる（Spatharas 2001, p. 177）。ゴルギアスの弟子といわれるアルキダマスは、書き物が即興弁論に比べて劣るものであるとの考え方を明白に示しているが、ゴルギアス自身がそのような考え方をもっていたかどうかは、少なくともこの箇所だけでは不明である。とはいえ、ゴルギアスがここで「技術をこらして書かれたもの」と「真実性によって語られるもの」を対比していることは興味深い。MacDowell (1982, p. 40) は、λεχθείςという語は意味の観点からは必ずしも必要ではなく、γραφείςとの音声上のバランスをとるために使われていると指摘したが、上のようなことも考えれば、修辭的な目的だけでおかれた語ではなく、意味的にも必要であったという考え方もできるだろう。

γνώμης τάχος 「思考の迅速さ」 Spatharas (2001, p. 178) は、γνώμηとδόξαは別のものであり、ヘラクレイトスがいうように「思考に関する器官」（Immisch 1927, p. 33ではcognoscendi instrumento. プラトン『法律』672bも参照）と解釈する⁴³。Spatharasによれば、γνώμηは視点の形成のプロセス及び視点そのものであると解釈することができる。

思考における柔軟性は、哲学者と自然哲学者、さらにより静的（static）な弁論作者を分けるものであり、このことは、ゴルギアスが哲学的な口頭での議論を心に留めていることをそれとなく示しているのだとSpatharasは述べている。

εὐμετάβολον 「可變的な」 Spatharas (2001, p. 178) の報告によれば、この単語は珍しいもので、一般的には人間の気質について用いられる語である。Spatharasによって例として挙げられているのはイソクラテスの15. 243, クセノフォン『ギリシア史』2. 3. 92など。また、プラトン『国

⁴³ "Gorgiae enim non ut Parmenidi γνώμη eadem est atque δόξα, sed ut Heraclito aliisque aut *mentem* significat aut *mentis consilium*. certe nondum de re intellegendum est, quae cognoscitur, sed de cognitione ipsa sive rectius de cognoscendi instrumento" 「ゴルギアスに関しては、パルメニデスのように γνώμηとδόξαが同じものではなく、ヘラクレイトスやほかの人々のように*mens*（知性）あるいは*mentis consilium*（知性の顧問）を意味する。もちろん、まだそれが認識されることがらに関してではなく、認識それ自体あるいは認識に関わる器官について認識されるべきである」（Immisch 1927, p. 33より一部省略の上引用）

家』503c9 οὐκοῦν τὰ βέβαια αὐτὰ ταῦτα ἦθη καὶ οὐκ εὐμετάβολα 「それでは、その習慣はしっかりとしたものであるうえに容易には変化しないものだ」との比較も指示している。

第14章

ここでゴルギアスは、薬が身体に及ぼす影響と、言論が人間の魂に与える影響は似たようなものであると語っている。ゴルギアスが医学に関してある程度の知識を持っているらしいことは、彼のバックグラウンドに関する伝承からも読み取ることができる。

文中に登場するφάρμακον「薬」という語があるが、魔術に使われる薬、媚薬を意味することもある(*LSJ*, φάρμακον, 3)。ヘレネと媚薬というと、『オデュッセイア』第4歌において、オデュッセウスの息子テレマコスがスパルタを尋ねた際、ヘレネとメネラオスが彼をもてなしたが、テレマコスの父のことが話題にあがったところで皆が泣き出してしまったので、ヘレネがワインに「あらゆる苦悩を忘れさせる」媚薬を投じた場面(219-232)が思い起こされる。

λόγος 「関係」 『ヘレネ賛』を読むにあたって、重要な語のひとつであるといえるλόγοςであるが、この単語の意味は多岐にわたり、正確な解釈がなかなか難しい場合もある。ここでは「関係」(relation)という日本語訳を付す(*LSJ*, λόγος, II. I)。

ἢ τε τοῦ λόγου δύναμις πρὸς τὴν τῆς ψυχῆς τάξιν ἢ τε τῶν φαρμάκων τάξεις πρὸς τὴν τῶν σωμάτων φύσιν 「魂の状態(あんばい)に対する言論の力と、身体の性質に対する薬の処方(あんばい)」

ἢ τε...ἢ τε...という形でつながっている2つの文章の構造が、属格(τοῦ λόγου/τῶν φαρμάκων) + 主格(δύναμις/τάξεις) + 前置詞(πρὸς) + 定冠詞(女性対格τὴν) + 属格(τῆς ψυχῆς/τῶν σωμάτων) + 対格(τάξιν/φύσιν)という構造でまとめられているうえ、音節数もほぼ同じという、均衡のとれた文章となっている。MacDowell (1982, p. 40) は、この一節においてゴルギアスは対照法(魂／言論に対する身体／薬)及びキアスムス(δύναμις...τάξιν...τάξεις...φύσιν)を用いていることと、イソクラテス8.39⁴⁴もこれと似た構造を取っていることに触れ、イソクラテスはおそらくゴルギアスをまねたのだろうと指摘している。

⁴⁴ τῶν μὲν περὶ τὸ σῶμα νοσημάτων πολλὰ θεραπείαι καὶ παντοδαπαὶ τοῖς ἰατροῖς εὐρηνται, ταῖς δὲ ψυχαῖς ταῖς ἀγνοούσαις καὶ γεμούσαις ποινηρῶν ἐπιθυμιῶν οὐδὲν ἔστιν ἄλλο φάρμακον πλὴν λόγος 「身体の病については多くの治療法が医師たちによって発見されているが、一方無知で悪しき欲望に満ちた魂にとっては、言論以外に薬はない」

この章では、薬が身体に及ぼす影響という点をふまえて議論が展開されていくため、ゴルギアスと医術との関連性（兄弟に医師がいたこと、エンペドクレスに師事したとされる説があること）を連想せざるを得ないが、魔術（主に第10章にて言及されている）の陰を取り去ることはできないと Spatharas (2001, pp. 178-179) は指摘している。彼はその理由として、まず第10章に見られる専門用語が、とりわけ言論を通じて人間の魂が経験する感情の記述において繰り返されることを挙げ、さらに、φάρμακονは曖昧な意味を持つ語であることもこれを証明するとしている。つまり、薬は使いようによっては毒にもなりうるものなのだ。言論の最も有害な機能とは「悪意のある説得」であり、この点ではλόγοςも同様に2つの機能を獲得するのだとSpatharasは説明している。

ἄλλα χυμούς 「あるひとつの体液」 A写本及びX写本ではἀλλαχοῦという語が伝わっているが、ここでは、写本に伝わる形を大きく損なうことなく、より意味の通った文章を提供することを可能とする点を考慮し、中世劣位写本によって伝わる読みを採用する。

古代ギリシアの医学では、血液、粘液、黒胆汁、黄胆汁の4つの体液が人間の体内には存在すると考えられていた。古代ギリシア医学を代表する書物のひとつである『ヒポクラテス集典』においても、これらの体液が人間の気質に影響を及ぼしたり、どの体液が多いかによってかかりやすい疾病が異なるなどの思想がみられ、古代ギリシア医学の基本的な考え方であるといえるだろう。

οὕτω καὶ τῶν λόγων 「同じように、言論のうちあるものは…」 λόγος 「言論」はφάρμακον「薬」である。言論は、人間の精神を益することもあれば害することもあるということをSpatharas (2001, p. 180) は説明している。

τινι 「ある種の」 Spatharas (2001, p. 181) は、ここで薬物の服用量 (dose) についての話をしているだろうという点で、このτινιは「量」を意味していることを仮定したくなると述べている。つまり、このτινιについて「いくらかの（量の）説得によって」という解釈がより適当であるのではないかと彼は考えているようだ。だが、ここでのτινιは「ある種の説得」またはさらに弱めて「ある説得」というように、不定冠詞に近い働きのものであるとして解釈しておくのが妥当ではないかと思う (LSJ, τὶςの項を合わせて参照)。

ἐφαρμάκευσαν καὶ ἐξεγοήτευσαν 「魂を薬漬けにして幻惑するものなのだ」 「ここでの鋭い比喩は、第14章での薬に関する記述のみならず、第10章における妖術についての記述を思い起こさせ、第8章から第14章までの議論を締めくくっている」 (MacDowell 1982, p. 40)。

第15章

この章からはついに、ヘレネ出奔の最後の可能性である「愛（視覚）」についての議論に入る。ゴルギアスは続く第16章から第18章にかけて、視覚が魂にもたらすネガティブな影響と、ポジティブな影響について具体例を交えながら述べ、第19章では、愛（エロス）の持つ神秘的な力という点から、ヘレネにこの罪を帰すことはできないという結論が導かれる。

καὶ ὅτι μέν...εἴρηται 「さて...以上で話し終えた」 *εἴρηται*は完了受動相。全体を構成するひとつの主要部分が終わったことを告げる定型的表現である。『パラメデスの弁明』第37章*εἴρηται τὰ παρ' ἐμοῦ, καὶ παύομαι* 「私の側からは話し終えた」では、弁論全体の終わりを示す役割で使われている。

τὴν δὲ τετάρτην αἰτίαν τῷ τετάρτῳ λόγῳ διέξειμι 「第4の原因を第4の議論によって詳しく語ろう」

第15章の冒頭部では、ヘレネがトロイアへ向かった第3の理由であるところのλόγοςに関する言及（ヘレネは無罪となるという結論）がまだ続いている。だがこの一文からは、4つめの理由として挙げられている愛（視覚）についての議論が開始される。

τέταρτος 「第4の」という形容詞がそれぞれ女性対格及び男性与格にかかる形で1回ずつ使用されるという構造になっている。論理的な面では*τετάρτην*と*τετάρτῳ*が冗長であることは間違いないが、*τὴν τετάρτην αἰτίαν*と*τῷ τετάρτῳ λόγῳ*という音の重なり及び対応関係を作り出すことがゴルギアスの目的であったことは明らかである。

これまでゴルギアスは「第～の理由」などと数を数えることをしてこなかったにも関わらず突然「第4の理由」と明白にすることは一見不可思議に思われる。これに関してPäll (2007, p. 208) は、これは第3の理由の展開（3種類の議論のリスト、これは第13章のことを指すと思われる）を継続しており、それゆえ計数の継続は第3の理由と第4の理由（これらは既に知覚に対する関心という点を共有している点で結びついているのだが）を緊密に結びつけることの助けとなっていると説明している。

ここで使われている*διέξειμι*は、もともと「行く（*εἶμι*）」から派生した語であるが、言論に関する比喩的表現「～という話題を詳論する」という意味でギリシア文学において多用された（LSJ, *διέξειμι*, IIを参照）。

εἰ γὰρ ἔρως 「もし愛が」 このγὰρは、「情報を与える」という意味を含む文（*λόγῳ διέξειμι*）に続く、情報の内容を導く文に置かれるγὰρである（Denniston 1970, p. 59）。

οὐ χαλεπῶς διαφεύξεται τὴν τῆς λεγομένης γεγονέναι ἁμαρτίας αἰτίαν 「彼女は行われたと言われている過ちの責任から難なく逃れるだろう」

Spatharas (2001, p. 182) は、以下のように主張する。「ここでのゴルギアスの言葉遣いは、慎重な弁護にあたる。ここでヘレネの名前は出ていない。また、論駁されようとしているのは非難そのものではなく、議論によって反駁されようとしているところの不適切さである。不適切なことは犯されておらず、それが犯されたと言われているだけなのである」すなわち、人々はヘレネが悪行をなしたとして非難するが、実際にはヘレネは逆らいようのない理由があつてそうせざるをえなかったのであり、自分に言わせれば人々が指摘するような罪はヘレネにはない、ということをゴルギアスはここで言わんとしているのだ。

構造の点では、循環的な語順 (circular words order) の典型的な例を示している箇所である。Päll (2007, p. 209) によれば：

- a. τὴν (女性対格/冠詞)
- b. τῆς λεγομένης (女性属格/冠詞と分詞補語)
- c. γεγονέναι (先行する分詞の補語となる不定詞)
- b. ἁμαρτίας (女性属格/名詞、b.τῆς λεγομένης と関連)
- a. αἰτίαν (女性対格/名詞、a. τὴν と関連)

という"abcba"の構造が確認できる。この構造を取ることで動詞が文章全体の中央に位置し、ヘレネに対する批判の妥当性への疑念に焦点が向かう効果があるとPällは説明しているが、必ずしも説得力のある見解とはいえない。

ἃ γὰρ ὁρῶμεν...ἔτυχε 「というのも、われわれの見ていることがらは...持つものだから」

議論は「視覚はその人の感覚を通じて知覚する人間のほうではなく、われわれが見ている対象物の本質に依存するものである」という原則を示すことから始まっている。古代ギリシアでは、視覚 (vision) は3つの種類に分類されていた。すなわち：

1. 目が行為者であり、対象物に向かって自身の「火」から光線を送る
2. 対象物から送られてくる「放出物」や「イメージ」を受動的に受け取る
3. 目と対象物が両方とも能動的である (Guthrie 1969, vol. ii, p. 234, ただしSpatharas 2001, p. 183より引用) という3つである。

Spatharasは、ここではゴルギアスは明らかに、目が受動的な機能を持つとすることによって議論を組み立てようとしていると指摘し、視覚の能動的な対象物であるパリスが、ヘレネの受動的かつ信

頼のいけない目によって知覚されたという結論に到達することを望んでいるのだと述べている (2001, p. 183)。

διὰ δὲ τῆς ὀψεως...τυποῦται 「視覚を通して...刻印を受ける」 **τυποῦται** という語 (第13章冒頭に既出) を用いることで、愛と視覚に関する議論と言論に関する議論の類似を証明している (Spatharas 2001, p. 183)。また、この比喩は第13章にみられるものと同じ種類である (MacDowell 1982, p. 41)。

第13章では説得を伴った言論が人間の精神を形作る例として3種類の議論が提示された。そして第15章においては、愛と視覚が人間の精神を思うままにするという前提のもと議論が進められている。

第16章

この章では、視覚が人間にもたらすネガティブな影響について、敵の隊列が向かってくる様を目にした兵士たちが恐れにかられ、名誉も法もかなぐり捨てて逃走するというケースを具体的に挙げて記述している。具体例を用いて語られるこの箇所は一見理解しやすいように感じられるが、写本伝承に関してだけではなく解釈に関してもいくつか議論があり、考察の余地があるように思われる。

αὐτίκα γὰρ...φεύγουσιν ἐκπλαγέντες 「たちまち...人々は放心状態で逃げ出すのだ」

Donadi (1977-1978, pp. 48-77) は、この箇所でゴルギアスは現実の戦場ではなく、前405年頃のアISKYLOS『テバイ攻めの7将』の再上演に関して言及していると主張し、よってその年代が『ヘレネ賛』の成立年代であると考えている。一方MacDowell (1982, p. 41) は、ゴルギアスのテキストでは演劇に関して記述している部分がなく、とりわけφεύγουσιν ἐκπλαγέντεςという一文は合唱隊にも聴衆にも適当でないと、悲劇との関連性については否定的な態度を取っている。

本論文筆者はMacDowellの意見に賛同する。『ヘレネ賛』や『パラメデスの弁明』は、神話に関連する人物を扱うという点で悲劇との共通点がある作品ではあることは間違いないが、この『ヘレネ賛』に関して言えば、「恐ろしい光景を見て恐怖に駆られる」という一般的な例として、戦場を挙げているという以上の意味を持つものではないだろう。

ἐπὶ πολέμῳ ὀπλίσαι 「敵に向かう準備を整えた」 この文章は写本自体の保存状態が悪く、したがって多くの読み替えが示されている。ここでの問題点は、A写本及びX写本において伝わっている ἐπὶ πολέμοις ὀπλίσαι や ἐπὶ πολέμῳ ὀπλίσαι という形を採用すると、ὀπλίσαι の機能がはっきりしないことである。X²として伝わる ὀπλίση という読み (ただし、Buchheim版ではこれはDiels-Kranzの読み

替えて、ὀπλίσηがX²と報告)を取る校訂者もいるが、それでもὅταν節全体の主語が不明瞭になるという問題点が残ることは指摘されている (MacDowell 1982, p. 41)。

本論文ではὀπλίσειを読み、これに合わせてπολεμία ὀπλίσειと読み替え (Sauppeに従う)、ὀπλίσειにχαλκοῦ及びσιδήρουがかかっていると解釈した。ὀπλίσειはπολέμιον κόσμονに対してinstrumentalとして組み合わさっている。

πολέμια...πολέμιον...πολεμία 「敵の (人間) ...敵の (装備を) ...敵に...」 ポリュプトトン構造が現れている一文である。πολέμιον...κόσμονというヒュペルバトンと組み合わさって、軍隊を逃走へと導く刺激の強烈さを強調するのだと Spatharas (2001, p. 184) は解説している。

χαλκοῦ καὶ σιδήλου, τοῦ μὲν ἀλεξητήριον τοῦ δὲ προβλήματα 「銅や鉄からなる (敵の装備) —あるものは攻撃用あるものは守備用である—」

MacDowell (1982, p. 41) は、第3章πατρός δὲ τοῦ μὲν γενομένου θεοῦ, τοῦ δὲ λεγόμενου θνητοῦ (ただしMacDowellのテキストは λεγομένου δὲ θνητοῦ), Τυνδάρεω καὶ Διός の箇所におけるキアスムスとこの箇所を比較している。ただし、第3章では説明的文章が先、個人名が後という形式だが、現在見ている箇所では、まず「銅や鉄」という金属の名前が先、続いて「あるものは攻撃のためのものだが、あるものは守るためのもの」という説明的な文章となっている。

しかし、ἀλεξητήριονを"defend, help"という意味から防御用の武具と解釈し、προβλήματαが"anything put before one as a defence, anything thrown forward" 「自分を守るために前に突き出すもの」すなわち剣や槍のような武具をさすという解釈も可能ではないかとも思える。とはいえ、アイスキュロス『テーバイ攻めの7将』539-540にもπροβλήματαを「防具」の意味で使用している例があること⁴⁵ (MacDowell 1982, p. 41)、古代ギリシアでは盾を銅で、剣や槍先を鉄で作ったという背景がある (プラトン『法律』956aと比較)⁴⁶ことを考慮すれば (Spatharas 2001, 184)、ἀλεξητήριονを武器、προβλήματαを防具と解釈するべきだろう。

θεάσεται ἢ ὄψις 「視覚がとらえると」 この箇所も、校訂者たちの議論を呼び起こしている問題のひとつである。写本に伝わる読みはεἰ θεάσεταιと報告されているが、これは問題があると MacDowell (1982, p. 41) は指摘する。その点、Sauppeによるθεάσεταιという読み替えであれば、これに呼応する冒頭のὅταν節との関係性は問題ないという評価を彼は下している (ただし MacDowell自身は、写本の読みにより近づけるためにἐπιθεάσεταιという読み替えを提案、印刷して

⁴⁵ ἐν χαλκῇ λάτῳ σάκει, κυκλωτῷ σώματος προβλήματι 「身体を丸く覆う青銅の盾」

⁴⁶ σίδηρος δὲ καὶ χαλκὸς πολέμων ὄργανα 「鉄や青銅から作られた戦争のための道具」

いる)。Spatharas (2001, p. 184) は、Sauppeの読みを採用し、これを一般的な時を表す節 (temporal clause) として処理する方法を提案している。本論文においてもSauppeによる読み替え案を受け入れることが最善と判断する。

φεύγουσιν ἐκπλαγέντες 「放心状態で逃げ出すのだ」 主語が欠けているが、MacDowell (1982, p. 41) やSpatharas (2001, p. 185) が解説するように、おそらく「人々」さらに具体的にいうなら「兵士」という解釈で正しいだろう。πολλάκιςの前でハプログラフィーが起こった結果πολλοὶが落ちたのではないかというMacDowellの考察はもっともらしい。

ἰσχυρά γὰρ ἡ ἀμέλεια...εἰσφκίσθη 「というのも、(法に対する) なおぎりは...強く入り込み」

この箇所について、写本に忠実に解釈する場合「というのも、法の真実性は、視覚から生ずる恐れによって強く入り込み」となるが、Spatharas (2001, p. 185) は、写本に従った読みには問題があるとして、MacDowellによる読み替え (1982, p. 41, 及び同著者 1961, p. 121) であるἀμέλειαを採用している。その他には、συνήθεια (Diels) や、ἐπιλήθεια (Immisch) などの読み替え案がある。

確かに、A写本やX写本が伝える読みは意味がつかみづらいだけではなく、ここまでゴルギアスが語ってきたこと、すなわち、敵の軍勢を前にした時の兵士の反応ということから少々遊離しているようにも思える。その点MacDowellが提案するἀμέλειαを当てはめて読む場合「法に対するなおぎりは、視覚から生ずる恐れによって強く入り込み」と解釈でき、文意に沿いつつ、写本が伝承する文字列からも外れすぎることはなく、非常に好ましいといえる。

Donadiが提案するἡ ἀλήθεια τοῦ πόνου... 「苦痛の真実性は、視覚から生ずる恐れによって....」も、写本伝承との兼ねあいを保ちつつ、より容易に理解できる読みを提供している点においては魅力的であるが、本論文ではMacDowellの読み替え案が最善と判断し彼に従う。

ἀμελῆσαι 「なおぎりにする」 この箇所においても、A写本及びX写本が伝える読みに問題があるという意見を持つ校訂者が多く存在している。なぜならἀσμενίσαιをそのまま読むと「喜びをもたらす」という意味になるからである。ここまでの文脈を見るに、写本に伝わる読みは不適格であるように思われるが、写本の読みを支持している校訂者がいないわけではない (例えば、UntersteinerやDonadiなど)。

Donadi (1977-1978, p. 58を参照) は、このἀμελῆσαιという読みは16世紀の校訂者Canterによるものと指摘した上で、自身は写本の読みを支持している。ゴルギアスはここで、恐れ of 感情に由来するκάθαρσις「浄化」を通して、悲劇の観客たちが経験する感情について言及しているからだというの

が彼の主張の根拠であるようだ。しかしながら、MacDowell (1982, p. 42) が反論しているように、ゴルギアスはアリストテレスではなく、ここで悲劇について言及しているわけでもない。

また、Donadiと同じく写本伝承を維持しているUntersteinerはこの動詞を「行動を放棄する」と解釈しようと試みた。すなわち、この動詞は絶対的に構成されており、後続の属格は仮定の意味を持った絶対的属格として解釈しうるとしたのである (Paduano 2007, p. 98. n. 59)。とはいえ、Untersteinerの解釈はきわめて強引なものである (特に動詞の解釈については)。よって、写本に従ってἀσμενίσαιを維持することはここでは困難であると思われる。

一方MacDowellやSpatharas (2001, pp. 185-186) は、Canterに由来する読み替えἀμελῆσαιを支持している。確かにこの読みは、写本に伝わるものに比べれば議論の流れに合っている。また、この動詞は属格を支配するケースが認められているため (LSJ, ἀμέλεωの項を参照)、後続の属格を無理なく説明できることも強みであるといえよう。よって本論文では、Canterの読み替え案に従って印刷する。

καὶ τοῦ ἀγαθοῦ τοῦ διὰ τὴν δίκην γινομένου 「正義によって生ずる善いことも」

Spatharas (2001, p. 186) は、対称的な構造に注目して議論している。動詞に後続する部分が「目的語 (属格) + 前置詞句 (διὰ + 対格) + 分詞 (属格)」という構造になっている点が2つの句に共通である。さらに:

1. ホモエオテレウトンとは別に、イソコロンやヒュペルバトンが両方の場合において痕跡を残している
2. それぞれの統語論的概念は両方の句に関して同量の音節を含んでいる
3. 強調されている音節の対応関係 (correspondence) についても注意に値することをSpatharasは続けて指摘する。

この音遊びは、われわれの注意を逃れることはほとんどないのだが、個人及び公共という2つのレベルが認められるとSpatharasは続ける。καλόνとは、伝統的に、都市国家的な支配制度によってあらかじめ規定されている限りでの、都市の権益を守るといふ兵士の責任に関連する。一方のἀγαθόνとは、兵士ひとりひとりの個人的な報酬のことをさすと彼は説明している (MacDowell 1982, p. 42 κρινομένουの項も参照)。

第17章

この章でゴルギアスは、視覚能力を通じて恐ろしいものを見ることによって生ずる恐れは、人間から認知能力を奪い、それによって苦痛や病、さらには狂気が生ずると語っている。これは現代人にも多いストレスによる心的外傷を思い起こさせる。

ギリシア神話などでは、神が狂気を送り込むという事例が多く認められ（ヘラとヘラクレスの事例などが非常に有名なところである）、『ヒッポクラテス集典』に所収の『神聖病（この病については、現代医学でいうところの癲癇のこととする説がある）について』においても、病と神との関連性について述べられているが、ゴルギアスは少なくとも、恐れに由来する狂気に関して、それは神的なものではなく人間に起因するものであると認めていると推測できる。

ἤδη δέ「これまでには」 "in the past" (Spatharas 2001, p. 186)。

納富（2006）の訳では「そして、人々は恐ろしいものを見てしまうと、現時点で現にある心を追い出して…」とある。第16章のいくつかの箇所について、本論文では彼（納富は、基本的にBuchheim版によっている）と異なった解釈を取っているため、そのことはもちろん考慮せねばならない。

本論文では、ゴルギアスは第16章末にて法や名誉もかなぐり捨てて敗走する兵士について語っていると解釈している。その流れを考慮して「これまでには、恐ろしいものを目にしたその瞬間に現在の心を失っている人々もいた」と訳す。

καὶ τοῦ παρόντος ἐν τῷ παρόντι χρόνῳ φρονήματος 「その瞬間に現在の心を」

τοῦ παρόντοςはφρονήματοςと関連しており「現在の心」を意味している。τῷ παρόντι χρόνῳは「その瞬間に」と解する。ヒュペルバトン構造が現れていることに注意（τοῦ παρόντος...φρονήματος）。

Buchheim (1989, p. 172. n. 36) は、ゴルギアスは『ないについて』（MXG, 6 [17] を参照。なおDiels-Kranz版ではセクストス・エンペイリコス版のみが収録されているが、Buchheim版はMXGも収録している）において、φρονεῖσθαιという語を同様の機能で使用しており、この類似関係に基づいて、ゴルギアスの語彙使用（originaler Wortlaut）とみなすべきであると述べている⁴⁷。

πολλοὶ δὲ ματαίοις πόνοις καὶ δειναῖς νόσοις καὶ δυσιάτοις μανίαις περιέπεσον 「そして、多くの人々が、意味のない苦痛や重篤な病、救いがたい狂気に陥る」

これはA写本に伝わる読みで、X写本ではματαίαις νόσοις καὶ δεινοῖς πόνοιςという読みが伝わっており、校訂者によって見解の分かれる部分である。なお、第6章冒頭においても、主要写本間で語の

⁴⁷ καὶ τὸ μὴ ὄν, εἴπερ μὴ ἔστι, μὴδὲ φρονεῖσθαι 「そして、ないものが、もし本当にないのであれば、知覚されるということもありえないのだ」

配列等に異同が見られるケースがある（本注釈第6章 Τύχης βουλήμασι καὶ θεῶν βουλεύμασι καὶ Ἀνάγκης ψηφίσμασινを参照）。

Spatharas (2001, p. 187) が指摘するように、純粹に意味という点ではA写本の読みがよりわかりやすいように思われる。δεινοῖς πόνοις 「強烈な苦痛」はともかくとしても、ματαίαις νόσοιςとなると「無駄な、意味のない病」となり、今ひとつ理解しづらいように感じられる。

Spatharasは続けて、この一節が、狂気について「当てもない (aimless) 行動を遂行すること」と定義されている点において『パラメデスの弁明』第25章の言葉遣いと類似していることを指摘している (DK68C. 3, デモクリトス21. 69と比較。またSegal, 1962, p. 118を参照)。

X写本の読みを選択しているImmischやUntersteinerに関してPaduano (2007, p. 99. n. 60) は、ματαίουςという語を恋愛、性的なことに関わる範囲内においてのネガティブな振る舞いについてのほめかしとして読んでいると指摘している。

δυσιάτοις μανίαις 「救いがたい狂気」 ゴルギアスが、ある種の狂気について「不治のもの」としてではなく、「救いがたいもの」とみなしていることは興味深い (Spatharas 2001, p. 187)。ゴルギアスの兄弟が医師であったことは、プラトン『ゴルギアス』456Bの記述からもわかるが、ゴルギアスはその兄弟や仲間の医師たちに同行したことがあるというから、もしかすると、狂気の患者に対する治療を見たことがあったのかもしれない。

また、フィロストラトスの伝によれば、ソフィストのひとりアンティフォンは「人が話してくる苦しみで、精神から取り除いてやれないほど恐ろしいものなど何もないとのふれこみで、悲嘆をなくすという講座を開いた」 (DK87A. 6) という。このことから見ても、ゴルギアスが生きた時代にはすでに精神に対するケアが行われていたと考えられる。

τὰ μὲν δεινατοῦντα... 「人を怖がらせることども」 μὲν... δέ...という呼応関係はギリシア語でよく見られる構造のひとつであるが、MacDowell (1982, p. 42) はこの箇所について「後続の文章に現れるδέではなく、18章の冒頭に現れるἀλλὰ μὲνによってバランスが保たれる」と指摘している。

παραλείπεται, παραλειπόμενα 「語り残された (ことども)」 *LSJ*, παραλείπω, III. 2及び3を参照。ゴルギアスはいくつかの「視覚がもたらす恐れ」について具体的な例を挙げてきたが、当然すべてを語っているわけではない。しかし「語り残されていることども」も、これまでに挙げてきた「恐ろしいものども」と同じようであるという事実を表明することで、ゴルギアスは「恐れ」に関する話題を終わらせて、次のテーマに移ろうとしている。

第18章

この章では、視覚によって喚起されるポジティブな影響について、芸術家の創作活動とそれによって生み出される芸術作品になぞらえながら語られる。先にゴルギアスが取り扱っていた、視覚によって呼び起こされる恐怖、敗走、狂気などのネガティブな感情とは全く正反対である。また、ゴルギアスの師であるともいわれるエンペドクレスとの関連が指摘される部分が存在するという点においても興味深い一節といえる。

ἀλλὰ μὲν「しかしながら」 先の章では、戦場などの恐ろしい状況が、人間に対していかなる影響（主にネガティブな影響）を与えうるかというテーマについて語られてきたが、この章においては、絵画や彫刻という新しい例を用いて、主にポジティブな影響についての説明がなされる。そのため、新しい例への導入として文頭にこの複合小辞が使用されている。逆説的接続詞としての**ἀλλὰ μὲν**に関してはDenniston (1970, p. 341)を参照。

ἐκ πολλῶν χρωμάτων καὶ σωμάτων ἐν σῶμα καὶ σχῆμα「多くの色と物体からひとつの物体と形を」

前半部のπολλῶν χρωμάτων, σωμάτων及びその直後に後続するσῶμα, σχῆμαという脚韻だけではなく、中盤におけるσωμάτων, σῶμαという連続にも注目すべきである。

この箇所では、たくさんの色彩や物体がひとつの物体、形状をつくり出すと述べられている。1と多数の対立という点では第4章 ἐνὶ δὲ σώματι πολλὰ σώματα συνήγαγεν ἀνδρῶν「（ヘレネの）ひとりの身体に、多くの肉体（ヘレネへの求婚者たち）を集めたのだった」という一文と共通している。

数種の色彩や形によって絵画が創作されるということについて、ゴルギアスは画家ゼウクシスのことを心に留めていたのかもしれないという指摘がある。キケロやプリニウスなどの伝によると、このゼウクシスは、クロトンにあるヘラ神殿のためにヘレネの絵画を制作したが、その際にはクロトンにいた美しい娘たちの身体の部分のうちでもっとも美しい部分をそれぞれ選んで、ヘレネのモデルとしたそうである。これが事実かどうかはさておき、『ヘレネ賛』の主題となった女性の絵画を制作した人物を本当にゴルギアスがここで想起していたなら、なんとも興味深い（Spatharas 2001, p. 189）。

なお、先に挙げた第4章の一節は、エンペドクレスの思想との共通点を指摘される箇所であるが、そのエンペドクレスが、絵画の比喩を用いて多くの事物の生産を描写している箇所（DK31B. 23）は、ゴルギアスの言葉遣いとの類似が指摘されている（Spatharas 2001, p. 189及びBuchheim 1989, pp. 172-173. n. 37を参照）。

ἡ δὲ τῶν ἀνδριάντων ποίησις καὶ ἡ τῶν ἀγαλμάτων ἐργασία 「彫像の制作や、神像の創作」

人間（普通一般の人間ではなく、英雄のことを指す）の彫像を意味する ἀνδριάντων と神々の彫像を意味する ἀγαλμάτων（原義は栄光、名誉などだが神の贈り物、神を称えるための像という意味もある）という言葉遣いと、平行構造を通して、人間と神という対立する2つの要素が並列されていることに留意すべきである（LSJ, ἄγαλμα, 2及び3の項も参照）。

<ν>όσον 「病」 この箇所に関して、写本ではόσον という読みが伝わっているが、これはギリシア語として意味をなさず、不適當である。そのため、θέαν (Keil) <ν>όσον (Dobree) という読み替えが提案されている。特に、Dobreeによる読み替えは、νの脱落という伝承過程において十分起こりうる事態を想定しており、意味という点においても、より理解しやすい読みを提供しているように思われる。

τὰ μὲν λυπεῖν τὰ δὲ ποθεῖν πέφυκε τὴν ὄψιν 「あるものは視覚を悲しませ、またあるものは強い欲望を引き起こす」

写本上ではποθεῖν という読みが伝えられているが、τέρπειν (MacDowell) κηλεῖν (Diels) ποθεῖν <ποιεῖν> (Blass) などの読み替え、さらに大きな変更としてはτὰ μὲν λύπην τὰ δὲ πόθον πέφυκε <φύειν> ὄψις (Immisch) など、様々な校訂者たちによって議論されてきた箇所のひとつである。MacDowell (1982, p. 42) が主張するように、続く行のπόθονという語から行間錯誤が疑われること、τὰ μὲν...τὰ δὲ...という構造から見るに、この箇所ではλυπεῖνの反義語が必要となることも一理ある。

もうひとつの視点としては、λυπεῖνとποθεῖνという不定詞と関連して、τὴν ὄψινという語がここできかなる機能を果たすかということに注目したい。前者に対してτὴν ὄψινは「目に対して嘆き悲しみを引き起こす」となるから、目的語として機能しているが、後者では「目を強い欲望の思いに向かわせる」という解釈で、主語として機能することになる。こういったことは、ギリシア語の文法と照らし合わせる上で問題となりうる（これについての議論は、Donadi 1982, n. 13及びPaduano 2007, p. 99, n. 65を参照）。これらの意見を考慮すれば、これは写本伝承の過程において中世写本の読みが破損してしまった事例のうちの1カ所であるという可能性を全く否定することはできないだろう。しかし本注釈においては、A写本やX写本に従って読む場合どうなるかという視点から、あえて写本伝承に極力忠実な許容範囲内の本文をたてるという方針に従って、写本の読みを維持している。

なお、この箇所について納富（2006）は「このように、あるものは本性から視覚を苦しめ、別のものはそれを欲求させる」という訳を提示しているが、「本性から」（πέφυκεを意識した結果だろうか）は余剰だろう。

πολλὰ δὲ πολλοῖς πολλῶν ἔρωτα καὶ πόθον ἐνεργάζεται 「多くのことどもは、多くの人々に、多くの愛と欲望を生じさせる」 非常にわかりやすいポリュプトンが認められる箇所である。

第19章

アレクサンドロス（パリス）とヘレネという「男性／女性」という構図は「強者／弱者」という構図に対応する。強いものが弱いものを常に支配するという考え方は、既に第6章においてゴルギアスの口から語られているが、この章の中盤でも再び述べられている。

「愛」という原因は、ヘレネ自身に起因するもので、彼女の責任を回避する理由にはならないとわれわれは思うかもしれない。けれども、愛は魂の内にありながら、神や言論と同じく人間を支配する抗いがたい力なのだ。言論が聴衆の魂を操るとしたら、通常その結果の責任は言論の語り手にあると考えられるだろうが、その操られる魂の中に原因があるなら、言論の語り手には責任がない。ゴルギアスは『ヘレネ賛』の議論を通じて、弁論術への非難を回避しているのだ（納富 2006, pp. 164-165）。

εἰ οὖν 「であるから」 個別のケースへの移行を示す（Spatharas 2001, p. 191）。

ゴルギアスは、第15章中程から第18章にかけて、ヘレネがトロイアへ向かった第4の理由である愛について、それに関連して視覚と感情についての議論を続けてきたが、そこでは戦場や絵描きなど一般的な例を挙げていた。しかし第19章では、ヘレネとアレクサンドロスという、特定かつ個別のケースが対象となっている。

τῷ τοῦ Ἀλεξάνδρου σώματι τὸ τῆς Ἑλένης ὄμμα ἥσθεν 「アレクサンドロスの身体によってヘレネの目が喜び」 アレクサンドロスとヘレネという2つの対立要素の記述に関して、属格（τοῦ Ἀλεξάνδρου及びτῆς Ἑλένης）がそれぞれτῷ σώματιとτὸ ὄμμαの冠詞と名詞の間に挟み込まれる構造をとっている。このように配列することで、属格がどの名詞と関連するのかが明白となっている。

A写本に伝わる異読 τὸ τῆς Ἑλένης σῶμαはおそらく（τῷ）σώματιに影響されたものだろう。しかしSpatharas（2001, p. 191）も指摘するように、ここでは第15章から引き続き視覚についての議論がなされており、よってここでは目が強調されるため、X写本の伝える読みが適当である。この読み

を取るにより「（パリスの）身体」と「（ヘレネの）目」という2つの要素間での対立関係が成立する。身体とはすなわちパリスそのものと言い換えることもできるだろうが、その一方で目とはあくまでヘレネの身体の一部に過ぎず、しかも信頼ならない、見かけの美しさにたやすく欺かれて魂に影響を及ぼすものである。言い換えれば、目とは弱者の立場にあるものといえる。

以上のことから、「身体」と「目（その背後にあるのは魂といってもよいだろう）」という対立構造は明白となり、ゴルギアスが訴えてきた「強者／弱者」の理論によって、ヘレネの無罪が導かれる。

προθυμίαν καὶ ἄμιλλαν ἔρωτος「愛への熱意と闘争心」 **ἄμιλλα**「競いあい」という単語を、精神的な傾向に関して使用することは一般的ではなく、ソフォクレス『エレクトラ』494 **γάμων ἀμιλλήμαθ'**「結婚への熱望」以外には、類似する例が見当たらないようだ（MacDowell（1982, p. 42）は述べている。

τί θαυμαστόν;「驚くことがあるだろうか」 修辞疑問文の形式をとっているが、冒頭 **εἰ οὐν...παρέδωκε** という条件節に対応する帰結節である。Spatharas（2001, p. 191）は、もしもこの修辞疑問文が冒頭部分に位置していたら不条理だと指摘している。

ὅς εἰ μὲν θεὸς θεῶν θείαν δύναμιν <ἔχων>「もしも、愛というものが神であり、神々の神的な力を持つのなら」

ὅςの指示するものはὁ ἔρως「愛」である。この箇所には、何らかの形で動詞を補う必要があるだろう。

θεός <ὼν ἔχει>（Blass）, θεός, ἔχων θείαν δύναμιν（MacDowell 1982, p. 42及び同著者 1961, pp. 121-122も参照）など、いくつかの読み替えが提示されているが、これらの読み替えを採用すればθεός θεῶν θείανというポリュプトンの構造を破壊してしまうことも考慮に入れておかななくてはならないというSpatharas（2001, p. 192）の指摘は無視できない。

その観点から見るとδύναμιν <ἔχει>（Donadi）やδύναμιν <ἔχων>（Buchheim）の読み替えのうちどちらかを受け入れる方法がより魅力的に思われる。ἔχειを挿入した場合θεῶνの行場がなくなるということを考慮し、本論文ではBuchheimに従いἔχωνを挿入して読む。

εἰ δ' ἐστὶν ἀνθρώπινον νόσημα καὶ ψυχῆς ἀγνόημα, οὐχ ὥς ἀμάρτημα μεμπτέον ἀλλ' ὥς ἀτύχημα νομιστέον「もしそれが人間の病と魂の不注意であるなら、過ちとして非難されるべきではなく、不運として考えられるべきだ」

この箇所はνόσημα以降、すべてホモエオテレウトンとイソコロンで表現されている (Spatharas 2001, p. 192)。οὐκ ὥς...ἀλλ' ὥς...という対称構造にも注目すること。

ἦλθε γάρ, ὥς ἦλθε 「というのもヘレネは、彼女がやってきた時」 これはἜρωτοςに関する一般的な叙述を表現するもので、ヘレネについてではないとSpatharasは述べている (2001, p. 192)。つまり「愛が」やってくるのである。しかし、納富 (2006) では「彼女が{トロイアに}赴いたのは...」と、ヘレネを主語として解釈している。

この文構造ではどちらの解釈も可能であり、判断は翻訳者にゆだねられる。ゴルギアスは『ヘレネ賛』において、第1章のκόσμοςや第5章のεἰκόςのように、単語であれ文章であれ、あえて複数の解釈を可能にする言い回しをしている場合があるからだ。

本論文では、後続の文章のἔρωτος ἀνάγκαις, οὐ τέχνης παρασκευαῖς 「技術の仕掛けによってではなく愛の強制力によって (やってくる)」 という一文があることと、前後の文脈を総合して判断し、やってくるのはヘレネだと解釈した。

ψυχῆς ἀγρεύμασιν, οὐ γνώμης βουλευμάσιν, καὶ ἔρωτος ἀνάγκαις, οὐ τέχνης παρασκευαῖς 「理性の意図によってではなく魂に対する罠によって、また技術の仕掛けによってではなく愛の強制力によって」

属格+与格の構造を繰り返し用いている。καὶ ἔρωτος以前においては-ηςと-μασινが、後続部分では-sと-αιςが脚韻を踏んでおり、さらにκαὶを中心点としてA οὐ B καὶ C οὐ D という構造をなしている。

ψυχῆς ἀγρεύμασιν 「魂に対する罠」 ここでのψυχῆςは2通りの捉え方が可能である。つまり：

1. 目的語的な属格 (MacDowell 1982, p. 43, 同様の用法としては、アイスキュロス『コエーポロイ』998にみられるἄγρευμα θηρός 「動物に対する罠」 が示されている)
2. 主語的属格「魂 (それ自身) の罠」と考えるかである (Buchheim 1989, p. 173. n. 41)。ここでは「愛が魂を追い立ててとらえる」と解釈し、目的語的属格ととる方がふさわしいと考える (第19章 Ἑλένης ὄμμα ἦσθ' ἐν προθυμίᾳ καὶ ἄμιλλαν ἔρωτος τῇ ψυχῇ παρέδωκε と比較)。

ψυχῆςをτύχηςに読み替えるというReiskeの案にもかなりの説得力があるように感じられるが、この節において第6章の言い回しがいたるところでみられるというほかには写本の読みを覆す理由がないというSpatharas (2001, p. 192) の考えは的を射ているように思われる。

γνώμης βουλευμασιν 「理性の意図」 「ここでのγνώμηは事実上ψυχήと同じものを意味しているが、ここでの属格は主語的用法をとっている。γνώμηςは直前のψυχῆςと音的な対応関係にあるが、統語論上の機能は異なっている」とMacDowell (1982, p. 43) は指摘する。

第20章

ここでは再び、ヘレネがトロイアへ向かった理由（ただし、言及される順序が第6章とは逆になっていることに注意しなくてはならない）と、ヘレネの無実に対するゴルギアスの主張が展開される。これらは既に主張されてきたことではあるが、これまでの議論をここで整理し『ヘレネ賛』という弁論作品のクライマックスへ向けて、ゴルギアスは進んでいこうとしている。

πὼς οὖν χρή δίκαιον ἡγήσασθαι τὸν τῆς Ἑλένης μῶμον 「ヘレネに対する非難を正当だとみなすことがどうして必要だろうか」

疑問を呈するようなスタイル（冒頭のπὼς οὖνという語からも明らかである）で語ってはいるが、ゴルギアスがヘレネの無罪を前提としているということは、ここまでの『ヘレネ賛』の流れからしても明白であり、答えは必然的に「ノー」である。

ἡγέομαι 「～を...とみなす」についてはLSJ, ἡγέομαι, IIIを参照。なお、ここでのδίκαιονは、μῶμονにかかる述語 (predicate) であり、LSJ上述箇所における"with an attributive word added"という説明は誤解を招く恐れがある。そこで例示されているほとんどの該当語句は述語として理解するのが正しい。

ἥτις εἶτ' ἐρασθεῖσα...ἀναγκασθεῖσα ἔπραξεν ἃ ἔπραξε 「愛されてその為したことをしたのであれ...強いられてその為したことをしたのであれ」

第6章で既に語られ、そこから第19章まで順番に議論されてきたヘレネのトロイア行の理由がここで再び語られているが、全く逆の順番になっていることに注目しなくてはならない。

εἶτ' <ὄψει> ἐρασθεῖσα 「視覚によって愛するようにさせられたとしても」 (Immisch) という読み替えは、先の15章から19章にかけて、愛と視覚に関する問題をゴルギアスが取り扱っていることをふまえた上でのものである。MacDowell (1982, p. 43) はこの挿入について、後に続くεἶτε λόγῳ πεισθεῖσαなど、行為者の与格+アオリスト受動分詞という構造との対応関係を考えれば必要であると評したが、この挿入がなくとも文意をくむことは十分に可能であるし（この場合、行為者は第3者ではなくヘレネ自身と理解できる。Päll 2007, p. 225を参照）、最後のεἶτε ὑπὸ θείας ἀνάγκης ἀναγκασθεῖσαにおいても与格ではなく前置詞を使った形で行為者が示されていることも無視しては

ならない。ゴルギアスの文章は非常に技巧的で、語、節、文などの各単位ごとにバランスやリズムを重視しているのは確かだが、それゆえに校訂者による過剰な推測がなされる可能性を常に考慮、警戒しなくてはならない。

ἔπραξεν ἃ ἔπραξε 「その為したことをした」 第6章にもこれとほぼ同じ一文が表れている。

πάντως 「全く」 MacDowell (1982, p. 43) は"completely" 「全く」 という意味ではなく "in all four cases" 「4つの場合すべてにおいて」と解しているが、そうすべき必然性はない。

第21章

ゴルギアスによるヘレネ弁護は、ついにクライマックスを迎える。ここでは冒頭から **ἀφείλον** 「私は取り去った」という一人称で語られ、『ヘレネ賛』という作品を締めくくる。

この弁論についてゴルギアスは最後に **παίγνιον** という語で表現している。*LSJ*には、まさにこの箇所を示して "trifle" 「つまらないこと（この英単語には文学、芸術などに関して「小品」「軽い詩作」などの意味もあるが、ここでは適当でないだろう）」という訳語が示されているが、この単語の解釈に関しては議論がある。

ἀφείλον 「私は取り去った」 **ἐνέμεινα, ἐπειράθην, ἐβουλήθην** と、ゴルギアスが行った事柄を表わす動詞が節の始めに位置することによって、自己言及的な結論であることが強調されていることを Spatharas (2001, p. 193) は指摘する。

ἐνέμεινα τῷ νόμῳ ὃν ἐθέμην ἐν ἀρχῇ τοῦ λόγου 「弁論の始めに示した決まりごとに忠実であった」

ここで言われている「決まりごと（**τῷ νόμῳ**）」とは、弁論の冒頭第2章で述べられた事柄、すなわち正しく語りヘレネへの非難に反論するべきだ、というゴルギアスの主張である。その考えを貫いてここまでの弁論を進めてきたことを、今一度ここで明白にしようとしている (Spatharas 2001, p. 193)。

τῷ νόμῳ ὃν...τοῦ λόγου について、MacDowell (1982, p. 43) は、写本の読みは不十分なものだとして **τῇ γνώμῃ ἣν** という読み替えを提案しているが、Spatharas (2001, p. 193) は、X写本の読みでも意味をなしていると反論している。

ἐπειράθην καταλῦσαι μῶμον ἀδικίαν καὶ δόξης ἀμαθίαν 「私は非難の不当性と判断の無知を解消しようとしてきたのだ」

この文章はアシュンデトンであることに注意。τῷ νόμῳ ὃν ἐθέμην の実際の内容を記述する「説明的なアシュンデトン」の関係がここでは見られる。

παίγνιον 「遊び」 この語を文字通り「遊び」という意味でとつてもよいかに関して議論が存在することは既に述べた。この『ヘレネ賛』という弁論が、いたるところに修辞技法を盛り込んだ壮麗な文章と、悪女ヘレネの無罪を証明するというきわめて困難なテーマを通じてなされた遊戯であったとゴルギアス自身が告白しているというだけではないと考えたくなるのは最もなことである。つまり、この単語の解釈次第で、『ヘレネ賛』という作品の重みが変わってしまう可能性があるのだ。

このπαίγνιονという修辞に一言付け加えるとすれば、次のようなことがある。プラトン『パイドロス』冒頭におけるソクラテスとパイドロスのやり取りの中に、法廷弁論作者として著名なリュシアスの演示演説弁論の原稿を隠し持ったパイドロスをめぐる一幕がある。そういったことも考えてみると、修辞をこらした演説を作り、演じるということがπαίγνιον的な興味をかき立て、古典期以降のギリシア知性のエネルギーとなったことは否定できないだろう。『ヘレネ賛』最後の一文は、そういった点をついているとも言える。

おわりに

以上、ゴルギアスの『ヘレネ賛』について、主にMacDowell, Donadi, Spatharasなどの校訂本を参考としながら議論してきた。

本論文においては、前半部においてゴルギアスの伝記や写本研究の歴史に関しても扱っているが、本論文のメインとなるのは第2章のギリシア語本文及び日本語訳と、第3章の本文注釈である。本論文以前にゴルギアスの著作を扱った日本語文献として、本論文においても主要な参考文献となっている『ソクラテス以前哲学者断片集』および納富信留『ソフィストとは誰か?』がすでに世に出ているが、本論文はこれらとは異なり、ギリシア語本文と日本語訳の両方を兼ね備えており、ギリシア語本文に関しては、ある単一の校訂本に追従するのではなく複数の校訂本を比較参照して筆者が独自に編集したものを利用し、日本語訳もそれに従っている。加えて詳細な注釈を付している。これらの点は、先行の日本語文献と本論文の違いといえる。

本論文においては、本文の確立に関わる論点を中心として記載し、可能な限り写本（A写本及びX写本）伝承を優先するという方針を取った。よって、いくつかの箇所において、多くの校訂本が何らかの読み替えを提案もしくは採用しているのに対し、あえて写本の読みを保持した。さらに、ゴルギアスが多用する修辞技法に関しても注目し、必要に応じて解説を加えている点も、本論文の特徴のひとつである。

以上に述べたように、本論文は注釈部に重きをおいた論文である。しかしながら、本論文においても、これまで世に出された多くの校訂本においても、解決しきれていない問題は存在する。例えば、第12章の難読箇所については、決定的な修正案はいまだ出しておらず、本論文においても何らかの具体的な解決策を提示するにはいたらなかった。この箇所以外にも『ヘレネ賛』においては、第8章から第16章の範囲を中心に難読箇所や解釈の難しい部分が点在しており、それらについては、今後の課題として、さらなる議論が必要とされるであろう。

参考文献一覧

1. 『ヘレネ賛』主要校訂本及び参考文献（欧文）

Baiter, J. G., et H. Sauppe, *Oratores Attici*, pars 2. Zürich: Impensis S. Hoehrii, 1845-50.

Bekker, I., *Oratores Attici*, pars 4. Oxford: Clarendon Press, 1823.

Bembo, P., *Gorgiae Leontini in Helenam Laudatio*, Testo Critico, introduzione e note a cura di F. Donadi. Roma: L'erma di Bretschneider, 1983.

Blass, F., *Antiphontis orationes et fragmenta*, Leipzig: Teubner, 1871.

Buchheim, T., *Gorgias von Leontinoi: Reden, Fragmente und Testimonien*, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1989.

Canter, G., *Aelii Aristidis [...] orationum tomi tres*, pars 4. Basel: Petrus Perna suis & Henrici Petri impensis, 1566.

Diels, H., et W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 6th Ed. Bd. 2. Berlin: Weidmann, 1951-1952.

Donadi, F., *Encomio di Elena*, Roma: L'erma di Bretschneider, 1982.

Graham, D. W., *The Texts of Early Greek Philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press, 2010.

Immisch, O., *Gorgiae Helena*, Berlin-Leipzig: W. de Gruyter, 1927.

MacDowell, D. M., *Encomium of Helen*, Bristol: Bristol Classical Press, 1982.

Paduano, G., *Encomio di Elena*, Seconda edizione. Napoli: Liguori, 2007.

Radermacher, L., *Artium scriptores*, Wien: In Kommission bei R. M. Rohrer, 1951.

Reiske, J., *Oratorum Graecorum, quorum princeps est Demosthenes, quae supersunt monumenta ingenii*, vol. 7. Leipzig: Typis W. G. Sommeri, 1773.

Spatharas, D., *Gorgias: An Edition of the Extant Texts and Fragments with Commentary and Introduction*, Glasgow: Glasgow University Press, 2001.

Untersteiner, M., *I Sofisti, Testimonianze e frammenti*. vol. ii. Firenze: La nuova Italia, 1961.

2. その他関連文献（欧文、日本語）

Denniston, J. D., *The Greek Particles*, 2nd Ed. Oxford: Clarendon Press, 1970.

Diès, A., *Autour de Platon: Essai de critique et d'histoire*, 2^e tirage revu et corrigé. Paris: Les Belles lettres, 1972.

Dodds, E. R., *Gorgias*, Oxford: Clarendon Press, 1959.

Donadi, F., "Nota al cap. VI della Poetica di Aristotele: il problema dell' ὄψις." *Atti e Memorie dell' accademia Patavina di Scienze Lettere Arti* 83 3 (1970-1971) : pp. 413-451.

— "Gorgia, Helena 16. quel 405." *Bollettino dell' Istituto di Filologia Greca di Padova* 4 (1977-1978) : pp. 48-77.

Duncun, T. S., "Gorgias' Theories of Art" *Classical Journal* 33 (1938) : pp. 402-413.

Guthrie, W. K. C., *The Sophists*, Cambridge: Cambridge University Press, 1971.

Kerferd, G. B., *The Sophistic Movement*, Cambridge: Cambridge University Press, 1981.

Melikoff-Tolstoj, S., "Zu Gorgias' Helena 13." *Berliner Philologische Wochenschrift* 49 (1929) : pp. 28-29.

Päll, J., *Form, Style and Syntax: Towards a statistical analysis of Greek Prose Rhythm: on the example of "Helen's Encomium" by Gorgias*, Dissertationes studiorum Graecae et Latinorum Universitatis Tartuensis vol. 3. Tartu: Tartu University Press, 2007. (http://dspace.utlib.ee/dspace/bitstream/handle/10062/4308/pall_janika.pdf?sequence=1にて閲覧可)

Schenkl, H., "Zu Gorgias ἐγκώμιον Ἑλένης." *Philologus* 26 (1867) : 566f.

Scholten, H., *Die Sophistik: eine Bedrohung für die Religion und Politik der Polis?* Berlin: Akademie Verlag, 2003.

Scott, C., *Gorgias Sophist and Artist*, Columbia, S. C.: University of South Carolina Press, 2001.

Smith, B., "Gorgias: A study of oratorical style." *Quarterly journal of speech Education* 7 (1921) : pp. 335-359.

Stolpe, J., "Les manuscrits de Gorgias." *Eranos* 68 (1970) : pp. 55-60.

Sykutris, J., "Gorgiae Helena. rec. O. Immisch." *Gnomon* 4 (1928) : pp. 11-18.

Tasinato, M., "Gorgia, Encomio di Elena." *Verifiche* 34 (2005) : pp. 3-8.

Untersteiner, M., *The Sophists*, Trans. K. Freeman. Oxford: B. Blackwell, 1954.

Zajonz, S., *Isokrates' Enkomion auf Helena: Ein Kommentar*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2002.

ディールス-クラント『ソクラテス以前哲学者断片集』第V分冊 内山勝利篇 内山勝利ほか訳. 東京: 岩波書店, 1997.

納富信留『ソフィストとは誰か?』京都: 人文書院, 2006.

ハイニマン『ノモスとピュシス: ギリシア思想におけるその起源と意味』広川洋一ほか訳. 東京: みすず書房, 1983.

3. ギリシア語著作の日本語訳

アイスキュロス『アガメムノーン』久保正彰訳. 東京: 岩波書店, 1998.

アリストテレス『弁論術』戸塚七郎訳. 東京: 岩波書店, 1992.

エウリピデス『ギリシア悲劇全集8 エウリーピデースIV』細井敦子ほか訳. 東京: 岩波書店, 1990.

プラトン『ゴルギアス』加来彰俊訳. 改版第44刷. 東京: 岩波書店, 2007.

ホメロス『イリアス』全2冊 松平千秋訳. 東京: 岩波書店, 1992.

—『オデュッセイア』全2冊 松平千秋訳. 東京: 岩波書店, 1994.

4. その他

Kühner, R., *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*, 3rd Ed. Hannover: Hahnsche Buchhandlung, 1966.

Lausberg, H., *Handbuch der literarischen Rhetorik*, München: Hueber, 1960.

Schwyzler, W., *Griechische Grammatik*, München: Beck, 1977.

Smyth, H. W., *Greek Grammar*, Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1956.